附西會詠彙

元二輯

特257
46

始

特257
46

附而會詠系

元二輯

時雨會は吾が爲にはいとも樂しき歌會なり。そは余の最も愛する京都の地にあること、其の一なり。會員のよく睦み合ひて道に志の篤き、其の一なり。余の關係する歌會は多く遠隔の地に在りて年經れど會員の顏見知らぬも多きが常なるを、此の會の諸君のみとは大方、年に一回は相逢ふ機會あるのみか、又共に手を携へて舊都內外の神社佛閣に詣拜し、兼ねては又、名勝舊跡をも探りなどして、見聞知識を新にする事を得る、また其の一とやいはまし。而して此の會が創立已來八年間の作歌を選錄して時雨會詠草第一輯と題し印刷に附せられしは昭和九年の事なり。爾來年を閱すること十指に近く、去年三月には開會の數、既に二百回に及びきといふ。由りて詠草第二輯出版の議熟し。余にも一言をと需められしは、思へば同年六月のことなりけり。されど時局間に於ける此種の業は、容易の事に非ず、隨つて時日も要すべければと、思ひたゆみてのみある中に、はや終の頁まで組み上りつとの知らせに、驚きあわてつゝ、よくぞと喜び勇まるゝにも、會員諸君の熱意はさる事ながら、專ら事執り持ちて其の

衝に當られし竹村仲城君の勞苦のほどの偲ばれて、
おのづから知られてうれし歌もちて國護らむの心構へも
といはるゝになむ

昭和十八年一月下旬

鳥野幸次

時雨會詠草 第二輯

御歌所寄人 鳥野幸次先生選

昭和九年

新年宴會

つねならぬ時にたちたる新としは祝ふ宴もつゝまやかにて　曾根源作
新年のうたけのむしろすめみこのみなれを祝ふ寄書もしつ　北川舜治
酒のあち始めてしりぬにひとしの宴に父のかはりをはして　竹村仲城
おもしろき福引ありて新としのうたけにきはふ村長のいへ　福井剛之
歌の友うちつとひ來てさゝやかに幸をはいはふ宴たのしも　三木正康
新年の宴賑はふあれましゝ皇子よろつ代といはひはやして　曾根源作
新嫁の加はりしよりとしほきのうたけ一入にきはひにけり　福井剛之

巫女

かむなきか持つ笹の葉の色あせて湯たての業や時移るらむ　曾根源作
ともしひのゆらく御前に白衣の姿きよくも見ゆるみこかな　野口白糸
舞殿は松のみとりにかこまれて立まふみこの影すか〳〵し　恒村夏山

うつくしき少女まふなり神樂岡神のみまへに袖かへしつゝ　黒田こと
みあかしの影に御幣なひきつゝいつく少女の神さひて見ゆ　福井剛之
すすの音も清くきこえて神樂まふ巫女うつくしき神のみ社　村田さと
鈴ふりて舞ふ白衣のみこ見れは遠き神代のしのはるゝかな　野口白糸
御神樂の囃子につれて舞ふみこの跡をおふなり諸人の目は　北川舜治
鈴の音のいともみやひて廣前の御神樂殿にみこの舞ふ見ゆ　堀田末尚

奉祝　皇太子殿下御降誕

敷島のみちゆく吾等大みこのみあれことほく歌なからめや　竹村仲城
日のみ子を言ほきまつる言の葉は唯萬歳の外なかりけり　山本兼豐
春の宮生れたまひしよろこひのこゑひゝかせむ雲の上まて　曾根源作
大みこのみあれことほく歌よまむ同し道ふむ友とつとひて　竹村仲城
國をあけて祝ひそ奉る次の世を知し召へきみこあれまして　青木とよ

壁

木の芽にるみやひ心は新室のかへの色にもあらはれにけり　曾根源作
落書のしところのこと大寺の築土はいたくけかされてあり　青木とよ
睦ましく一つ井戸汲む長家人かへもやふれて隔てさりけり　福井剛之
新室の壁は聚樂の土ぬりてうつり如何とふすまをそ見る　黒田こと
火守の愛宕の札もはられけりいともすすひし田舎家のかへ　竹村仲城
さとの子かいたつら書に汚しけりぬりかへられし大寺の壁　同人

おほ方の世の人心かくやあらむ表はかりをかさるかたかへ　山本兼豐
歌よみし人の心をはかりかねてひねもす吾は壁にむかへる　同人
新しくぬりし白かへいとはやも見ぬまに子らは落書をしつ　野口白糸
すみあれし吾家は鼠おほくして穴をあけたり室のかへまて　村田さと
人事はいはしと思ふ壁にさへ耳ある世とのたとへ思へは　黒田こと

紅梅

いつくしきをとめにあひし心地しぬわらやの軒の紅梅の花　福井とよ
なつかしき庭作りかな鉢前にくれなゐふかき梅のかをりて　竹村仲城

稚松

天そゝる大木となるもありむへし群かり生ふる園の若松　竹村仲城
叢かりて稚松生ひぬたはふれに子らか埋みし松ふくりより　同人

笹

住吉に詣て來つらむ麥わらのひとかたつけし小笹かつくは　竹村仲城
ふく風にさわく小笹の音さひしひとり山路をゆく旅にして　同人

旅餘寒

さえかへり又ふる雪に豫定をかへてこもりぬいてゆわく宿　竹村仲城
春なから梅またさかぬ陸奥のたひこそうけれ雪もふかくて　伊與田德房
梅の香のかをらぬ宿はなけれとも風また寒きはるのたひ哉　曾根源作
たつね來し梅の蕾はかたくしてさむさをかこつ月の瀬の宿　福井とよ

吾妹子かそへし眞綿にはるの夜のさむさわするゝ旅館かな　山本兼豐
かさぬへき衣そほしきはるきぬと心ゆるしゝ旅にはあれと　曾根源作

猫

親の目は築土の上にひかりけり庭にあさるゝ子猫まもりて　竹村仲城
おこたれる主にも似す文机のしとねはけふも猫のしめたる　福井剛之
鷄のときつくる樣なかめつゝ猫はむしろにまたねむりけり　福井とよ
爪ときて鼠をねらふ姿にも似あはしからぬひさのうへの猫　堀田末尙
親猫か子に添乳せり日たまりにをり〳〵尾ふり耳をふり筒　山本兼豐
ふみをよむまと靜なりひさの上にねむれる猫の喉の音して　北川舜治
抛やれは何處迄もとおひゆきて手毬にさるゝ子猫うつくし　福井とよ
貰はれし子猫の幸をしらすして親はなきつゝけふも尋ぬる　曾根まつ
此處彼處衢へ歩きて生みし子をとられしとする猫の愛しさ　野口白糸

鶯

すりゑする手もいさみけり日にそひて節のとゝのふ鶯の聲　福井とよ
かにかくと思ひなやみてならぬ歌のはつかしきかな鶯の聲　竹村仲城
病める身の日こときく哉日あたりのすのこにすゑし籠の鶯　蓮久子
うた筵にきはしにけりほからかになく鶯のとなりよりして　青木とよ
ほの〳〵と霞こめたる梅園になく鶯の聲そのとけき　野口白糸
朝な〳〵ほからけくなく鶯のこゑをきゝつゝ床をはなるゝ　村田さと

窓

山住の友とひ來れははろ〳〵と都見さくるまとをひらきぬ　竹村仲城
玉ことの音もゆかしくきこえ來て燈もるゝたかとのゝまと　同人
東山比叡の高ねもゐなからに見えてよろしき友かやのまと　同人

堤　堇

渡るへき橋は遠くもなりにけり堤のすみれつみすゝむまに　竹村仲城
よもきつむ少女の籠に一束のすみれ見えけり加茂川つゝみ　同人
渡し場に吾をまたせてすみれつむ子らは堤を往き返りつゝ　山本兼豐

旧　友

學ひやの旧き友らも巡りあへはをさな子抱く母となりぬる　野口白糸
送り來しわか學ひやのたよりにてふるき友らの此頃をしる　同人
打とけて語りあふ社樂しけれ逢はて久しき友にはあれとも　三木正康

壺

砂糖入れし壺を覗けはしらぬまに小き手形のつける可笑さ　野口白糸
木の芽うる店の大壺みやひ名のはられてあまた肩並へけり　竹村仲城

遊　絲

のとかなる春の光は道はたの石にも見えてかけろひのたつ　竹村仲城
大空に雲雀もなきてかけろふのもゆる野のへの長閑なる哉　黑田こと
つなかれし牛も眠りて岡のへに陽炎もゆる春のまひるま　曾根まつ

長閑なる春日をあみてはり物をする手さきにも陽炎のもゆ　鹿江鹿子
土筆つむ少女のかけもまほろしの如くに見えてもゆる遊絲　山本兼豐
ひるさかり陽炎燃ゆるうら畑の土に親しむけふのやすみ日　蓮久子
根芹つむ小川のみつもぬるみ來て春のとかにも陽炎のたつ　黒田こと

伊勢詣して

常ならぬ世におひえつる心さへ靜まりにけり伊勢に詣てゝ　竹村
いつまでも涙こぼれてかしこさに胸迫りきぬいせの神垣　鹿江仲
ことそきし昔のまゝの宮つくりかへり見よとの御心かしこ　北川鹿子
神風の骨にしむこそかしこけれ五十鈴の川を渡るやかても　福井舜
守札うけてかへりぬ國の爲いくさのにはにいつる子のため　堀田剛治之末尚

待花

都をとりはしまりしより人皆のまつものにする丸山のはな　福井
ぬひあけし晴着み乍らさくら花さくを遲しと待ちわふる哉　野口剛
たゝならぬ時にしあれどはなをまつ老の心は神もゆるさむ　山本白糸
待ち遠く思はるゝ哉花さかは母ともなひて見にもゆかむと　三木兼豐
丸山の花のゑまひのおそきかな都をとりはとくはしまれと　曾根正
客人をいるゝはかりに整のへて茶屋の主も花をまちをり　野口源作白糸

人形

外國ととりかはしつゝ幼子のよしみを結ふひとかたもあり　福井剛之

文机の上にならへる人形にやさしく見えぬ少女子の室　青木と
もてあそふ幼子のこといつしかも汚なくなれり人形のかほ　野口白糸
忙しき母のかはりに人形をいたきていねし吾子のいとしさ　同人
幼子は母の言葉のまねしつゝ人形抱きていたはりにけり　同人
假睡（うたたね）の兒に抱かれて人形も添寢するかな眼をはつむりて　蓮久子
いとしみて口つけしたる跡ならむ幼子かもつ人形はけたり　竹村仲城
雛殿に火をはともして人形をそといたきみぬ老のわか身も　福井
美しきころもをきせて人形を老いたるはゝの今もめてをり　曾根源作
寫眞と並ひてたつもさひしかりかたみとなりしちこの人形　福井剛之
はしかやむかなしきちこの枕へにとりとめもなく飾る人形　三木正康

老鶯

汗はみてのほる若葉の山かけにこゑなつかしく鶯のなく　福井と
花ちりてさひしくなれる嵐山松の木の間にうくひすのなく　青木と
村人は皆田にいてゝしつかなる若葉の庭にうくひすのなく　蓮久子よ
花は皆ちりてあとなき吾庭の春のなこりにうくひすのなく　竹村仲城よ

靜波

靜なる池の面かなつり人のなけたる餌よりなみをたたせて　竹村仲城
沖遠くふねの煙のたなひきて波靜なりあさなきのうみ　青木とよ

苔

吉水の螢のいはやそのかみの法のしつくに光るあをこけ　山本兼豐
はちうゑの松にも千代をしのふかな身に纏ひたる苔衣見て　同人
とりへ山とふ人もなき奥つきの倒れしまゝに苔むしにけり　同人
ひるも猶くらき杉村おのつからひと方はかり苔のむしたる　竹村仲城

花滿山

花は皆さきそろひけむ白雲の外にいろなきみよしのゝ山　福井と
わけ入らむ道はいつこそふもと迄埋みはてたり花の白雲　宮竹長穂
はつかにも塔見えて大寺のありとしらるゝはなのやまかな　竹村仲城
うかれ出る人多きかな上野山さきものこらぬ花のときとて　永野幸恒
一本の松いちしるく見ゆるかな山はさなから花にうもれて　竹村仲城

紀貫之

松風の音もなつかし裳立山うたのひしりのねふるあたりは　竹村仲城
女子となりてかゝれし旅日記にやさしきひとの心見えけり　同人
もたて山きみかおくつき訪ひ來れは松風の音も歌心地する　福井と
君ならて誰か書き得むめゝしかる女さひするかなの日記を　三木正康
裳立山松ふく風そつたへけること葉の花の千代の香りを　福井剛之
雲立山ねふれる君をなつかしみ小笹わけつゝ詣て來にけり　村田さと

櫻にそへて

ともに來ぬ君かためにと花守にこひて折りつるこれの一枝　曾根源作

かくはかりさき匂ひけり嵐山ちりはてぬまに君もとひませ　野口白糸
春のうたきかまほしさに吾宿のをしき一枝の花を手折りつ　福井とよ
山かつか花をる時にゆきあひてこひし一枝きみにさゝけむ　黒田こと
吉野山花見てかへる家つとのなかの一枝をきみにわかたむ　同人

佛

つき〳〵に友にわかれて吾も亦佛をたのむ身となりにけり　福井剛之
法の師か誠しやかに道とけと佛の心もつはいく人　山本兼豐
たきものゝかをり殘れるみ佛を室のかさりとする人もあり　福井剛之
おほ寺のはひりに立ちて詣て來る人を見おろす佛いかめし　曾根源作
おひえつゝ登る山路の石佛をろかみにけりすかるこゝろに　竹村仲城
性あしき我もすくひのみちかひにもれぬかうれしみ佛の前　青木とよ
かさねつる罪ふかゝらむ身の後をたのみて老は佛をろかむ　曾根まつ

苗代

裏山にのぼりて見れは苗代田かたちとり〳〵青みそめたり　黒田こと
土かへて蒔きし籾米水の面にみとりの色をみせ初めにけり　村田さと

竹影

おい松か枝には見えぬ涼風をそよける竹のかけにしるかな　福井とよ
うゑおきし軒の吳竹のひ〳〵てかけうつすなり月の夜の窓　黒田こと

牧

すなほにも掟まもりて小羊のはなちかひとも見えぬ牧かな　竹村仲城
夕日さす牧場にひゝく笛の音にあそふ羊のかへりゆく見ゆ　福井とよ

更衣

樟桂わか葉さしたる上加茂の宮にまうてぬはつあはせ着て　北川舜治
時鳥初音戀しくなりにけりすか〳〵しくもころもかへして　福井とよ
人なみにかへてみつれとなつ衣また袖さむき五月雨のころ　山本兼豐
ませ垣の卯の花白くさきそめて袂もかろきひとへ着にけり　村田さと
大空に泳く五月の鯉のことかろくなりけりひとへきぬきて　青木とよ
わか葉さす並木のかけを凉しけに人そゆきかふ衣かへして　曾根源作
古袷けふぬきすてゝ去年の秋仕立てし單衣きるこゝちよさ　黒田こと
糊つけて肌のさはりも心地よき浴衣にかふる夏となりぬる　堀田末尚
繪日傘をさす手もかろくみゆるかな薄色衣にかへし手弱女　弘世秋野
單にと着替さすれは身輕るさに子らは一入いたつらをする　野口白糸
身輕くもひとへにかへて庭さきの楓のわかは見る心地よさ　黒田こと

惜

今日の日は再ひ來へき物ならす時を惜しみていさ勵みなむ　蓮久子
又使ふをりもやあると殘し置し品を捨つるかをしき清め日　青木とよ
我身には派手になりたる衣なれと人に讓るは惜しまるゝ哉　野口白糸
見落しのありし計りに勝てる碁の惜くも敗となりにける哉　福井剛之

たゝかひの場にいてたつ武士は命にかへて名を惜しむかな　福井とよ
をしけれと友におくらむ師の君の歌なつかしきこれの短册　同人
いひふりし事にはあれと過易き時を惜しみて勵みあはなむ　弘世秋野

初夏朝

まとおせはうはらの花のかをり來てひとへ衣をおもふ朝哉　福井とよ
籐椅子に腰をたろせはつめたさのいまた身にしむ初夏の朝　野口白糸
かけかへし麻の暖簾に市中も朝目すゝしきなつとはなりぬ　福井とよ
すく〳〵とのひゆくまとの若竹のつゆすか〳〵し初夏の朝　野口白糸
苗賣のこゑすゝしくもかよひ來て心地よきかな初夏のあさ　竹村仲城
鰹魚うる聲いさましくきこゆなり若葉すゝしき朝の巷に　同人

友

たのみもし賴まれもする友ありて心つよくも世をわたる哉　黒田こと
吾好むものとゝのへて待つといふ友の情そうれしかりける　竹村仲城
何事も皆打あけてかたらるゝ人そすくなきとものなかにも　同人
吾心つよくおほゆる苦しさもわけふあふ友を持つと思へは　月見草
契りおきし友は來すしてつとひ日の歌の筵そ淋しかりける　福井とよ
わ子のためよき友も哉師ともなり兄ともなりて導かるへく　同人
友とひて又新しき友得たりはからすもせしうたかたりより　同人
樂しみをわかつは多しかなしみを共にする友少かりけり　福井剛之

時鳥頻

貴船川いはなつりつつ杜鵑しはなくこゑをなつかしときく　山本兼豐
山深くいるかひありて杜鵑なくこゑきゝつ此處にかしこに　黒田こと

河水漲

あやふさに渡られもせすみなきりて橋桁あらふ大川のみつ　竹村仲城
村人はつくはやかねにつとひけり堤あやふくなれる水嵩に　青木とよ

錆

うらの畑見すて幾月やみぬらむ鍬はあかくも錆はてにけり　北川舜治
からかねの軒はの樋のおのつから苔むすか如見ゆる青さひ　山本兼豐
常ならぬ時の切戸の掛金はいたくもさひてあけられもせす　竹村仲城

樗

鮎つりてかへる堤の道のへにうすむらさきのあふち花さく　伊與田德房
梅のみも木の間かくれに色つきてあふち花ちる山てらの庭　山本兼豐
さみたれの庭のみとりのたえまよりあふちの花の紫の見ゆ　村田さと
砂あそひする子まもりて木下かけ彳みをれは樗はなちる　青木とよ
梅雨のはれま待ちえてほす傘にとなりの庭のあふち花ちる　曾根源作
なくもかなとおもひし庭木花さきて是そ棟と友のをしふる　蓮久子
五月雨の雫もにほふ心地してあふちはなさく庭のおもかな　弘世秋野
五月雨のはれまを待ちてとひ來れは樗ちるなりやま寺の庭　福井とよ

朝かせのふきのまに〳〵紫の花うつくしくあふちゆらけり　蓮久子
ゆふつきのほのめく庭に紫のあふちの花のにほふすゝしさ　黒田こと
しつかにも筧の水の音のしてあふち花ちる山てらのには　伊與田德房

大原女の圖に

市にうる花をかしらにいたゝきて出町の橋をわたる大原女　曾根源作
清水の塔をなかめて大原女かあしやすむるは五條はしかも　福井とよ
川かせのふきやしぬらむ大原女かかつく手拭片なひきする　同人
みやこへは程遠からむいたゝける薪おろしていかふ大原女　曾根源作
紅のふさのたすきに花めせとよふこゑさへもきく心地する　竹村仲城
都にも稀なるよき子その眞柴我に賣らすや汝の名のらすや　北川舜治
たはねたる薪かろけにいたゝきて渡りゆくなり加茂の川橋　黒田こと
うつくしき花の籠をはいたゝきていけるか如しこれの繪姿　村田さと
花めせとよふかとそ思ふ大原女か籠をいたゝきて歩む姿は　福井とよ
外國のさまのみ學ふ今の世に大原女すかたなつかしきかな　蓮久子
いたゝける花はつかしき大原女は古き都のおもむきにして　同人

蚊

朝かほの水貯ふとかめおきてとなりのをちは蚊をは育つる　竹村仲域
叩きなは目をは醒さむうまいする乳子の額に藪蚊とまれる　福井とよ
ふけぬれは蚊遣火きえておひし蚊の再ひ室にいれる詫しさ　同人

あすよりはかや掛や覽小夜更て籠の金絲雀の羽ふく音する　福井剛之
山百合の花手折むとわけ入れは目もあけかてに藪蚊襲ひ來　山本兼豐
いつのまに吸ひあきにけむ足許にくみの如赤き蚊の落て居　三木正廉
何けなく小暗き土間の桶とれは羽音高くもいつる蚊のむれ　同人
すや〳〵と眠りしちこの目覺めけり藪蚊の一つ顏に止りて　伊與田德房

下　女

いたはりて召使はなむ下女の親の心をおしはかりつゝ　竹村仲城
名をよへといらへさりけり下女は隣の媼と世かたりをして　同人
賑はしき室をはさけて下女はくりやの隅にゐねむりをする　同人
此家のあるしのしつけしのはれてゆかしかりけり下女の樣　福井とよ
ものことをおろそかにせぬ下女の心つかひそ嬉しかりける　青木とよ
國なまりいたして人を笑はせぬいそきてものをいへる下女　同人
かけひなたなく働けは人も皆ほめそやしけり家のはしため　黑田こと
年永く使ふはしためいつとなくうたよむすへを覺えける哉　蓮久子
いまの世に珍らしきかな下女か昔わすれすいつもとひ來て　同人
なかゐする人をいとひてさかさまに厨に箒たつるはしため　山本兼豐
下女かたちゐふるまひ見るにつけあるしの心しられける哉　三木正廉

夏　旅

汗しみし衣をは宿の浴衣にとかへてくつろく夜の心地よさ　竹村仲城

夏休家こそりゆくしほあみはたひとしもなし妹のふるさと　北川舜治

待　涼　風

草も木もなえたる庭に水うちて夕すゝしきかせをこそまて　野口白糸
みつうちて庭の燈籠に火をいれつ夕すゝしき風を待つとて　竹村仲城

糸

心地よく羽織の衿のかへりけり一すちつよくつめし糸にて　竹村仲城
しまりなき人と見えけりよそほひし晴着につける色糸の屑　同人

都　夏　月

みちか夜の月もしらみぬあけ近き大路の往來暫しとたえて　蓮久子
祇園會の囃子の音もなかれ來てすゝしく浮ふ加茂川のつき　弘世秋野
青々と蓮の葉茂るしのはすのいけにうかへりなつのよの月　永野幸恒
東山すゝみかてらに來て見れは木の間をもれて清き月さす　村田さと
すゝみふねゆきかふ市の川つらに匂ひそめたり夏の夜の月　伊與田德房
をすまきて月なかめけり夏のよの四條川邊のすゝみする家　三木正廉
すゝしさをおほゆる夜ふけ月いてゝ都大路も月まはらなり　青木とよ

蹇

昨日かも清水にゐしあしなへをけふは北野に又見出てけり　福井剛之
けなけにも學ひの道はぬけいてぬ松葉杖つく足なへの子は　竹村仲城
ますらをの高きほまれもいたはしきゐさり姿に忍はるゝ哉　伊與田德房

うなゐ子に車おさせて足たゝぬ親はあはれをこひつゝそ行　同人
國の爲いさををたてしますらをも今は譽のあしなへにして　蓮　久子
子供らに綱を曳せてあはれこふゐさりも夜は歩むとそきく　村田さと

海水浴

厚化粧してはゐつれといつしかも潮にやけたり蜑の子の如　野口白糸
こひを得てかへるもあらむ潮浴のはまに眞夏をすこす若人　青木とよ
水心しらぬわか身は砂濱に宇なとかきつゝあむる子を見る　竹村仲城
あまの子をつとへてけふは砂濱に踊らせにけり潮浴に來て　同人
鳥羽の海あまか口笛ふく樣をまねつゝけふも潮あみをする　黒田こと
常ならぬ時にたつ身をきたへんと兒等伴ひてうみ泳きする　蓮　久子
あまの子と見まかふはかり日にやけぬ都少女も潮浴をして　福井とよ

大工

家たつる工等をかしふくみゐる釘を口よりとりてうちつゝ　野口白糸
うま酒にかほほてらせて祝ひをり棟上げをへし木工のむれ　青木とよ
あか〳〵と灯つけて棟上けのうたけ賑はふ木たくみのいへ　同人

夏石

道のへの石さへあつし流れ出る汗をふかんと腰をおろせは　野口白糸

夏魚

水かめにいけし河骨花ちりておよく小鮒の泡をふく見ゆ　蓮　久子

夏虫

はしゐする簀子の下になく虫は近つく秋をつくるなるらむ　蓮　久子

秋蓮

ひくらしのなく山寺の古池にうらさひしくも蓮のさきたる　山本兼豐
野分ふき葉はやれはてし蓮池に殘れる花も見ゆるなりけり　蓮　久子

捕虫

提灯をもちたる人そ野邊にたつ影したひよる虫とらむとや　福井とよ
いるゝへき籠をと子らの騒くなりをすに止りし虫を捕へて　竹村仲城

鋏

幼子の何をかきりしもとめ來て間のなき鋏齒のこほれたる　村田さと
日頃我つかひなれたる此はさみ錆はあれともきれ味のよき　黒田こと

野分

菊の杖ゆひなほしつゝあらかりしよへの野分を翁かこてり　福井剛之
朝顏のさきかゝりたるませ垣を打たふしても吹く野分かな　曾根源作
また青き柿のみあまたおちにけり野分のすきしけさの裏畑　福井剛之
わか庭の秋をよそひし葉鷄頭もうち倒れをりよへの野分に　伊與田德房
芭蕉葉は箒のことくなりにけり野分にあれし庭のかたすみ　竹村仲城
田人らの涙もともに交るらむあらしのふきし稻におくつゆ　福井とよ
いろつきし葡萄は土にまみれけりよへの嵐に棚のくつれて　同人

産婆

とりあけの業ならひけり若くして夫にわかれしあはれ吾友　福井とよ
國まもるますらをなりととりあけの女も勇む湯浴させつゝ　大谷兵甫
とりあけし男いたきておのか身のうみけむ如も嫗ほこれり　福井剛之
生れしは男子なりと産室より告くるおうなのこえに力あり　曾根源作
とりあけて日のみ子抱く助産婦の心やいかに嬉しかるらむ　大谷兵甫
赤き衿かくる娘もゆるされてとりあけうはの札をかけたり　村田さと
腰抱きてうみの苦しさ助けつゝいま一息とうははけます　青木とよ
くるしさにうめく女を見守りぬとりあけ人も汗なかしつゝ　同人
安らかに生れしちこをとりあけてやからと共におうな喜ふ　曾根まつ

鶏頭

瓜の蔓とりはらはれしはた中にさきて目につく鶏頭のはな　福井とよ
羽ぬけとり餌あさる庭に鶏頭のいろこくさきてひる靜なり　曾根源作
紫苑さく畑の片隅けいとうのいよ〳〵あかし夕日あみつゝ　福井剛之
露わけてをらはやみ靈祭る日の朝の庭のけいとうの花　竹村仲城
とくおきて露なから見む秋たちて色もまされる鶏頭のはな　黒田こと
猩々の頭にも似てけいとうの花くれなゐにもゆるそのかな　蓮久子
捨植の鶏頭の花さきいてゝおもむきそひぬ小庭なれとも　三木正康
稲葉ふくかせもすゝしき田井中の庵のかきねに鶏頭のきく　山本兼豊

朱

かきいれの朱の筆色さやかにて見るもゆかしき古書のぬし　三木正康
學ひ子は鼻高々としめしけりあけの丸のみつけるきよかき　竹村仲城
をとめ子にふさはしきかなやさしくも花模様ある朱の針箱　野口白糸
なき友かいれしこかきの朱のいろに心ひかるゝこれの刷卷　曾根源作
わかうたもとゝのひにけり師の君か一筆そめしあけの力に　竹村仲城
我うたもよくとゝのひぬ師の君の加へられたる一筆の朱に　福井とよ
古書は朱のしるしに埋りけり父かまなひのあともしられて　竹村仲城
みるたにもむかしなつかし三組のあけの杯いろもかはらて　山本兼豊
いなり山松にいり日のてりそひていろはえにけり朱の玉垣　曾根源作
久々に朱泥の器とりいてゝ木の芽煮てけりあかつきのまと　蓮久子
よみゆけは我歌乍ら見まかひぬ師か直されし朱の文字にて　野口白糸
うた卷をいそき聞きて求めけり天とかゝれしあけ筆のあと　福井とよ
琉球のつとに貰ひしぬり椀のあけの此いろたくひなきかな　同人

星夜流

みかはしてまたゝく如し幼子かゆひさす空にひかる星かけ　福井とよ
天の川さやかに見えて數多きほしのひかりもともに秋めく　同人
渦まきてなかるゝ見れは水底に雲よふ龍もすむかとそ思ふ　福井とよ

文くはる人もすへなく返りけりさかまく水に橋はなかれて　竹村仲城

穂

いかはかりかくすとすとも表はれむ嚢の中の錐の穂先は　三木正康

毛虫よと母に示して叱られぬエノコロ草の穂をはつみ來て　竹村仲城

仲秋會友

わくらはにとひ來し友も加はりて月見の宴いよよにきはし　曾根まつ

はれ渡る最中の月をあるしにてこよひの宴はつへくもなし　福井剛之

圓かなる月のこよひは珍らしく歌のつとひにかくる友なし　蓮久子

いまはたゝ山の端昇る望月をまつはかりなり友のそろひて　曾根源作

望月のかけに心をうはゝれてこよひは友のもたしかちなる　野口白糸

望の夜の月をめてつゝ高樓にうたかたりせむ友とつとひて　弘世秋野

なくかりの一聲もかな望の夜の月すみわたる歌のむしろに　福井と

友は皆いひあはせねと集ひけりこよひの月に歌よまむとて　竹村仲城

さえわたる今宵の月をめてなから友とかたりぬ心ゆくまて　大谷兵甫

乃木將軍

奈須の野に耕へしつゝも朝夕に君みかきけむ日本たましひ　福井と

けなけにもとはのみ伴にたゝしけり御車出る時をはかりて　竹村仲城

いとし子を先にたてゝも國の爲歎きを見せぬ君そたふとき　三木正康

大君のみあとしたひて桃山にありし日の如つかへましけり　黒田こと

人心ひきしめにけり大君のみあとしたひてたちしたまの緒　福井剛之

大君のみあとしたひて國民に示しましけりおみのまさみち　福井と

大君もうへなひまさむみあとをはしたひてゆきし人の眞心　野口白糸

桃山のみさゝきもりて永久にしつまる神のみこゝろたふと　山本兼豐

大君のみあとしたひてゆきましゝ日本心のしたはしきかな　蓮久子

桃山の御陵近くしつまりて永久につかへむ君か御たまは　青木とよ

大君のみあとしたひてゆきましゝ人の心そたふとかりける　村田さと

大君をいまも守らむ桃山にみあとしたひてゆきましゝきみ　大谷兵甫

軍神とまつられつゝも桃やまの御陵永久にまもりますなり　黒田こと

大きみのみあとしたひて永久にみ楯となりし人のたふとさ　伊與田德房

つはものゝ神とはなりて桃山にしつまりませり君か御魂は　同人

紫苑

紫のしをにはさきぬ高けれと花のやさしさ野きくにも似て　福井と

眞直にと思ひしものを野分してたふれしまゝの紫苑花さく　竹村仲城

むかしわか學ひしやかた思ひ出の多き花園しをにほへり　竹村佳子

むらさきの紫苑の花のうつくしさ衣かふときは此色にせむ　野口白糸

鷄頭とたけくらへして咲きにけり千草の中のしをに一むら　福井剛之

水あけのいともよけれは月の友まつ床のへに紫苑をそさす　竹村仲城

秋の色を早くも見せて庭の面にいとなつかしき紫苑花さく　同人

とり〳〵の秋草しける園の中に紫菀の花のぬけいてゝさく　同人
ふく風も涼くなりて秋の園しをにの花のぬけいてゝさく　黒田こと
秋はれの空の色とも見ゆるかな背高くのひてさける紫菀は　福井とよ
村雀おちほついはむ小山田のいほの垣根にしをにはなさく　曾根源作

盃

さかつきをうくる手許の形よさ酒を好めるひとゝしられて　福井とよ
たしなまぬ人の前にそ集ひける宴のむしろめくるさかつき　福井剛之
酒もりに遲れて來つる友に先ふりかゝりけりさかつきの雨　竹村仲城
盃のかすかさぬれは常に似す言葉かろくもなるそをかしき　福井道子
のまぬうちに頰を染たり盃をおほつかなけに持てる少女は　野口白糸
花嫁のもてる手先もふるひけり神のみまへに契るさかつき　同人
さかつきの數重ねけりよろこひの宴に酒をすゝめられつゝ　福井とよ
酒好む友へのつとにもとめけり名所のゑをかけるさかつき　竹村仲城

故郷秋

いねをかる手をはとゝめて我をよふ友もありけり故郷の秋　竹村仲城
おくり來し柿をむきつゝふるさとの昔の秋を子らと語りぬ　蓮村久子
さなきたにさひしき秋をふる里の野となる庭に虫の聲する　竹村仲城
竹馬の友と長夜をかたりけりふるさと訪ひて柿をはみつゝ　同人

雨中木

ふる雨に工は見えて棟上けを終へしはかりの木組さひしき　竹村仲城
谷見れは雨に木立はつゝまれて梢はかりそくもの上にたつ　蓮村久子

鎌

柴おひてかへる翁の瘠こしに夕日のさしてひかるかまかな　弘世秋野
明日も亦眞柴こらむとかとかはに月かけあみて翁かまとく　山本兼豐

田家秋

山踏につかれし足も休めけりかとに菊さく小田のひとつ家　福井とよ
いねかりて家路をいそく村人に日くれの小路賑はひにけり　蓮村久子
蝗とふ小田の畦道きりはれて柿のみあかきひとつ家の見ゆ　竹村仲城
柿のみをきてはついはむ村鳥のこゑもさひしき小山田の里　曾根まつ
親とりは刈田の落穂あさりつゝ雛をよふなり秋はれのあさ　蓮村久子
遠方のまつりの大鼓きこえ來てたりほ波うつひるの靜けさ　同人

就職難

勤め口たえてなきかなかなか〳〵に學ひの道をふみし許りに　竹村仲城
つとめ口なきか悲しさ次々につてをもとめて賴みめくれと　同人
つとむへき處あらはとたのみけりおなし縣の人をたよりて　福井とよ
めゝしくもつとめ得すとて歎くより男々しく立む己か力に　永野幸恒
かつ〳〵も學ひの庭は出つれと勤むる口のなきそわりなき　村田さと
つとむへき口なかりけり學ひやをいてゝも遊ふ人多くして　三木正康

あたらしき背廣姿はよけれともまた勤めなき兄のいたましし　野口白糸
學ひやをいて丶荒波こきゆけと目的の島につくよしのなき　鹿江鹿子
學ひやを共にいてにし友は皆一としふれとまたあそひをり　竹村仲城
打たえて久しき友の文見れは子のつとめ口たのみおこせる　同人

秋聲

空高くはれたる町にひゝくかな木の子めせてふ女子の聲　福井とよ
さゝ栗の夜風におつる音もして蟲の音さひし山かけの庵　曾根まつこ
風と水に家うしなひしひと〳〵のなけき聲きく秋そ淋しき　黒田こと
百とりはかけをひそめて柿のみの赤き山畑百舌鳥の音高し　竹村仲城
椎のみを捨ふわらへのこゑたえてさひしくきこゆ山寺の鐘　同人
ふるさとを思ふ夕に桐の葉のちる音さひしにはのくさむら　曾根まつ
なき友の奥津城とひて朝露をはらひつゝきく秋風のこゑ　山本兼豐

鹽

おのかしゝ片ひく聲を浴せけり鹽をつかみてたてる角力に　三木正康
賑はしく來る人まてりさかり場の店の門皆盛り鹽をして　竹村仲城
今も猶さとのならひと朝ことに鹽ひとつかみ門におく見ゆ　山本兼豐
武士のなさけそしるき年頃のあたにも鹽をおくるこゝろに　蓮久子
いつ迄も乳を慕ひ來る子の爲に鹽を付つゝ呑ませても見ぬ　野口白糸
又立ちて鹽をまきけりすまひてのけふの敵やいかに手強き　竹村仲城

九月廿一日颱風襲來被害夥しく又の日仲秋なりけれは　伊與田德房
傷つきし子らも交りてなき友の魂祭りするすかたいたはし　村田さと
あれくるふ風に學ひや倒れけりあはれ子ともを下敷にして　同人
物すこき音のきこえて屋根瓦雨のことくにたえす飛ひ來る　蓮久子
見るか中に文屋倒れて叫子に世もはつるかと思ひける哉　伊與田德房
浪花津のほこりとしたる塔も打たふしけりけさのあらしに　同人
をしへ子を脇に抱へて師の君の命をすてしこゝろをそ思ふ　同人
うす暗き火かけかこみてうから皆すきし雨風しのふ夜は哉　同人
師の君の心つくしに學ひ子のあやふき命すくはれにけり　同人
あれはてし學ひの庭にさひしさを一入そふるもち月のかけ　同人
思ひきや糺の森のおい杉をあとなくかせの吹きをらむとは　曾根源作
かたもなくこはれし家の壁下にさりけなく鳴く虫のこゑ聲　三木正康
隣とち嵐にやれし垣こしにつゝかなき身をほきかはしけり　竹村仲城
つかのまに荒野の原となし果てぬ家ふきとはし大木倒して　同人
產土神の森さひしくもなりにけり野分の風に大木たふれて　同人
風あれし同しき空と見えぬかなすみにすみたる望の夜の月　同人

殘紅葉

ひえとりのなく音も寒き森かけに一本殘るもみちはのいろ　竹村仲城
木枯に庭の紅葉はちりしきて殘るもさひし四ひらいつひら　村田さと

敲　門

まとかなる夢やふりけり電報とはけしく門をたゝく音して　村田さと
門たゝく音しきりなり隣家は外出やじけむよひ寢をやする　竹村仲城
電報と門たゝかれてまよなかにおきいてゝ見れは隣也けり　福井とよ

恤

たらぬ身の糧をさきても恤まはや乳のみ子抱くうゑ人の爲　山本兼豐
何ものも風にとられてなく人に贈らむものと編めり肌着を　蓮久子
禍になやむはらからすくはむと市にたちいてゝ物賣をする　同人

名所霰

信太山いくさならしの兵士かすゑし火砲にあられたはしる　三木正廉
雪さそふ北山おろしふきあれてあられふるなり岩倉のさと　曾根まつ
大井川くたす筏にちり殘る紅葉さそひてあられふるなり　竹村仲城
ちり殘る山の紅葉はいろあせて霰うつなりきよみつのてら　永野幸恒
立かへりまたぬかつきぬ靖國のみやしろまうて霰ふり來て　丹澤露
千鳥なく加茂川堤さよふけてあられたはしる音のさむけさ　弘世秋野
うるはしく玉と碎けてあられちる東寺の塔を仰きてそ見る　庄山冬子
ちり殘る紅葉たつねて八瀨のさと來れははやくも霰ふる也　黑田こと
ちり殘る紅葉もかなととひくれは高雄の山はあられふる也　村田さと
成相のみ寺にまゐる旅人のをかさの上にあられふるなり　伊與田德房

かれてふす尾花か上に月さえてあられたはしる大原の野へ　竹村仲城
さをしかの聲も寒けに聞えつゝあられふるなり春日野の原　同人
松さむくあられふるなり初雪を比良に見る日の唐崎のはま　大谷兵甫

龜

朝ゆふに優婆夷うはそくまうて來る御寺に翁の放ち龜する　伊與田德房
おもむろに首をもたけて弄ふ子らを覗かふかめのをかしさ　竹村仲城
池の面にうきしつみする龜の子を岸のいはほに親は見守る　弘世秋野
ふるてらの蓮の池をは這ひいてゝ水際の岩にかめは甲ほす　曾根源作
朝日さす池の中洲にうちむれてせをほす龜ののとかなる哉　曾根まつ
なけしゑにあつまる鯉を見おろして岸の巖に龜はせをほす　弘世秋野
巖かに身固めすれと危ふしと見れはゐすくむ龜のをかしさ　竹村仲城
靜にも木かけのうつる青淵に龜あそひをりうきしつみして　三木正廉
おほ寺に詣てゝ見れははなち龜おほくならへて翁うりをり　村田さと
うなゐらの友となりつゝ大寺のみ庭の池にかめのあそへる　福井剛之
浦人は何の幸そとよろこひぬあみにかゝりしおほ龜を見て　伊與田德房

初冬鳥

目白なくこゑ寒けなりしら〳〵と批把の花さく寺の軒端に　竹村仲城
山からの聲ものとかにきこえけりかへり花さく小春日の杜　同人
日向をはしたひて下りぬみたらしも氷りそめたる神垣の鳩　野口白糸

いたはしに朝霜見えてさと川の寒きなかれにあひる遊へり　山本兼豐
初狩のかへりなるらむ犬つれて獲物の鳥をかつきゆくひと　蓮田久子
うつくしくみのりしのきの南天をついはみに來る鵯のこゑ　村田さと
殘しおきしはたの柿のみ霜見えてたちさわきなく雞のこゑ　黑田こと
時雨ふる八瀨の山道わけ來れは紅葉はちりてひえとりの鳴　福井剛之
初霜に大根の青葉いろはえて日白さへつるあさのうらはた　同人
ちり殘る紅葉色よき山かけにすみこそ渡れこからめの聲　竹村仲城
野つかさの森に火砲の音さえて落穗ひろひし鶸のむれたつ　同人

斧

山かつかたつきの友と肩にする斧こそひかれ朝日あみつゝ　竹村仲城
あらけつりする我歌もはえにけり斧もてたたす師の力にて　三木正康
何處にて捕へたりけむ斧の柄に熊の子つりて山をいて來る　福井剛之
遠方に眞木わるをちか振あくるやかてもゆ斧のひゝきは　竹村仲城
薪寺の名にはそむかす法師等のまきわるおのゝ音高きかな　山本兼豐
夕餉たく煙はるかに見おろして斧かつきつゝかへる杣ひと　蓮久子
年のせきせまる建前木工のこゝろせくらむおのの音する　同人
冬こもる備をいそくむら人か斧をかつきてやまかよひする　同人
ておのうつ音もうれしくひゝくらむにひ室たつる人の心に　同人
わけいりて迷ふ山路にうれしくも聞え來にけり手斧うつ音　竹村仲城
ふきあれし風に大木やたふれけむ斧の音高しかみ加茂の森　同人
たふしたる松に斧をはうちこみて木樵はそはに一休みする　野口白糸

寒燈

裸木の森見えすきてみあかしのまたゝき寒し神のひろまへ　竹村仲城
支那蕎麥の笛たえ〳〵にきこえ來て燈さむし町のよつかと　同人

古書

うれしくも疑はれぬゆくりなく棚の古ふみひもときしより　竹村仲城
つき〳〵に新しきもの出て來れはふるき書よむ暇なきかな　蓮久子
又寫し〳〵してつき〳〵にあやまり多くなれるふる書　竹村仲城
手にとりてよむをゆるさぬ古書に心ひかるゝ奈良の文くら　同人

跡

けかさしの眞心みえぬ村人か石文たてし御野たちのあと　三木正康
よへも亦籠の小鳥やねらひけむすのこにのこる猫の足あと　竹村仲城
雨の日を子らは外よりかへり來てたゝみにつけぬ泥の足跡　村田さと
かひ犬の遠き路をは慕ひ來てかへりゆくかな跡をかきつゝ　蓮久子

除夜

初詣こたひも人におくれしと殘るひと夜をもりあかすかな　弘世秋野
國と親の恵はいつか返すへきこよひ今年の負債はたせと　竹村仲城
晴着なと枕へにして子は寢ねつわか悔多きおほとしのよひ　恒村たつ

一年にありつる事をかへり見て思ひ出多く除夜のかねきく　福井とよ
ゆふへ〳〵きゝふるしつる大寺の鐘も身にしむ年の暮かな　曾根源作
樂しさと殘りをしさをこも〳〵にうち亂しけり百八のかね　竹村仲城
除夜の鐘きゝつゝ床に入りし子は半數へていひきかきをり　福井とよ
をけら火をうけてかへれは百八の鐘のひゝきの遠く聞ゆる　黑田こと
新しき年のまうけもとゝのはぬうちに野寺のかね響くなり　曾根源作
身にあまる憂はあれと子らゆえに笑みてきゝけり百八の鐘　丹澤露
人の世のなやみをたてと嚴かになりひゝくなり百八の鐘　同人
何事もくしきさためと御佛の前にぬかつき除夜のかねきく　同人
つき出す鐘をかそへてやからとち年をしむなり埋火のもと　曾根ま
事しけき思ひもことしいぬの年あけよふすゐも勇み立むに　山本兼豐

手袋

手袋の片手を又もおとしけり同しかたのみあとに殘りて　竹村仲城
すか〳〵し雲井に上る貴人のあてよそほひの白き手ふくろ　同人
幾とせかうせて見さりし手袋の片手いて來てまた色のよき　丹澤露
いかめしきみいくさ人のよそほひを清くも見する白き手袋　曾根ま
心せきてそこ此處の店あさるまにおき忘れけむ手袋のなき　庄山多
をさな子か落しやしけむ軒先にひとつ吊せり赤き手ふくろ　弘世秋野
子らの前に大みことのりよむ人の白き手袋清くもあるかな　曾根つ

水つかふ手のつめたさも忘れけりコムの手袋用ひ始めて　永野幸恒
休みえて親やとふらふ兵士の手ふくろ白し小田のなかみち　野口月見草
いはひ日の裝ひしたるあて人の手にすか〳〵し白き手袋　蓮久子
革もあり毛糸もあれと片手のみのこる手袋もちひかねつも　山本兼豐
いく度も妹の手にはめてみぬ毛糸手ふくろあねはあむとて　福井とよ
ほゝゑめるち子の手ふくろふとみれは一つ處に二つ指入る　丹澤露
むかしにはみしこともなきしなれと女よろこふ炊事手袋　村田さと

歳暮

なか〳〵に事そおくるゝ年の暮かれもこれもと心あせりて　庄山多子
歌つとひするまは暫しわすれけりくれゆく年の忙しさをも　福井とよ
くさ〳〵と集めはすれと送るへき歳暮の品を定めかねけり　村田さと
數へ日となれとも人手足らすしてせいほの使おくれ勝なり　同人
歌筵まてと來まさぬ友達はくれゆくとしにせはしかるらむ　蓮久子
はゝ親はもろ手に包さけなから子をなためをり羽子板の店　福井とよ
羽子なとをはやとりいてゝ幼子のたのしけにする年の暮哉　野口白糸
子らの爲そろひの晴着縫はむとて夜ふかしをする年の暮哉　同人
年の市みめくるもよし故鄕の子らへのつとを品さためして　青木とよ
としのくれ店とり〳〵の趣にみやこ大路のにきはしきかな　福井大三郎
なに事もなき人の身を羨みてくれゆく年をおくるけふかな　三木正廉

新年の設けせむとて寒さをはかこちなからも町へいてゆく　野口月見草

旗

なり所つくるとならし坪はかる小旗たつ見ゆ岡のあなたに　山本兼豐
家をもる女なき家あはれなり旗日すきてもはたのなひきて　青木とよ
たゝみまて繪の具ぬりけり幼子かいくさ遊ひの旗造るとて　福井とよ
いつ見ても何處に見ても日の丸の旗は尊しあさやかにして　三木正康
新しく家をもちたるわか友におくりて祝ふ日のまるのはた　野口白糸
まりなけの技にや勝ちし若人の譽のはたをおしたてゝゆく　蓮久子
休日の山にのほれは谷深くひとつや見えて日のみはたたつ　同人
滿洲にゆくものゝふを送るらむ小旗の波のうまやうつむる　黒田こと

冬鶴

霜柱たてる眞砂路ふみなからゆたかにあゆむあしたつの群　竹村仲城
冬枯の小田に友鶴あそふなり八代のさとやいかにすみよき　黒田こと

勇士

おのか身も仇のとりてもなかりけむ御國を思ふ益良武夫は　竹村仲城
日の本の人はこゝにとをたけひぬ命をしまぬ大和ますらを　黒田こと

鍋

鍋つりてたく粟飯の味よさに又もとはむとおもふそまか家　蓮久子
なさけある人のめくみを請はゝやと若人まもる市のおほ鍋　福井とよ

昭和十年

歌御會始

世と共にいよゝさかゆる言の葉はみうた始に顯はれにけり　恒村
みまへにてよみあけらるゝ歌人のほまれ思ふも心ときめく　竹村
君と臣のしたしみかはす國風をみうたはしめにみるか尊さ　恒村
奉る民のことはを雲の上にきこしめさるゝけふのかしこさ　村田
傳へきくたにもかしこき大御歌今年は如何おほせますらむ　曾根
しきしまの道そ尊き賤か身も雲の上たかくきこえあけえて　福井
やことなき歌の筵に賤かつむ言葉のはなもかをるめてたさ　弘世

飛行機

國こそり祝ふ都のあさそらをつはさならへて飛行機のとふ　竹村
鳥ふねをあやつる人や雲わけて天津少女のやともとふらむ　三木
小さなる瞳を空にうつゝなき男の子うつくしプロペラの音　村仲
朝日影匂ひそめたる森の上をつはささやかに飛行機のゆく　恒村
はてもなき空をいくさの場にして音勇ましく飛行機のとふ　正康
幾千里へたつる國も天路ゆく舟のちからにちかくなりけり　福井
勇ましき音きゝつけていてゝ見れはは遥なり飛行機の影　恒村
富士のねを下になしつつ鳥船の群とふ樣そをゝしかりける　庄山

わか出しゝ文もはこふか天つ空音勇ましく飛行機のとふ　蓮久子
空高くとふ飛行機の幾度か舞ひかへりけりとりのことくに　同人
ものなへて早きを競ふ今の世は旅もたよりも飛行機にして　鹿江
銀のつはさかろけにおほそらを音いさましく飛行機のとふ　曾鹿源
村鳥は逃けまとふなり飛行機の空をとひゆく音におそれて　同子作
けさも亦悲しきしらせ見いてけり丈夫のせし飛行機おつと　弘人

新年獣

勇みつゝ子犬は逃けぬ少女子かつき落したる羽子を銜へて　野世
年ほきの人待つ室の座蒲團を我ものにしてねこのねふれる　竹秋
新しき年をむかへて園の中の熊のをりにも注連かさりせり　村野
新年の休みに子らをともなひてさるのわさ見る岡崎のその　同
赤き布首にかさりて嬉しけにはつ日あひつゝ牛のねりゆく　三木正廉

話

獨居の隣のをはのはなしこゑあやしと見れは猫とかたれる　竹村仲城
幼子は翁を圍みて笑ひをり手まねましりのはなしきゝつゝ　福井とよ
女子のつとひも暫ししつかなりうたよむひまは話ときれて　青木とよ
ほまれある人の話を幼子にははかたれりそひ寝しながら　伊與田徳房
涙をは滲ませてをりをさな子はまゝ子いちめの話きゝつゝ　野口白糸
乳のみ子にははをとられて幼子は父といねたり話きゝつゝ　青木とよ

太文字にかゝれしけさのにひふみの話のたねとなれる一時　竹村仲城
もやひ井戸夕けのまうけする頃は話そおほき女つとひて　黒田こと
我おりむ驛にはやもつきにけりのりあふひとと話するまに　伊與田徳房

探梅

あしよわき我は遠出もなしかねて近きわたりの梅さくる哉　村田さと
たつねむとくるま下れはわか袖に梅か香かよふ青谷のさと　曾根まつ
訪ひくれと梅はまたしき青谷におなし心のともとあひたり　福井剛之
寒けさもけふは忘れて野に山に梅をたつねてくらす樂しさ　黒田こと
ことし又たつね來にけり月か瀬の梅の香のなつかしくして　村田さと
新聞にたよりをは見てとひ來しにまた蕾なり青谷の梅　福井とよ
春雨のはれし朝にとひ來れは匂ひそめたりみそのふのうめ　福井剛之
たとり來しつかれも今はわすれけり梅よくさきて祠ある丘　丹澤露

槌

七五三はえて神のみつるきうつ槌の音は工の場にみちたる　曾根まつ
金槌の音いさましくきこえけり工かうてのさえもしられて　竹村仲城
過ちて我手をうちぬふりあけし金つちはふと釘をはつれて　野口白糸
かぬち人力をこめて打おろすつちのまに〳〵鐵そのひゆく　曾根源作
いくさ船よそほひのなる今日の日の空に一入たかきつち音　山本兼豊
賢しさは童の顔にしられけりのみとしいはゝ槌を持ち來む　同人

飢になく世の人々をすくふへくこかね打出す槌ほしきかな　竹村仲城
注連はえて劍をきたふかねうちの心そこもるつちの音にも　福井剛之

餘寒月

さえかへり雪けもよほす黄昏の空さむけにも見ゆる三日月　三木正廉
鶯のはつ音もらしゝうめか枝に又さえかへる月のかけかな　野口白糸
すきまもる風は梅か香おくれとも月なほ寒し底ひえのして　庄山多子
月はまた寒きひかりに照しけりかつ〳〵さきし梅の木末に　竹村仲城
山の端の霞もいまた立ちかねて月影さむしきさらきのそら　堀田末尚
さく梅に匂ひそへたる月かけもまた寒きかな春あさくして　黒田こと
春なからまた身にしみてふく風に霜さへ見えて月の輝やく　蓮久子

病める人に

枕邊のくすりの瓶をうちなかめ歌こゝろ煉る君をこそ思へ　三木正廉
切りとりし趾の痛みも薄らきて日に〳〵よしと聞か嬉しさ　山本兼豐
學ひやの主なき机さひしかりやまひやしなふ君待ち顔に　蓮久子
いたつきと戰ふ力人にありこゝろしつかにいえむ日を待て　青木とよ
心よりはなれさりけり朝な夕なやみてやつれし君かおも影　野口白糸

鶯馴

籠のまへに人のたてともなれ〳〵て節おもしろく鶯のなく　黒田こと
春來れは雛鶯もかこなれてふしとゝのはぬはつ音をそきく　村田さと

音信

見馴れつるその筆癖もなつかしき一なりけり友のおとつれ　竹村仲城
旅路より友は音信をおこせけり歌かきそへし繪葉書にして　福井とよ

初

吾子をは初めて抱く若き父なれぬ手つきもあやふけにして　庄山多子
うれしくて胸もをとりぬ新むろをたつる朝の手斧はしめは　竹村仲城

朝雲雀

菜の花にねむる胡蝶をよそに見て朝勇ましくなく雲雀かな　三木正廉
朝月夜しらめる野邊の末遠くかすみかゝりて雲雀なくなり　堀田末尚
朝かすみわけてきえゆく飛行機の趾を占めてもなく雲雀哉　曾根まつ
爽やかにのほる朝日を浴みなから大空高くひはりなくなり　黒田こと
少女子か堇つむ野の空高くひはりうたへりあしたのとかに　弘世秋野

乳母車

小さき手をあけて物請ふ幼子に母のよりそふうはくるま哉　恒村たつ
桃太郎うたひていてし乳母車小さきゆめをのせてかへりぬ　同人
店前に乳子をのせたる乳母車おきて子守はあみものをする　村田さと
やすらけくねふれる乳子を小車にのせて押しゆく若き人妻　曾根源作
年若き妹脊二人かうはくるまかたみ代りにおしてゆく見ゆ　山本兼豐
青物とちこをのせつゝ乳母車おしゆく母もみゆるいちかな　黒田こと

春日東山にて

靜なる所えらひておもふとち花なかめつゝうたをよむけふ　野口友子
舞姫の日傘にちるもおもしろし春風わたるきよみつの花　同人
のとかにも花そさきたる東山風にあれたるあとは見ゆれと　三木正廉
赤き布首にまきたるさと人もうちつゝく見ゆ祇園きよみつ　竹村仲城
清水のうてなにたちて見さくれはけにこそ花の都なりけれ　福井と
いつしかも踊の火影みえそめぬ圓山あたりはなめつるまに　同人

忙

何くれとなすへき事の多くしてけふは煙草もへらぬ也けり　大谷兵甫
歌おもひ火種もたえし折からに人のとひ來て忙かしきかな　村田さと
すこやけくすこすか嬉し忙しく其日〳〵におはれなからも　月草
つき〳〵に友は筆をはさしおきて心せかるゝ歌むしろかな　福井と
俄にもまれひと來とのしらせありて門はき室の備へする時　竹村仲城
出舟の時やちかつく積荷するよほろか群のせはしけにして　庄山冬子
少女め子は恥らひつゝも衣ぬふに忙しけなり嫁きゆくとて　野口友子
歌心おこらすなりぬ昨日今日わかなりはひの忙しくして　三木正廉

遠蛙

さと川の流の末の水くるまめくるあたりかかはつなくこゑ　堀田末尚
小夜ふけて蛙の遠音きこえ來ぬ小田には早も水やひくらむ　竹村仲城

朝山

ほのほのとあけゆく空の横雲にわかれて見ゆる大比叡の山　堀田末尚
吉水のかねさわやかにひゝきつゝ横雲ひらく朝のまるやま　竹村仲城

荷

若人か宿かへすらし小車の荷にはつくゑをうはつみにして　竹村仲城
かつく荷の重き程こそしられけり歩む度ことおふこ靡ひて　同人

花見の圖に

けふのみは掟の外と裝ひてはなに見らるゝひともありけり　竹村仲城
老人の心もはなにうかるらむあふき手にして舞ひ出にけり　曾根まつ
幕ひきて益荒武雄の花見るは事なきみよの姿なりけり　大谷兵甫
さかりなる花の木影に幕はりて短册もてりうたかゝむとや　村田さと
甘酒の店もあるらし少女子かあくらによれる花の木かけに　竹村仲城
うまし女か花の木の間をうち仰き指さす方や鳥のさへつる　山本豐
舞姫のそてのにほひも見ゆるかな幕めくらせる花の木陰に　福井と
花かけにうたけの筵ひらきつゝうき世を酒に樂しむもあり　堀田末尚

指環

昔わかめてにしものを銀のゆひわは人のみむきたにせぬ　村田さと
つゝましく少女は指環ぬきてをりすきやの前に手を洗ふ迚　福井と
あさましき女心も見ゆるかなもろ手にあまた光るゆひわに　竹村仲城

人しれすはめて少女の微笑むはせのおこせたる指環なる覽　同人
おしてともして用ふらし荒くれし男の指にひかる指環は　同人
湯あかりの化粧をなほす女子の指にはめたる石のきらめく　青木と
かさられし指環なかめていつまても光にまよふ少女子の群　福井よ
たまさかに指環はむれは吾指の節の高きかいとゝみにくし　同人
なきはゝの記念となりし指環をは肌身離さすなつかしむ哉　村田さ
指環をはこゝたくはめて誇りかにふるまふ人の心みにくし　庄山冬子
若き身の悲しかる覽病みふして弛みのまさる指わみるにも　大谷兵甫
幼とちいろとり〳〵のヒースもて指わ造るか樂しけにみゆ　弘世秋野
白き指にふさはしき哉少女子か一つはめたるくれなゐの玉　同人
人妻としられけるかな花やかに着かさる人のはむる指わに　野口陽光

花　曇

大佛のかねもきこえて花曇り都の春そのとけかりける　蓮久子
山の端のさかりの櫻けふは又見えぬそをしき空のくもりに　黒田こと
花くもりけふの休はたちいつる人のこゝろに障らさりけり　福井剛之
そらくせの長閑けきけふの花曇り醍醐山科めくりてもみむ　山本兼豐
思ふまゝにならぬ此世や見盛りの花にはけふも空の曇りて　竹村仲城
雲低く垂れたるけふの櫻狩日やけをせぬかうれしかりけり　野口陽光

欠　伸

ゐねむりをやかてやすらむ下女はまた宵なから欠伸續くる　福井とよ
する業にうみやしつらむ老人の手は動けとも欠伸のみして　黒田こと
雨の日の文屋靜けしひるさかり小さきあくひの隅に聞えて　蓮久子
いつのまに友は欠伸をしたりけむ笑ふ目許に涙たまれる　野口陽光
友とへはいらへもなくて日面のすのこに猫の欠伸する見ゆ　竹村仲城
はしたなき吾欠伸をは恥かしと見れはかたへの翁も又する　同人
老人のいさめ又かと若人はいつるあくひをかみしめてきく　同人
けふ一日乘ると思へは汽車の中先たつものは欠伸なりけり　福井剛之
ふしとにて兩手もろ足さしのへて大欠伸する時はわかよそ　山本兼豐
又祖父の同しくりことはしまると欠伸殺してきくか苦しさ　野口陽光
旅路より父の歸るを夜更まて子らは待ちをり欠伸しつゝも　月見草

加　茂　祭

葵橋わたる車のおとすみてみやひつくせるかもまつりかな　弘世秋野
東舞あふひかさしてまふ樣のむかしゆかしき加茂まつり哉　山本兼豐

夕　川

柳かけつゝく燈火見えそめて夕やみせまるかもの川つら　竹村仲城
さと川の夕にきはし鍬あらふ田子のかたへにあひる遊ひて　同人
馬洗ふなかれの末にゆふつゝのかゝやきそめてくるゝ里川　同人
水車めくるわらやの夕やみに火かけなかれてみゆるさと川　山本兼豐

撒

休日のひるまの市路水をまく時なかりけり人のつゝきて　弘世秋野
あて人の來ます時來とよほろらか白砂撒けり道を清めて　竹村仲城
苦しまてえつる黄金をまくか如費ひすてけりあさましき人　同人
何事かいひのゝしりてゆく人のあとに鹽まく舌うちをして　同人

初夏旅

桐の花草屋の門にさく見えて凉しき風の汽車にいり來る　福井とよ
ゆく所若葉かをらぬさともなしすか〳〵しきは此ころの旅　竹村仲城
草苗とる少女のうたを聞きなからふむ足かろしこの頃の旅　同人
若葉ふく風このもしろく也にけりいつしか春を旅に過して　曾根源作
野も山も若葉にはゆる近江路を姿かろけにたひひとのゆく　大谷兵甫
若鮎のかをりのよきを炙らせて酒くむ保津のやとり樂しも　曾根まつ
法螺をふく行者の群とあひにけり若葉かをれる觀心寺みち　三木正康

駕籠

足よわき母ともなひて比え詣谷のそは路はやまかこにしつ　蓮口久子
道のへの花もをられす山駕に足をいためて乘りしはかりに　野陽光
のほり來て清水のもとに憩ひをれは貴人のせて山駕籠の行　曾根黒田こと
若き母今求め來しつりかこに乳子をは乘せて手を叩きをり　同人
おほはゝの嫁入駕を藏の中にいまもつれるを珍らしみ見る

今は世におくれて軒に吊られけり貴人のせしこともある駕　竹村仲城
雲助の昔かたりをおもひいてゝさひしくなりぬ山かこの中　福井とよ
めつらしき鳥のなく音に山駕のたれまきあけぬ槇のした道　曾根源作
山かこの力によりてのほらはやみねきはめぬも心なけれは　同人
山奥のいてゆの里を訪はんとてきさを下れは駕の待ちをり　蓮久子
山にのみ今は殘れるかこにのりて昔の旅をしのひつるかな　野口陽光

藤

ゆひかへし棚の青竹うれしくも半かくれぬ藤さかりにて　青木とよ
今宮の祭のけふを松か枝にかゝりてにほふ藤なみのはな　山本兼豐
若鮎くむおきなも見えて谷川の岸にかゝれりふちなみの花　竹村仲城
赤き布かけしあくらも備へつゝ人まつ園にふちのはなさく　同人
たつね來し宇治の寺庭木の芽うる店のかたへの藤盛なり　青木とよ
さし出る老木の松にまつはりて藤の花さく保津のかはきし　蓮久子

水

少女子はゆくへき方に迷ひけり道しとゝにも水をまかれて　竹村仲城
すくれたる物とてはなき我家にて誇とするは井戸の眞清水　三木正康
かつ〳〵もなりにし歌をかゝむとて硯を見れは水の乾ける　竹村仲城
吾先に水をと請へり幼な子か駈くらへしていききらしつゝ　福井とよ
たちまちに蘇へりけりしをれゐし鉢の植木に水をそゝけは　同人

老かみのつとめとはして朝な〳〵神の御棚に水をさゝくる　山本兼豐

夏　獸

紫陽花のはなの木陰にねむりつゝ三毛の親猫添乳する見ゆ　山本兼豐

むさゝひの飛ふ音凄し夕くれは椎の花さくもりの木かけに　竹村仲城

夜　街

赤き火の車もすきて夜半の街ゆききの人もしはしとたゆる　蓮久子

我庵は都なれともかたほとり夜みせかへりの町のさひしさ　同人

灯の光をうけてをとめらも花と見えけりよるのみやこ路　福井とよ

詞

二十年の旅をかへれは母親はことはもなくて唯なみたくむ　蓮久子

わすられし里の詞もいつるかな同しあかたの人のつとひに　同人

苺　狩

若葉さす武庫の山々なかめつゝ鳴尾の里にいちこかりする　福井とよ

裡無のしめるもしらて朝露のまたひぬ畑のいちこつむかな　福井剛之

苺狩畑のみとりをかきわけてつむ手にひかるくれなゐの玉　鹿江剛子

たのしけにつむ少女子の頰の如いろよき苺かこにみちたり　弘世秋野

いさみたちて子は喜へと苺狩酒なき我は物たらすして　山本兼豐

今朝かへし單衣のそてかろく鳴尾のさとにいちこつむなり　曾根まつ

つくり得し今年の出來の嬉しさに友を招きぬ苺かりにと　蓮久子

繪日傘をさせる少女のうれしけにつめる苺の籠さけてゆく　庄山冬子

田ゐなかの友をとひ來てはからすも苺狩するけふの樂しさ　村田さと

作りえし手並誇らむわか畑のいちこかりにと友をまねきて　弘世秋野

麥打の音もかすかにきこえ來るせとの畑にいちこかりする　伊與田德房

鋸

なれぬ手に鋸もては板よりも吾いきのまつきれむとはする　福井剛之

鼠穴ふさかむとして用ふれと蒲鉾いたもきれぬのこきり　村田さと

花瓶にさす木の枝の長しとて少女とり出す小さきのこきり　蓮久子

枇うたのこゑに比ひて鋸のおとすみわたるきそのみやまち　山本兼豐

木工のさえたる腕そしられけるひく鋸の音をきくにも　曾根源作

やけてなほ幾日もあらぬ黑谷の寺に嬉しきのこきりの音　村田恒村

學ひやに子らか用ひし鋸をいまもくりやの炭きりにする　庄山冬子

よみせにてかひし鋸たゝまれて便よろしと山ふみに持つ　竹村仲城

つかのまに大木も板となしにけりたくみのにはに廻る鋸　黑田こと

生け花の枝をきるとて少女子かもつ鋸の手もとあやふし　野口陽光

厚き板もやゝにきれけり鋸をひく度ことに粉をちらしつゝ　蓮久子

堂たつと木屋に大槻よこたへておほかひくなり墨を辿りて　同人

國のため功をたてしものゝふの片身の太刀はのこきりの如　同人

文屋にて習ひ來つると子らは今何つくるらむのこきりの音

山梔花

むしあつき日はくれそめて我宿の垣根に白しくちなしの花　曾根源作
くちなしの花さきにけり五月雨に朝きよめせぬ庭いしの陰　福井剛之
五月雨の夕を友の宿とへはひりしつかにくちなしのさく　竹村仲城
さみたれの雨にぬれたる庭石をかこみてさけり山梔のはな　同人
山梔のはなさきにけり陶ものゝひきにおきたる庭石のへに　三木正廉
はれやらぬ雨の朝をくちなしの花のきよさに暫しみとるゝ　庄山冬子
さみたれのふりしく庭にさきいてゝ閨まて薫る山梔のはな　福井剛之
くちなしの花の香窓にかよふなり五月雨くらき山下のいほ　曾根まつ
灰色にけふる五月の雨の日もいとさやかなりくちなしの花　青木とよ
苔むせし庭のいはねに色はえて凉しくにほふくちなしの花　山本兼豐

不倒翁

倒してもたふれさりけり此翁やまとこゝろの腰もすわりて　山本兼豐
世の人を教へかほなりたふしても又起きあかるこれの翁は　竹村仲城
嚴めしき顔はしつれと幼子にもてあそはるゝ達磨をかしも　福井とよ
なけし子をにらみて又も起上る翁たのもしわれもならはむ　曾根まつ
子供らにおきあかり小法師轉はして人の道とく祖父もあり　蓮久子

氷柱

うすものを器の風にそよかせて氷のはしらかこむをとめ子　福井とよ

手ふきもて氷柱をなてまはしひたひにあつる老人も見ゆ　竹村仲城
かふ品を見るは少し夏のみせこほりはしらの陰にすゝみて　同人

觀瀑

おちたきつ瀧の響にましりつゝ誦經のこゑも聞え來にけり　蓮久子
瀧津瀨の水もやせたり電のちからをおこすしろにひかれて　同人
おのかみも共におちゆく心地して見る目くるめく谷の大瀧　青木とよ

碁

客人のけふはかちけむ嬉しけに石をあつめて立あかりけり　福井とよ
あを筋をたてゝ石をはみつめをり友も今宵は敗のつゝきて　竹村仲城
たちまちに數多の石をころしけりすみの一手を過ちしより　同人
開かるゝ宴まつまのひと時を隅に碁をうつひともありけり　蓮久子
なりはひの道におはれて遂に吾碁をうつ術もしらて老けり　同人

水泳

さとの子か水泳くなり脊負ひ來し子をは柳の陰にねさせて　竹村仲城
うき袋もちて汀にたゝすみぬたくみにおよく友なかめつゝ　蓮久子
つりに來てつれぬ間へをいやすらし竿なけすてゝ水泳する　竹村仲城
なか〳〵にあとそ苦しき日盛の暑さしのくと水およきして　同人
泳く子をうらやましけに眺めつゝうき持つ少女淺瀨にそ立　同人
日に燒けし腕さすりつつうなゐらか泳きの技を誇る川きし　曾根まつ

少女子も琴の調へはそこ〳〵に水およきにといそく休み日
暑き日はうらの濱へに晝餉さへわすれて子らは水泳きする
浮袋たよりて來つる海原にたゝむとすれは足のとゝかぬ
男の子らにひけはとらしと女子も泳きを競ふ世と也に鳧

東郷元帥

對馬沖すくる仇艦みいてつゝ下しゝ言葉いきてのこれり
天津日もかすまむ仇のふなけむり神風待たて君そはらへる
あたふねの前におもかちとらせつる膽こそ勝の基なりしか
思ふたに涙くまるゝ仇の艦見ゆときゝつるをりのこゝろを
鷲の國のふねを沈めて日の本の名を世にあけし海の益荒雄
おろしやふね底の水屑となしはてゝ國安らけくなしゝ君哉
永久に世にのこされむ三笠艦きみかいさをの記念とはして

祇園會

のる人のあふく團扇のひらめきに鉾すゝみゆく祇園會の町
吹く風に祇園囃のたくひ來ぬいまかやまほこ動きそむらむ
をすこしの火影すゝしき家々の屏風みめくる宵まつりかな
おもしろき祇園囃の近つきぬ薙刀鉾はいま渡るらし
祇園會の夕をまちしをみな子のはれの浴衣の涼しけに見ゆ
若人のはやしいさまし夏祭そらにそひゆる山ほこのなか

蓮久子　大谷兵甫　野口陽光　伊與田德房　庄山冬子　山本兼豐　曾根源作　竹村仲城　弘世秋野　曾根源作　竹村仲城　福井剛之　曾根源作　福井とよ　蓮久子　黑田こと　黑田こと　曾根源作　福井剛之　福井とよ　竹村仲城　同人　堀田末尚　山本兼豐　伊與田德房　竹村仲城　蓮久子　竹村仲城　同人　曾根源作　同人　蓮久子

笛つゝみふしおもしろく曳く鉾に昔の手ふり見るそ嬉しき
ともしひのかすをつらねて笛の音も涼しく響く夜の山鉾
山鉾はいまかへり路につきぬらむ祇園囃の調はやむる
拾ひえし粽かゝへてをさなこか友にほこれり祇園まつりに
日さかりの都ねりゆくみまつりも笛の音のみは涼しかり鳧
山鉾を見むとてつとふ人垣に四條大路もせまけなりけり
みやひたるはやしの音も高らかに扇の波をわくるふなほこ
うつくしき飾り屏風のとり〳〵にみるめまはゆき夏祭かな
みやひたる祇園囃子もきこえ來て都大路のよるそにきはふ

水害

大あめのふりつゝきたり賑はひし都の町をふねかよふまて
ふる雨をおそれてこもる軒下を加茂の大橋おつとふれゆく
米の價も俄に高くなりにけり水になかれし小田おほくして
うゑ終へし小田もはてなき泥海と變りはてたり堤つひえて
ふり續く雨に川瀨のあふれ來てみやこの大路水のさかまく
名に高き加茂の川橋うちなかす水のちからのもの凄きかな
家も田も水にとられて加茂堤狂ひゆくありふりしきるなか

葛花

吉野山昔のあとをとひ來れは秋かせ吹きて葛のはなちる

世をさくる山の友とへは葛かつら道を塞きて花咲きにけり　竹村仲城

待雨

昨日今日水あらそひのありときく雨よふれかし堰こゆる迄　福井とよ

水車水なき川にかけられてたつかけあはれゆふたちもかな　山本兼豐

麓

のほらむと思ふ高峯の麓道いしふみふるくこけむしてあり　黒田こと

三笠山はゝは麓のあくらにていとけなき子を守りつゝ待つ　蓮久子

富士詣

白妙の綿をほくすにさも似たり不二の嶺に見る曉の雲　竹村仲城

富士詣小笠つらねて夏草のしける裾野をよこきりてゆく　福井剛之

岩室に夏のひとよをまろ寢して朝日をろかむ不二の頂　竹村仲城

頂のなかめの樣をかきそへて子はおこせけり富士の繪葉書　大谷兵甫

一足は一足ことにすか〳〵しよの塵たゝぬ不二のやまみち　山本兼豐

石室をいてゝ日の出を拜めはなつ猶さむしふしのいたゝき　福井とよ

發聲映畫

うた姫のこゑを殘しておもしろき寫し繪は早きえ果にけり　福井とよ

かけ繪とは思はれぬ哉唇のうこくまに〳〵こゑきこえ來て　竹村仲城

丸山の園にものいふかけゑをは見せむと兒をはかた車しつ　蓮久子

俳優の聲もさなから聞え來てかけゑ見るとは思はれぬかな　青木とよ

何故と問はれて母は困りをりものいふ映畫いふかしむ子に　竹村仲城

物いふと聞て入りてもみたり鳧常は好まぬかけ繪なれとも　同人

草庵蟲

鳴く虫もうらやすからむ草庵はとひ來る人のあし音もせて　山本兼豐

世をさけて行すます法の師のくさのいほりになくむしの聲　竹村仲城

萩の花はひりにさきて苔あをきくさのやとへは虫の聲する　青木とよ

秋草の中にむすへる吾庵はひるさへむしのこゑしけくして　野口陽光

鳴しきる虫の音はたとやみにけり吾待つ歌の友や來つらむ　福井とよ

蚊遣火の煙たなひく伏いほの軒端にちかくくさひはりなく　伊與田德房

墨

便りよく世は成にけり文字かくにすらて事足る墨も出來て　竹村仲城

かるたとる少女は又も敗にけむみめよき顏に墨ぬられをり　福井とよ

顏にまて手にまて墨をつけにけり子の手習ひを畢る頃には　野口陽光

紙のへて首ふる翁のかたはらにあせ流しつゝをの子墨する　竹村仲城

あさやかに筆の力のあらはれて文字さへ匂ふ墨の痕かな　福井とよ

唐國の友のおこせし墨すりてやまと歌かくたにさくの上　蓮久子

月宴

月の出を待つまにゑひのまはりけむ瓢枕に寢るとももあり　竹村仲城

高殿に月の宴やひらくらむおはしまちかくをはなかさりて　蓮久子

松　風

淋しともきゝし松風なつかしき友となるまて浦なれにけり　蓮　久子
富も名もねかはて獨り山のいほに松の風きく身こそ安けれ　三木　正康

漆

たらちねのめてし蒔繪の硯箱うるしもかれて手障りのよさ　村田　さと
さなからに漆かための御佛を拜みにけり奈良のふるてら　蓮　久子

野　營　露

夜もすから物見にたてる兵士の劔のさやにつゆそひかれる　堀田　末尚
武士か一夜をあかすひろ野原おくつゆしけし秋ふかくして　大谷　兵甫
つゝ音にテント出れはまろねせし軍衣のつゆにぬれたる　福井　とよ
頒ちあふ莫もいつかしめりけり軍ならしの野へのつゆけさ　同　人
露の野にいく夜の夢かむすふらむ草の枕につゝいたきつゝ　蓮　久子
つゝさきの劔も寒しつはものかたつ野の月に露のひかりて　山本　兼豐
つゝの音もたえてふけゆく習志野の草の伏とに露そ閃めく　弘世　秋野
有明の月かたふきて兵士かしとねの小くさつゆにぬれたる　庄山　冬子

オートバイ

田舍人逃け惑ひをり自動車をさくれは又もオートバイ來て　福井　とよ
みちのへに行幸拜む民草をひきしめてゆくオートバイかな　青木　とよ
人繁き都大路をぬひわけてオートバイゆくはやふさのこと　福井　剛之

まかねちのしかれぬさとを二つ輪の小車すきぬ煙たてつゝ　庄山　冬子
自轉車にのる人々をおひこして煙たてつゝオートバイゆく　福井　とよ
ふくる夜の夢やふりけりオートバイ若者達かのり習ふとて　村田　さと
思はすも吾子はとあたり見廻しぬ音凄しきオートバイ來て　竹村　仲城
幌の如衣にかせを孕ませて逃くるに似たるオートバイゆく　同　人
田舍道とくはしりゆくオートバイ文屋歸りの子らの見返る　曾根　まつ

朝　顏

歌の友たつね來ぬへき心地して日陰におけり朝かほのはち　庄山　冬子

千　屈　菜

かはせみのとひて濁せる里川のあと靜なりみそはきの花　蓮　久子
み佛にさゝけしあとのみそはきを一本そふる床のもりはな　同　人

秋　海　棠

露乍ら折りてさしたり秋海棠茶のゆの友のけふは來る日と　黑田　こと

夕　顏

燈をけしてしつかになかむれはいよ〳〵白しゆふかほの花　福井　とよ

龍　膽

保津川の岩かねしめて匂ひけり草の紅葉にましるりむたう　福井　剛之

桔　梗

墓詣するか少女の繪日傘にうつりよろしき桔梗のはな　青木　とよ

女郎花

とひ來れは床にいけたり女郎花やさしきともの心しられて　蓮久子

つれ〳〵に木の芽味ふ草の庵の垣いろとりて秋さくらさく　伊與田德房

（コスモス）

劍

私のいかりにさやは拂はしな君かみたてのこしのつるきは　山本兼豐

遠つ親のいさをのあとを偲ひけりたゝ一處くもるつるきに　竹村仲城

しめはりて鎚の音する鍛治の家神にさゝくる劍をやうつ　蓮久子

靖國の宮に詣てゝなつかしき友かつるきの双ごほれをみる　竹村仲城

しかすかに男なりけり劍もていくさ遊ひに日をくらしつゝ　蓮久子

草薙きて仇ほろほしゝみ劍をいつく宮居そかしこかりける　堀田末尚

老ゆとても事しありなは納めたる劍の鞘をはらひてたゝむ　三木正廉

仲秋觀月船にて近江舞子にものして

湖こしに花火の見えて雄松崎月なきよひもなくさまれけり　竹村仲城

踊子の見送りうけて雄松崎かへるかさひしつきもみすして　青木とよ

かゝりては又なかれゆく薄雲の趣そふるつきのかけかな　村田さと

舟まとによりて仰ける處女子の横顔白しもちのよのつき　野口みとり

物すへてまゝにならぬかうき世なり今宵の月の影計りかは　山本兼豐

ゐひしれて罵りあへる人達はくらきかよきか恥もかくれて　同人

おもしろき雲の動きを見たりけり出入る月を打なかめつゝ　竹村仲城

雲にいり雲を離るゝ月見つゝたもとほりする松のしたみち　同人

ものせよと紙と硯をとゝのへて尾花かされる月見ふねかな　青木とよ

秋魚

ゆふくれの宇治川堤さひ鮎を尾花にぬきてかへるひと見ゆ　山本兼豐

とひうをの舟端近くとへる見ゆ野分たちたるくもうつる海　竹村仲城

心地よき秋の風吹く洲に立ちてけふも樂しくはせ釣をする　村田さと

放生の池しつかなる午下りはすのみとひてこひのしつめる　蓮久龍

暮靄

さなきたに往來危ふき夕くれの大路を深くもやのとさせる　竹村仲城

あくた火の影もしつかに暮初めて小田の一つ家靄に隱れぬ　福井とよ

夕靄は二足三足さきにゆくとも見えぬまてふかくこめたり　蓮久龍

鉢

煙草殼林のことく立ちにけりわかうといにしあとの火鉢に　蓮久龍

よき鉢にうつせは品も上りけり夜店にかひし植木なれとも　竹村仲城

大寺の庭に法師はならへけりかたさま〳〵のさほてむの鉢　福井とよ

乘鞍をこえしかたみのたかねくさ小さき花もつ薄鉢のなか　蓮久龍

茸にそへて

枯松葉かきわけなから求め來し秋のみやまの香めてませ　庄山冬子

秋山の落葉の下の一ところ占めしきのこはかくもありけり　青木とよ
去年の秋共に遊ひし山の香のしのひ草ともならはなりなむ　福井とよ
いま送る籠の蕈に去年の秋のいはくらやまを思ひいてませ　福井剛之
君か來む日迄と待ちてとらさりし茸はかくも立伸ひにけり　竹村仲城
友達と茸狩せしたのしさを來ぬ君にもとわかちまゐらす　弘世秋野
山住のあきしのひますよすかにと都の君におくりまゐらす　同人
北嵯峨の秋のなかめも偲ひませ山の香こもるこれの一籠　福井剛之

教育勅語

君か代をうたひ終りし學ひ子かみことのりをは謹みてきく　福井とよ
國民のふむへき道をあきらかに示したまへるみことのり文　堀田末尚
しつまりて里の童もきゝてをり文屋の長かよむみことのり　竹村仲城
おこそかにおほみことのりよむ聲の高くも響く學ひやの庭　同人
おこそかに師のよみ給ふみことのり文屋の子等は謹みて聞　弘世秋野
日の本の民のをしへの鑑にとくたしたまへるみことのり文　大谷兵甫
大みこと胸にきさみてはけまさむ學ひの庭の小さきに民　蓮久子
皇國の花とのらしゝみことのり仰くそ民のほこりなりける　福井剛之
かしこくも下したまひしみ教を堅く守りて國につくさむ　野口みとり

野菊

茸狩のかへさの道にたをり來て小床にきはす野菊ひとむら　竹村仲城

往き通ふ人のかさしとなりぬらむをりし趾あり野への白菊　堀田末尚
わか庵に匂ふのきくは幸ありてけふ歌人の目にとまりけり　黒田こと
川端の野菊たをりてみつそゝきいしの地藏の花つゝにさす　蓮久龍
山ふみのかへりなるらし少女子か一本野菊かさしてそゆく　蓮久子
露しけきすゝきの中の野菊をは盛花にもとをりて來にけり　庄山冬子
なつかしき色に匂へり秋の野の尾花のかけのきくのひと村　同人
故郷のおもひて草と持て來つる野菊にほへり庵の垣根に　黒田こと
あきつとふ里川きしに一村の野菊にほひていとのとかなり　竹村仲城

嚏

酒のゑひ今かさめけむうたゝねの客人甚くくさめをそする　三木正康
湯あかりに嚏する子をふと見れは肌着もつけて遊ひ居る也　野口みとり
人は吾うはさやすらむ又しても風も引ぬにくさめいて來る　同人
いく度か手を口にしてくさめしつ處女は顏を赤くしなから　三木正康
襁褓まく手もあわたゝしみとり子の嚏に心いそくたらちね　同人
友とわれ噂しあへる門の外にくさめをしつゝゆく人のあり　竹村仲城
ゆくりなく胡椒かけたる炙り肉小犬のはみてくさめしに鳧　蓮久龍

狂花

八千草のうつろひそむる庭の面にかへり咲する花も有けり　村田さと
いたつきのいえて嬉しき小春日に園をめくれは歸り花さく　福井とよ

たらちねのよはひ壽く宴とて床のをかめにかへりはなさす　蓮久子
猫の子か欠伸して又うつくまる小春の軒にかへりはなさく　竹村仲城

佳客

妻を子を皆よひたてゝ並へけりゆくりなく來し客人のまへ　竹村仲城
幼子とあされ言さへ交へつゝ心おきなきけふのまらうと　同人
はる〳〵と訪ひ來し友を導きてけふ山寺のほとけをろかむ　蓮久龍

苦

身にそはぬ人事うかと引受けて吾と吾身をくるしめてけり　竹村仲城
笑ひつゝ話す種ともなりぬへしけふの苦しみ耐へて勵まは　同人人
程々になりゆくものをあせりては苦しむ人の世に多きかな　同人人
なりもせぬ望いたきて我と我苦しむ人のおほき世のなか　蓮久龍

茶梅

夕時雨さひしくそゝく山寺の庭のこけちにさゝむかのちる　福井剛之
みそさゝい木傳ふかけも寒けにて藁屋の庭に茶梅のちる　伊與田徳房
力なき冬の日うけて大根ほす藁やののきにさゝむかのさく　曾根まつ
しもふみて友の釜日と訪ひ來れははひりに赤き茶梅のさく　蓮久子
つはふきの花と競ひて吾庭の冬あたゝけくさゝむかのさく　三木正廉
桶のたか架くる翁の竹ふれて花ちりにけりかきのさゝむか　同人人
干柿をつるす軒端に冬の日のはつかにさして山茶花のさく　竹村仲城

八千草のうつろひはてし庭の面にひとり時めく茶梅の花　同人
ふゆかれの淋しきにはに紅のいろ麗はしく匂ふさゝむか　弘世秋野
目白なくこゑものとけき小春日の庭をめくれは茶梅のさく　福井剛之
茶梅の花さきにけりしもかれて寂しくなれる庭のまかきに　曾根源作
籾をする音も聞えて伏いほの庭のかき根にさゝむかのさく　伊與田徳房
もてなしの木の芽味ふ四阿の軒端に近くさゝむかのさく　同人人
日當りに眠れる猫のかけ見えて茶梅さけりゐなかやの庭　同人人
むしろあむ翁も見えて軒近くうすくれなゐのさゝむかの咲　同人人
生垣の中にさきたりさゝむかの白くれなゐの色を交へて　蓮久子
みとりこき葉陰に匂ふ茶梅のうすくれなゐの色なつかしき　野口みとり

鑿

老人は眼鏡をかけてけふも又のみふるふなり何きさむらむ　曾根まつ
あめの日をたき火のけふる工場に何を彫るらむ鑿の音する　蓮久龍
石工火花ちらしてうつのみの音いさましき白かはのさと　福井剛之
槌の音やみつと見れは木工はひかりするとき鑿をときをり　弘世秋野
小鼓の音色妙なりもとめえし手くりの胴はのみやさえたる　青木とよ
あやふけにのみ用ひをり少女子か鎌倉彫をまなひはしめて　竹村仲城
名に高き工か彫りし佛ともしられけるかなのみのあとにて　福井剛之
いにしへの名高き人の鑿のあと國のたからとなりて殘れる　曾根まつ

古寺の門もる佛あり〳〵とちからの見ゆるのみのあとかな　三木正康
み佛の情こもれるまなさしも彫り上けてけり細きのみにて　伊與田德房
み佛をきさむ工のつゝましさ一のみことにみ名をとなへて　山本兼豐
花のあや盆にゑりけり處女子かのみ持つ技を習ひおほえて　福井とよ

初冬街

大根干すわらやも見ゆる田舍町かれ葉をつみて小車のゆく　庄山冬子
襟卷をする人もあり初冬のにはかにさむくなりしまちなか　黑田こと
冬たちしけさの寒さよ道をゆく人はおほかた肩かけをして　福井とよ
とり〳〵のきつけの人に初冬のすかたそ見ゆる都おほちも　山本兼豐

橋

渡り終へし友は招けと危ふさに足のすゝまぬ谷のつりはし　福井とよ
又もとの所にいてしこゝちしぬ大阪のまちはしおほくして　竹村仲城
褄とりて渡る處女もみゆるかなともしひあかき加茂の大橋　青木とよ
ふるさとの川の板橋ふりたれとむかしなからの姿なつかし　曾根まつ
媒介か手際たくみにかけてけりゑにしを結ふわかうとの橋　三木正康
かつ〳〵も渡りし谷の丸木橋ふりかへり見て胸をなてけり　伊與田德房
とり〳〵のよそほひをして架けられし橋は浪華の誇也けり　同人
木の間より繪の如く見ゆ柴人のいま渡りゆく谷のつりはし　同人
幼時川にあそひて渡りつる木の橋今は石となりぬる　青木とよ

ふし拜むこれの人像いつみても心うたれぬ三條のはし　野口みとり
きり花を皆うりをへて大原女か渡りゆくなり出町はしの上　庄山冬子

寒鴉

倒れたる案山子の笠に霜見えて刈小田さむくからすなく也　山本兼豐
北かせの雪しまく野をなきつれて鴉とふなり夕くれのさと　竹村仲城
なきつれてかへりゆくなり夕鴉氷雨にぬるゝ森をめさして　蓮久子

朝市

子をつれて北野の宮にまゐくれは朝たつ市に動かれもせす　蓮久子
おのかしゝ新しき荷をとりあひて喧しきかなあさのうを市　同人

拾

大神のためしをうくる心地せりこかね拾ひし時のわか身は　黑田こと
幼子かひろめの文をとりあけて學ひえし字の拾ひよみする　竹村仲城
世の中は人のまかこと拾ひつゝはなしの種とする人もあり　同人

湊雪

ゆく年の送り荷つめる入ふねにゆたけくつもるけさの雪哉　三木正康
持ちなれし小形カメラに納めけりよさの湊の雪の景色を　伊與田德房
燈臺の火影かすみていりふねの笛しきりなり雪のはこたて　恒村愛山
沖は猶ふりつゝくらし湊へは雪をもつみて船のいり來る　弘世秋野
いそ松は眞白にみえて出入のふねひとつなき雪のみなとに　福井とよ

入ふねも出船もともに白雪をのせてゆきかふ横濱のうみ　三木正康
白妙に埋もれはてし港口ゆきをつみたるふねのいてゆく　庄山冬子

簪

うつむけはゆらきて光る花嫁の前髪さしのうつくしきかな　福井とよ
都見に來つるあかたの一むれは同しかさしを襟にさしたる　竹村仲城
つやゝかに結ひあけたる黑髪をひき立せけり玉のかむさし　弘世秋野
簪をはさしたる若きたらちねの姿なつかしうつしゑを見て　三木正康
少女子か髪にかさせる白はらのその一花はさやけかりけり　恒村愛山
髷もまたゆはぬ幼子おほきなる簪をのせて喜ひてをり　鹿江鹿子
なき母のかたみと殘る平打のこのかむさしはみるも懷かし　黑田こと
處女子は又手をふれぬ花簪うしろにさして氣にやかゝれる　野口みとり
奈良にけふゆきし苞にと瓜漬に角のかさしをそへてやり鳧　蓮久子
桃われに結ひし少女の黑髪は花のかさしもうつりよき哉　同人
たらちねの若かりし日そしのはるゝ嫁き來し折の簪を見て　同人
めたちけり語りつゝゆく處女子のそろひの簪くす玉にして　青木とよ
福引にあてゝ媼か白髪にうめのかさしをさしてかへれり　三木正康

寒松

霜白き庭の芝生にかけやせてたてるもさひし一もとのまつ　竹村仲城
夕よりふりつむ雪に庭の面の松も葉さきをみるのみにして　村田さと
雪を吹く風になひきて老松のかれ野にたてる影寒けなり　竹村仲城
夜嵐に木々の紅葉のちりはてゝ松のみのこる冬かれの庭　恒村たつ
いたつきの吾子をみとりて冬の夜の軒端にさわく松の聲聞　蓮久子

文を片手に文箱に倚りてうたゝねをする
手弱女の博多人形を見て

打かけの襟すへらせてゐねふるはよみゐし文や夢に見る覽　竹村仲城
文おきておもひは誰に通ふらむ現ともなきたをやめのさま　恒村夏山
數おほき男心をまよはせてゆめやすからしたをやめのきみ　恒村たつこ
文箱に肘をもたせてたをやめか夢うつゝなる樣のうつくし　黑田こと
いにしへのとけき樣もみゆる哉文箱によりて眠る少女に　蓮久子
かくまてにめくし處女のありもせは命を捨つる人多からむ　村田さと
よみさしの枕の草紙膝にふせていかなる夢か手弱女は見る　福井とよ
日さめなはいかなる笑かもらすらむ女も迷ふうたゝねの顔　同人
襠は肩よりおちぬたをやめかよみし文にもなやみありけむ　黑田こと

鏡餅　恒川平一大人選

かゝみ餅いた〳〵しくも荒されぬえとの鼠のはむに任せて　竹村仲城
賤か家もすゝはらひして大君の御影の前にかゝみもちすう　蓮久龍

曉雲　同

とりの聲里より里につたはりて山の端にほふあかつきの雲　黑田こと

とくおきて空を仰けは有明のつきにかゝれり雲のひとひら　村田さと

土　同

苞にいれておこせる牛蒡懐かしな我ふる里の土の香のして　蓮久龍

庭狭き町にすまへは草はなをはちに植ゑむも土のとほしき　同人

昭和十一年

新年眺望

鈴鹿嶺は雪よりあけて新年の初煙たつ土山の里　高尾泰司

新しき飛行機型のいかのほりことさら高しとしのはつそら　竹村仲城

いさましく初荷車のつゝく見ゆ門松ならふみやこおほ路に　福井とよ

賑はひしよへに比へて市中はいとも靜けしにひとしのあさ　伊與田德房

國々の旗をかされる船見えてみなと靜けしにひとしのあさ　蓮久子

たくみはの煙もたゝて浪花津のそらすか〳〵し新としの朝　三木正康

清水わくほとりに芹をつむ子らのかけ賑はへり七草の日に　平岡文子

玉

昔吾めてしかさしのさんこ玉いまの少女は見かへりもせす　村田さと

なか〳〵に品さかりても見ゆるかな賤しき人の手に光る玉　竹村仲城

ふとさして新にとしを加へたる我身おもひぬ玉のあかさに　平岡文子

車中見雪

近江路はみわたすかきり雪景色走る車のおそかれと思ふ　山本兼豐

うま酒のあらはとそ思ふ降りしきる雪を遠出の小車にみて　青木とよ子

のる汽車のまと拭ひつゝ眺めけりましろに積る山々のゆき　蓮久子

自動車のまとよりみれは東山ゆきみ酒くむひともありけり　福井とよ

スチームに足あたゝめてまとの外の雪景色みる小車のうち　同人

馬

わか足に黄金をかくる人ありとしらてや馬の園につまつく　福井とよ

のる術をしらぬ吾身とよくしりて道草をはむ馬のにくさよ　竹村仲城

汗はみし鞍下ぬくひねきらへは心地よけにも駒のいはゆる　山本兼豐

そのかみのいくさの場をしのふらむ高く嘶く神そのの駒　福井とよ

兵士の憩へるならし朝もやのとさしゝ野邊に駒のいはゆる　竹村仲城

老人は舌うちしつゝ眺めをり馬乘りまはすをみな子のむれ　青木と

人とほりしけき市路を誇りかにうまのりまはす若人も見ゆ　同人

未　霞

春たつと思ふ心にあふけともかすむともなき山のいろかな　竹村仲城

梅の花さきそめぬれと遠山は雪ものこりていまたかすます　福井とよ

春あさみ梅のつほみもかたくして遠の山々かすむともなし　庄山冬子

窓にさす日かけは早も春めけとかすみかねたるをちの山々　福井とよ

香をとめて梅の林に來つれとも月はかすます春淺くして　福井とよ

庭　石

牛のひく車につめるおほ石は誰かにひむろの庭にすうらむ　蓮久子

猫の子のあそひ所となりにけり日あたりのよき庭のすて石　竹村仲城

果

あくみして酒くみなから語らひぬ今日の勤めを果し歸りて　蓮久龍

嬉しくも今日は娘をとつかせて親の務めのひとつはたしぬ　竹村仲城

都　早　春

都見にくるさと人もまれにして大路のやなきいまた青ます　竹村仲城

如月のかせはさゆれとしかすかに都の空はうすくかすめり　伊與田德房

春淺みまたふる雪に加茂川の岸のやなきのいともめくます　村田さと

北山に雪はのこれと京の町ひなうるたなもみえそめにけり　黒田こと

北山に雪はみゆれと加茂川のやなきめくみぬ春としられて　大谷兵甫

誠

巧にはいひなさるれと誠なきうたには人もうこかさりけり　竹村仲城

としなかく交りくれと變らさる友のまことそ嬉しかりける　蓮久子

つれなしとなにかは人を咎むへき眞心たらぬ我をとかめて　竹村仲城

おのかしゝつくす務にかけ日向なきこそひとの誠なりけれ　三木正康

いつはらぬ人のこゝろのまことこそ神を動かす力なりけれ　大谷兵甫

初　鶯

鶯の初音をしはしきゝいりつふきの薹とる手をはやすめて　伊與田德房

梅か枝の雪ちらしつゝ吾庭に影さへみせてうくひすのなく　大谷兵甫

大寺のくりにひとなきまひるときはつ鶯のおとつれてなく　高尾泰司

去年よりも三日四日はやく鶯の初音をきくか嬉しかりけり　三木正康

次の音をまちあくみけりうくひすの初音鳴つる加茂の堤に　庄山多子

友とへはもてなし顔にうくひすの初音洩せりかこの中にて　黒田こと

初音そと耳をすまして鶯のいまひとこゑをまちわたりけり　高尾泰司

地　震

火をけせとよろめきなから叫ひけり障子倒るゝ室の内より　福井とよ

時計る器をみれはとまりたりふりつるなゐの强さしられて　蓮久子

思はすも吾子抱きて裏藪ににけこみにけりなゐのふりきて　伊與田德房

道のへの草を摑みぬ大なゐに足をとられてつくはひしまま　青木とよ

おそろしとわめく我子をおさへつつ柱かかへぬ大なゐの朝　竹村仲城

我家にもいりなつみけり大なゐの後に又もやゆり返しきて　同人

梅　盛

木の芽にる室にかをりのみつるまて軒端の梅の花盛りなり　蓮久子

紙屋川なかれの水もかをるまて北野の梅のはなさかりなり　山本兼豐

野　逕

やふかけをいつれは又も細道のなかくつつけり市原ののへ　福井とよ
自からみちとなりけりひろのはら横きる人に草のふまれて　青木とよ

市

傾ける家支へけりおほおやのあつめし品を市にいたして　竹村仲城
かひものにゆく村人のつゝくなり月の八日は市のたつ日と　蓮久龍

折蕨

のとけしと石きる音をききなから蕨をりけりはるの滋賀越　三木正康
語りつつ野をきし友といつしかは離れはなれに蕨をそ折る　土田松人
かへるさは蕨をりつつ下りてむのり物もある愛宕なれとも　竹村仲城
保津川を下る筏をなかめつつさかのの丘のわらひをるなり　福井とよ
囮かこ枝につるしてをかのへに目しろまつまに蕨たをりぬ　蓮久子
むつましく出湯のやとの裏山に若き夫婦のわらひかりする　竹村仲城
幼子を道にまたせてわらひかり深くもいりぬ岡のかやはら　同人

長

心あふ友にかく文これもいひかれもとはむと長くなりぬる　竹村仲城
さけし荷の持重りして休み休みたとるなはてのいと長き哉　同人
いたつきのかつかついえし此頃の一日は長しとふ人もなく　伊興田徳房
様様のなやみにたへてこし方をおもへは長き我世なりけり　福井とよ
幾度か時計のはりをなかめつつ來へき人まつ時のなかさよ　三木正康

老いぬれは我身細りてさひしくも結ふ帶さへ長くなりけり　村田さと
病あつき子をみとりつつ招きつる醫師まつまのいと長き哉　竹村仲城
懐かしき友に文をは送りおきて返しまつまのいと長きかな　青木とよ
時はかるうつはの針をみまもりつ人をまつまの長く覺えて　蓮久子
もつれては又こまりけりぬひ針に通しし糸のあまり長くて　福井とよ
たつね來る友をまつまのなかきかな開きし門も其儘にして　庄山冬子
ゐこころのあまりよけれは思はすも出湯の宿に長遊ひせり　伊興田徳房
うなひ子はいふかしけにも眺めをり吾影法師長くうつるを　同人
年々に山の奥まてひらかれて長くのひゆく汽車のかよひ路　同人
急きこと控へなからも髪をゆふ人まつほとの長くもある哉　三木正康

春庭

うゑおきし草もえ出てところところ土もち上る春の庭の面　蓮久子
さくら花いまをさかりとさく庭に苔もあをみて美しきかな　大谷兵甫
おち松葉まつかきやりて杉苔の青みそめたるはるの庭みる　三木正康
雪ははやあとなくぎえて蕗の薹そこここにみゆ田舍やの庭　福井とよ
廣からぬ我庭なから花もさきうくひすもきて春はにきはし　竹村仲城
いつしかも春めきにけり吾庭のすきやかに通ふ苔路青みて　同人

鬚

そのかみの軍談りをなしをへて翁はなかきひけをしこきぬ　福井とよ

ものすこき勢見せて親猫はなにねらふらんひけのふるへる　伊與田徳房
若人ははやりをおひて口髭も小さく二つにわけてつくれる　青木とよ
病めるかと問るる迄になりにけり事繁くして鬚をそらねは　竹村仲城
一年をみぬまに顔のしわまして白くなりけりをちの口ひけ　青木とよ
丸髷にゆひし女に髭つけて毛はへくすりのひろめをはする　黒田こと
人により位をそふる髭なれとはした者にはをかしけにみゆ　村田さと
いたつきの中にのひたる鬚みれは白きか多くなれる淋しさ　蓮久龍
美しき男のかほにふさはしく黒くひかりてみゆるひけかな　蓮久子
ゆくりなく子は泣いてぬたまさかに家に歸りし父の鬚みて　伊與田徳房
老人は子らを集めてかたりをり長き髭をはしこきなからも　同人

花　曇

日癖とはしりつつけふも花見には往れさりけり空の曇りて　竹村仲城
よも山にかすみかかりてふらむともはるともわかぬ花曇哉　福井とよ

旅　宿

よもすから波の音きくはまやかたやとるも淋し女ひとりは　蓮久子
試みをうくるをさな子ともなひて都の宿にひとひこもれり　同人

尼

墨そめの衣の袖にうつしよのなやみをつつむ尼のさひしさ　蓮久子
大原のさとをとひ來てうつくしき尼に昔のものかたりきく　同人

落　花

春のうたうたふ少女のこゑやみて朧月夜にさくらはなちる　竹村仲城
いさきよく花はちりけり吹く風の誘ふまにまに峯に谷まに　福井とよ
ゆく舟のあと見おくれははらはらと堤の櫻ちりかかるなり　高尾泰司
夕くれのかねつきをへし小法師の黒き衣にはなちりかかる　福井とよ
大井川なかす筏に吹雪とも見えてちりかふやまさくらかな　蓮久子
蝶とまひ雪とみたれて少女子の袖に裳すそに花のちり來る　山本はる子
詣て來しひともかへりて大寺のゆふへ靜にさくらはなちる　庄子
加茂川のきしの若草ふみてゆく少女の袖にさくらはなちる　同人

肥

母とちかとりかはしつゝ抱く子の孰れ劣らす肥え太りたる　土田松人
かきあはせ〳〵ても膝頭又いつるまて我は肥えたり　青木とよ
みるからにいつくしき哉少女子の齒もいてゝ肥えし面わは　伊與田徳房
若き母の腕重けにみゆる哉抱ける乳子のいたく肥えゐて　平岡文子
母親の乳の豐けさも思はれてまろく肥えたりみとり子の顔　弘世秋野
畑つもの皆すく〳〵とおひ立り土の肥えたる里と知られて　蓮久子
湯をあむる乳子丸々と肥えてあり顎と胸とわきかたきまて　同人
をさな子は虫も起らてすく〳〵と母に似つゝも肥え太り行　同人
み民我嬉しかりけりまる〳〵と肥えます皇子の寫眞をみて　三木正廉

又してもほゝえみなから眺めけり病のいえて肥えし腕をは　伊與田德房
いたつきのかつ〳〵いえし嬰兒の肥えゆく姿みるそ嬉しき　同人
愛ほしさ目に湛へつゝ逞しく肥えたる乳子の腕さすりをり　竹村仲城
蓄へし髭剃し日を友にあへは甚く肥えぬととみかくみする　同人
病けもなくておひたつみとり子のこえ太りたる姿いつくし　鹿江鹿子

春雨

傘さして花の下ゆく人もみゆふるとしもなき春雨のよひ　竹村仲城
花の歌とゝのひかねて夢の如なかむる庭にはるさめのふる　福井とよ
何となくねふけ催すはるの夜のふみよむまとに春雨のふる　竹村仲城
咲くもありふゝむもみゆる花の上に音なく注く今日の春雨　伊與田德房
傘さして花見る人のつゝきけりはるさめけふる丸山のその　庄山冬子
都見の人のひとむれ春雨のけふるおほちをぬれなからゆく　同人

鮨

ふるさとの伊豫の松山うをところ犬の子うむも鮨つくる也　山本はる子
くひしらぬ人におくりてすゆるかと疑はれけり鮒鮨のをり　竹村仲城
卷すしをわりこにいれて持せけり遠出するとて勇む我子に　庄山冬子
休日の朝とくおきてまなひ子の遠出のかてと卷すしつくる　蓮久子
一つきの酒もほしかり誂へしまくろのすしの味のよくして　同人

木蓮

おほてらの軒端しつけきゆふやみに白木蓮の花のさきたる　竹村仲城
白孔雀はねをひろくる園のうちにいまをさかりと木蓮の咲　蓮久子

競馬

花車かたへによせてかもの宮はふりも園にきほひうまみる　福井とよ

產

貯へのかねのつき〳〵子うむをはさも嬉しけに媼かそふる　竹村仲城
金絲雀の巢函覗けはいつのまかうみし卵をぬくめをるなり　蓮久龍

待時鳥

碁をうちてきゝ洩したる時鳥更にや待たむ木の芽につゝも　蓮久子
まつ身にはつれなかりけり杜鵑畫もときゝて尋ねきつれと　竹村仲城
つき〳〵に歌の友かりたつねつゝいく夜ともなくまつ蜀魂　同人
不如歸所かへてもまちにけりきのふは貴船けふは比えのね　同人
まち〳〵て夜をあかすとも郭公きゝてかへらむ語り草にと　蓮久子

韓信潛股圖に

手をうちて笑へるもあり股くゝる人の心のおくをさとらて　竹村仲城
耐へしのふ心はついにおのか身の光となりて世を照しけり　福井とよ
たふれ斬るものにはあらす國の仇拂ふ劍とたへしきみかな　蓮久子
うつけたる樣とや見えむ股くゝる人の心のそこをくますは　竹村仲城
忍ふ草花はさきけりはしたなき市の男にふまれなからも　大谷兵甫

はつかなる怒にたへて大なる望をとけしひとそかしこき　蓮久子

初夏庭

新木芽一人すゝりぬふる雨に若葉いろよき庭をなかめて　福井とよ
鯉のほりかせになひきて隣家の松の花ちるはつなつのには　竹村仲城
衣かへしたる少女の立つかけも夏めきてみゆわかはさす庭　同人
あさかせに若葉のそよく庭ゆけはうらなししめる青芝の露　蓮久子
苔の香もなつかしきかな吹く風に若葉なひきて朝日さす庭　同人

白髪

上座にわれ座りけりはしなくも白髪あるより人におされて　三木正廉
黒髪をほこりしいもゝ末の子をうみし頃より白髪ふえたり　伊與田徳房
いつしかも我は老いたりあふ友に白髪を染る術をとふまて　福井とよ
働きも世に知れけりやゝ〳〵に人は白髪の生ひそめてより　蓮久龍
うちよりてかたらひみれは白髪をはそめたる人の多き此頃　同人
いかにせん喉に項に皺よれり白髪はかりは染めてかくせと　山本はる子
うちむかふ鏡のかけに驚きぬ病むまにいたくふえし白髪を　同人
人こみの中にも友はみいてけりわか白髪のかしらめあてに　村田さと
尊とさのましてみえけり法の師か白き眉毛の長くのひゐて　青木とよ
都には老いたる人のなきかとも思はるゝまて白髪そめたり　同人
老いたりとしられて淋し我髪の日毎に白きかすのましつゝ　庄山冬子
久しくもあはて過しゝ友の來て共に白髪をかこちあひけり　黒田こと

薊花

田草とる歌きゝなからたをりけり里川岸にあさみ見いてゝ　福井とよ
麥みのる畑の中道たとり來て野邊にいつれはあさみ花さく　蓮久子

海路

波あらき海路ときけはまた舟にのらぬ先より胸のつかふる　竹村仲城
はてもなく海はつゝきて心さす港いつことおもはるゝかな　福井とよ

齒

うつくしき齒並そみゆる少女子か笑みてほころふ唇のなか　竹村仲城
母の乳を離して乳子は笑ひけり生ひし計りの齒をは出して　福井とよ

昭和十一年四月二十日鳥野先生御入洛のをり御伴してよめる

師の君と共にわりこを開きけり醍醐の山の花をめてつゝ　福井とよ
ぬれもせて車まちけりふる雨に丁字かをれるいへの軒にて　同人
師の君と車つらねて咲き匂ふ花めてにゆくけふのうれしさ　庄山冬子
そのかみの手ふりもみえて醍醐寺花見かてらに詣てつる哉　土田松人
なつかしき師をは迎へて醍醐寺花の木かけを山駕籠のゆく　同人
桃山の遠き昔をしのひつゝはなの木かけにわりこをそとく　伊與田徳房
しらへよき笛の音もして醍醐山さかりの花の木かけ賑はふ　同人
師の君にいとま申しておのかしこ家路たとれは春雨のふる　同人

したしさのいよゝますこそうれしけれ歌よむ友と櫻狩して　同人
自働車はさきにまはして岩屋寺はひりの花の盛りをそみる　同人
吉水のかねもきかはや丸山の花おほろなる木かけめくりて　竹村仲城
ひと片の花ちりにけり岩屋寺むかしをかたる尼のたもとに　同人
車よりおりましゝ師を吾友に敎へられつゝむかへまつりぬ　平岡文子
思ひなけに遊ふ鯉をは眺めけりその橋殿のおはしまにより　同人
春雨のはれまをてらすうすら日にほのかに匂ふ山さくら花　同人
さみとりのいろうるはしき高雄山丹塗の橋をゆく人もなし　同人
池水にうつる花をはなかめつゝ友のあとおふ庭の細みち　同人
寺めくりつかれし身をはよこたへて歌かたりする春雨の宿　蓮久子
はるさめに柳けふりてあて人のやかたしつけし衣笠のさと　同人
雨あかり日影もれくる清瀧の谷のそはちにわらひ手折りぬ　同人
箕もて運ふ處女もみえて砥の粉ほす棚あまたあり山科の里　青木とよ人
師の君のみともつかへて醍醐寺花のさかりを見つる嬉しさ　同人
春雨に若葉いろそふ高雄山丹ぬりのはしの際たちて見ゆ　同人

選後の先生のうた

めくり來しあとを又みる心地してあかすめてゆく歌の數々　幸次

閑居梅雨

さみたれの窓うつ音もきゝなれてひとり書よむ庵の靜けさ　小林慶一郎

すのこはふ蝸牛さへつれ〳〵の友となりけりつゆの長あめ　竹村仲城
山住のいほの戸あけて五月雨のはるゝともなき空を眺むる　日木和子
水鷄すらたゝかすなりて柴の戸はふる五月雨に朽始にけり　福井とよ
梅の實のおつる音をはきゝなから一人ふみよむ五月雨の窓　同人
ふりつゝく雨の夕くれ軒ちかく梅のみおつるおとも淋しき　庄山子
時鳥なきしきれともたつねくる人もまれなり五月雨のいほ　村田さと
世のうさをのかれて山にすむ吾もとふ人ほしき五月雨の頃　庄山冬子
梅の實のおつる音して獨居の庭さひしくもさみたれのふる　竹村仲城
をり〳〵にもるゝ隣のラヂオさへまちて聞けり五月雨の宿　高尾泰司
書よむもものうかりけり五月雨にまとの柳のかけ暗くして　同人

知天命

なに事も神のさために從かはむひとの力はかきりたるもの　庄山冬子
誠をはつくしゝ後のことは皆なるもならぬも神にまかせむ　三木正康
名を求めくほさをはかる人心あさましとみつ今のわかみに　竹村仲城
世の事はなるに任せて我はたゝなすへき業をなして過さむ　同人
いつしかは彼方の岸に着ぬへし流れにそひて棹をさしなは　庄山冬子
さきの世のむくいなるらむ神佛いのれと幸の薄きわかみは　村田さと
何事も神のみむねとかしこみて心しつかにおいをたのしむ　岡田天留
世にすねし心も今はなこみけり老のさか路をあゆみ疲れて　蓮久龍

梅實

花めてし後さなからに殘しつる鉢うゑの梅ひとつみのりぬ　竹村仲城
歌反古をそろへてをれは梅のみを賣る聲すなり五月雨の頃　伊與田德房
葉計りと見し道のへの梅のみを黄はみてしりぬ五月雨の頃　青木とよ
梅のみを賣る聲すなり五月雨のはれて暑さのまさる市路に　日木和子
庭めくる吾足もとに音たてゝうみし梅のみひとつ落ちたる　同人
鹽もけふ求めてやこむさみたれに庭の梅の實色つきにけり　黑田こと
五月雨のはれまを暫しうら庭に梅のみたゝく竿をふりつゝ　蓮久子

禿

はやり髪ゆひ惱みをり吾妹子の頭はいたくかもしはけして　竹村仲城
ふく風に帽子とはして騷きをる翁をみれはいたくはけたり　同人
さひれゆく吾故郷の山はみないたくもはけぬ暫しみぬまに　同人
若人はいたくも髪をのはしけり火傷の禿をかくさんとして　同人
一所はけしあたりに手をやりて惱ましけなる若人のあり　青木とよ

旱天

蝸牛殼にこもりて軒さきにかたくつきたり日照りつゝきて　竹村仲城

噴水

のみものゝ瓶も浸してのき近くふきあけつくる山もとの店　蓮久子
竹垣の奥すゝしけにみゆるかな池のふき水しふきたてつゝ　中野善次郎

悟

世渡りの道にさまよふ吾身にてさとりひらくはいと難き哉　竹村仲城
若人のいとふとしらて人の道老はとくなりさとりかほして　福井とよ

夏水

子らのまく水のかゝりて乾きたる竿の浴衣の裾ぬらしけり　福井とよ
葉柳のかけにすゑたる風呂桶に筧のみつをわかちてそやる　中野善次郎
日さかりに喉のかわきを癒すへく汲む手に暑しさと川の水　竹村仲城
夕やけの名殘とゝむる水の面に涼しさを逐ふ舟もみえけり　平岡文子
きゝなれし軒のかけひの水の音も耳懷かしくなれる夏かな　中野善次郎
暑けれは水をもとめてくる人の日ことましけり鳥の海つら　大谷兵甫
しをれゐし百合も開きて夕まくれ水をうちたる庭の涼しさ　村田さと
照りつゝく夏の夕を村ひとはかゝりたきつゝいけの水もる　蓮久子
夏草のしけるほとりにわく水を馬にもかひて暫しいこひつ　平岡文子
松風もともにわき出る心地してむすへはすゝし山の井の水　中野善次郎
をさな子は水遊ひせりあつけにも蟬の聲する庭のかたへに　伊與田德房
久しくも雨のふらねは田人らか水あそふときくも痛ましと　黑田こと
鮎のとふ姿もみえて保津川の夕すゝしきみつのいろかな　土田松人
吹く風にきしの青葉のつゆちりてなかれすゝしき谷川の水　同人
月見草にほふ磧をさら〳〵と瀨おとたてつゝ水なかれゆく　高尾泰司

よろこひて水あそひせり幼子はてる日さかりの庭中にして　竹村仲城

鞭

いかめしきたむろの場に軍人むちをふり〳〵犬ならしをり　蓮久子
師の君のむちは動きて學ひ子の目をあつめけり滿洲の圖に　青木とよ
日こと〻る心の鞭もおこたりの跡をと〻めて日誌なきかな　平岡文子
鞭の音はするとけれとも打たすして馬をはけます滿洲の人　同人
教へ子のおこたりせめて師の君の鞭はうこきぬ涙なからに　大谷兵甫
心してみよといひつ〻師の君は吊し〻地圖に鞭をあてけり　伊與田德房
恐ろしき虎もやさしく動くみゆ使ひ手のふる鞭のまに〳〵　福井とよ
うきことに心いたむる時はた〻神の下せるむちとおもはむ　庄山冬子
馬くらへいまはといれし一鞭に駒は〻しりぬ天かけること　中野善次郎
目さしつる峯近つくと鞭あけておくる〻友をさし招きけり　竹村仲城

夏家

何物も室にはおかてあけはなつ家こそ夏はす〻しかりけれ　竹村仲城
涼しけに見ゆる宿かな窓かけの白きレースも風になひきて　同人
軒につる鈴のひ〻きもす〻しきに夕かほさけり川そひの宿　日木和子
門口にたては涼しき奥庭のあを葉のかけもみゆるいへかな　大谷兵甫
あけはなつ彼方の庭に噴水もありてす〻しくみゆる家かな　竹村仲城
風通しよきこそ夏はすみよけれ家のかまへはよし狹くとも　伊與田德房

山をおひ海にのそみて松風のたへすふきいる庵のす〻しさ　同人

凱旋

たらちねにいたかる〻子も旗ふりて軍かへりの父を迎ふる　蓮久龍
日にやけし顔もを〻しく見ゆる哉仇をこらしてかへる兵士　山本はる子
日にやけし面わいさまし兵士の仇守りし間の惱みしられて　村田さと
よろこひをかほにみたして戰の場よりかへる武士のむれ　伊與田德房
目しひたる翁も旗をふりてたつかへる軍に子やましるらむ　蓮久子
かへり來る軍馬をも旗ふりてむかへやりけりいさを思ひて　同人

遠雷

石室をとめてたとりぬ富士詣はるかの下にかみをきゝつゝ　蓮久子
たきつせの音にましりてきこえ來ぬ谷を隔てゝなる神の音　同人

踏露

やむあしも此頃かろくおほえ來てふみ心地よし野邊の朝露　中野善次郎
鴨堤あさつゆふみて我かけは先たつとものかけもみえけり　蓮久子

綠

よとみてはもとの綠にかへりけり岩にくたくる谷川のみつ　中野善次郎
古寺のあと〻ひ來れはかねのみは綠にさひて猶のこりけり　蓮久子

山家早秋

かとにとふ赤あきつみて秋きぬと鳥網とり出す山里のひと　大谷兵甫

馬おひのこゑもしきりて輕井澤はや秋深くみゆるこのころ　竹村仲城
かと畑の粟ときはみて鶉なく山のひとつやあきは來にけり　同人
名もしらぬ茸も軒におひそめて秋めきにけり山かけのいほ　同人
庭にはふ葛のかつらの花さきてあきめきにけり山かけの庵　同人
くれなゐのあきつむれとふ山里のかやの軒端に秋風そふく　日木和子

欺

とやかくと思ひなやみし末は我心あさむくをりもありけり　竹村仲城
安きにはよき品なしとしりながらもしやに又も欺かれけり　同人
双物もつその危ふきにいつはりて欺く術を子にをしへけり　同人
みかきたる硝子を玉とあさむきて少女心をそゝるみせあり　福井とよ
たくみにも世をは欺むくしれ人も神の心はゝかりしるらむ　庄山冬子
末は世に疎まれはてむいくたひも言葉巧みに人をはからは　同人
武夫か心ならすもあさむきて友をしり目に宇治かはわたる　三木正康
後をおふ子を欺きて出にけり歌のつとひに獨りゆかむと　同人
うはへには誠をみせて國と國あさむきあへり今の世のなか　大谷兵甫
欺きてしすましたりと思ふ人いつかおのれの身をは傷つく　岡田天留
奥深き店かとも見つかへにはる鏡のかけにあさむかれつゝ　蓮田久子
美くしきよそほひをして世の中を欺きくらす人もありけり　村田さと
おもふことたかひて人を欺むけは夜のねさめも安からぬ哉　山本はる子

世わたりの術つたなさに我と我こゝろ欺くをりもありけり　中野善次郎
學舍に通ふと親をあさむきて遊ひにふける惡しき子もあり　伊與田德房

氷柱

賑はひしうたけは果てゝしつかにも氷柱にはゆる灯のかけ　蓮久龍
見るかうちに氷柱の角とけて圓くなりけり今日のあつさに　青木とよ
むろのうち凉しくなりぬもてなしに氷柱のとくるまに〳〵　同人
あせふきのぬのも離れすなりにけり氷柱にあてゝみつれは　竹村仲城
日さかりのみちたとり來て店さきの氷柱をまつなてにけり　同人
あせれとも歌ならぬまにもてなしの氷柱はちさくなりゆく　庄山冬子
軒さきのをすもうこかぬひる下り室の氷のほそくなりゆく　福井とよ
むしあつき市の家居も花氷たつれはすゝし風をさそひて　土田松人
おのか身を細らせ乍ら世の人をよろこはせけり氷はしらは　大谷兵甫

花火

高殿にたゝく手の音きこえけりいかなる人か花火みるらむ　三木正康
向岸うつむる人のかほみせて花火はやかてそらにきえたり　青木とよ
花火玉驛にすゑて多摩川のすゝみにひとをさそふこのころ　山本はる子
美くしき花火は軈てきえにけり闇の夜空をいやくらくして　竹村仲城
うつくしき仕掛花火はきえにけり川原をもとの闇に返して　同人
打あくる花火のおとに人皆のこゝろうきたつ川すゝみかな　日木和子

朝　冷

大方の人はくたりし山の湯の長きわたとのあさひえのする　蓮　久子
おもはすも襟あはせけり此朝け立つ秋かせにひえを覺えて　中野善次郎

泛　舟

潮ひきて粗朶立並ふ沖つへに海苔かく舟の浮へるもみゆ　蓮　久子
うめたつる沼の眞中に赤きはた立つる舟見ゆ水測るらむ　同　人

名

初孫はをとこ女のわからねと生れぬさきに名えらひをする　村田さと
その人の名は忘れけり面をはみしりあひつゝ禮はかはせと　蓮　久子

海邊月

海士の子かおき忘れたる網見えて磯へさやかに月の照せる　日木和子
すみわたる今宵の月をのりすてし小舟によりて獨なかむる　平岡よし
松林いつれは月のさやかにてわかふむいその眞砂てらせり　福井とよ
夕潮のあらひて清き眞砂路をてらせる月のかけのさやけさ　土田松人
沖へより初かりかねもきこえ來て月かけ清し濱のまさこ路　青木とよ
あまか家の軒に干たる網の目もさやかに見ゆる秋の夜の月　竹村仲城

小督局

さかの野の月にえたへて濡しけむ雲井をこふる妻琴の音を　土田松人
御使のきくともしらてかなてけむ月にせを思ふ妻琴の緒を　竹村仲城
いまも猶昔戀ふらむ琴ひきの松のかけなるこけのしたにて　同　人
垣の外に駒を控へてきく人のありともしらて琴やひきけむ　伊與田德房
玉琴のしらへによせてはるかなる雲井の月をこひし君かな　日木和子
雲井まて高きしらへの聞えけりさかの庵にひきしつまこと　岡田天留
千草さくさか野のあきに月すみて古人のしのはしきかな　宮崎なみ江
ことの音に駒をとゝめし古を忍ひてさかの墓に詣てぬ　福井とよ
御使のきくともしらて月の夜にこと調へつゝせを偲ひけり　平岡よし
世をうしとさかの野の奥に隱れても顯はれにけり琴の調に　日木松子

雨中萩

さひしくも秋の雨ふる尼てらの板井のほとりはきの花ちる　伊與田德房
虫の音もやみて靜けき庭の面の小雨にぬれて萩のはなちる　青木とよ
ふる雨の一きはつよく當るかとみえていたまし糸萩の花　同　人
ふる雨に色のあせたるはきの花こほれてさひし山寺のには　伊與田德房
坪のうちにさける秋萩ふる雨のそゝきていよゝ色まさり鳧　蓮　久子

刺繍

小車の中にも針をはこひけりとつ國ふりのぬひをならひて　竹村仲城
下畫をは兄にせかめり少女子かぬひを此頃まなひはしめて　同　人
町々のほこりとはせり祇園會の鉾の見おくりぬひの古きを　同　人
あかなひてしむる少女や誰ならむ店に飾れるぬひとりの帶　同　人

燈火にはえてうつくし舞姫のたれたる帶のぬひとりのあやぬひとりのすへを覺えてそのくにの女心にふれむとそ思ふ　福井とよ

珍らしとめてられにけり古き帶も巧にさしゝぬひの文にて　平岡文子

少女子かハントハツクを作りけりあかき鹽瀨に刺繡をして　福井とよ

ふりかへり暫しみとれぬ手弱女の結へる帶の縫のそのよさ　同人

美くしさ一入ましぬ少女子かとりあはせよき衿のぬひとり　伊與田德房

少女子かはれの宴につとひけりぬひさま〳〵の丸帶をして　同人

くさ〳〵の形を布にうつしけり糸と針との手わさたくみに　岡田天留

龍　膽　　同人

うゑおきし秋の山草つき〳〵にさきたる中の龍膽のはな　蓮久子

岩清水むすふをりしもみいてたり草むらかけの龍膽のはな　同人

夜　雨

風もなく小雨ふる夜はおちつきて吾歌思ふ折にそありける　村田さと

いとし子を學ひの旅にたゝせつる今宵淋しき雨のおとかな　蓮久子

矢

序よく見めくられけりみち筋を矢もてをしふる札たてる庭　竹村仲城

火砲なき世の戰をしのひけり近きまとたにいぬかれぬ矢に　同人

秋　旅

岩かとのこゝしき道をめくり來て青き密柑のなれる村ゆく　岡田天留

そはの花ましろにさける山畑を近く見なから木曾の旅する　伊與田德房

草の家の軒に色つく柿紅葉めてなからゆくあきのたひかな　同人

もみちはの畵もすりいれし貼紙の驛にみてり旅すゝむとて　弘世秋野

名所の月に紅葉にあこかれて日數かさぬるたひとなりけり　土田松人

わくらはの風にちりきてひとりゆく秋の山路の旅そ淋しき　日木和子

片道は舟にしてけり瀨戸の海もみちにはゆる島をみむとて　竹村仲城

木犀の香のたゝよへる垣根道みかへりつゝも今日は旅ゆく　岡田天留

痔

學ひ子はやせてかへれり上座をきそひ勝つるあかし文えて　蓮久龍

あなたふと悟りの道の高ねそとあふく法の師骨はかりなり　三木正康

何事になやむか暫しあはぬまに友はいたくも面やせてみゆ　竹村仲城

手をふれて驚きにけり肩腰の骨はいつしかかとのたてるに　岡田天留

夜をこめて學ひし吾子の顏いたくやせてけるかな試みの後　蓮久子

病む人を尋ねきつれは痛ましく眠れる顏にやせのみえけり　村田さと

寫眞のそれとたかひて頰骨のあらはるゝまて母はやせたり　伊與田德房

腰折の歌もよみえぬ悲しさにやする思ひもせられけるかな　同人

いたつきのいえつといひて來し友の肩の悴れも淋しかり鳧　日本和子

病もつ身とやなりけむあふことにいよゝやせゆく友の此頃　竹村仲城

尾　花

少女子か手を傷つけて騒くなり穂に出初めし尾花折るとて　竹村仲城
さひしけに遍路の歌もきこえきて尾花なひけり夕くれの原　同人
山すその野をふき通すあきかせに尾花の穂さき白く光れり　平岡文子
月みむと野邊に出れは虫の音も繁くきこえて尾花まねけり　福井とよ
おち鮎をかこにみたしてかへり來る野川の堤尾花なひけり　伊與田德房
野をひろみ千草の陰は茂れとも月にみゆるは尾花のみにて　土田松人
手折きてこよひの月に供へはや虫の音こもる野邊の尾花を　庄山冬子
湯の宿にいそく山路の夕まくれまねく尾花も物すこくして　同人
古寺のまかきの尾花ふく風になひきてさひし秋の夕くれ　平岡よし
日に月に家たちならふ武藏野は尾花か原も遠くなりゆく　山本はる子

羽織

我さとは田守のみにて村長のほかには羽織きるひとのなき　中野善次郎
いたつきの癒て据れる子の肩にそときせにけり輕き羽織を　福井とよ
客人かあさとく訪ひてあわて着に羽織かさねぬ繕はぬ身に　庄山冬子
正しかるかたちいつしかくつれけり祝の筵羽おりぬくまて　大谷兵甫
少女子か技のさえにて父親のはをりの襟のかへりよきかな　福井とよ
足乳根の羽織縫ふ手を急きけり身にしむ風の吹き初しより　山本はる子
吾妹子か拙きわさをはちらひぬかた襟のつる羽織きせつゝ　竹村仲城
パラソルの下より見ゆる繪羽織に少女の年も界知られけり　同人

冬林

大寺のいらか高くもみゆるかなかこめる林ふゆかれのして　蓮久龍
おほかたは冬の林となりにけり櫨の一むらもみちのこりて　同人

航空

國とくに空とふ道をとりきめぬ界なしともみゆるものから　竹村仲城
みつふたつ飛行機すくる空みれは一すち道のある心地する　福井とよ

求

學ひやをいつれはやかて西東業をもとめてめくる若うと　蓮久龍
をゝしくも次の男はとつ國にあたらしき業もとめてそゆく　同人

名所時雨

のほりゆく白帆に寒き日のさしてしくれ横きる利根の大川　中野善次郎
散りのこる紅葉ぬらしてはら〳〵と時雨すきゆく大原の里　平岡よし
春日山をしかも共にわたとのゝ軒にいりけり時雨ふりきて　庄山冬子
みささきを拜みに來れは多摩高雄のこる紅葉に時雨ふる也　山本はる子
すみわたる青空なから時雨きて御堂にきはふ清みつのてら　平岡文子
池の面に落葉さそひて一しきり紅の森にしくれふるなり　蓮久子
柊のはなさきにほふ鞍馬てらゆふへさひしくしくれふる也　三木正康
をしかなく聲も淋しくきこえ來て春日の森に時雨ふるなり　伊與田德房
大佛の鐘もかすかにきこえきて眞葛ケ原に夕しくれふる　同人

短

たらちねの情のふかさしられけりいつも短さ文のなかにも　蓮久龍
あさやかに仇の出籠手を抑へけり短き竹刀打ふるひつゝ　三木正廉
短くてことたりにけりおこせたる文の詞のいとたくみにて　石橋永吉
なりぬへき間際に事をやふりけり心みしかき吾くせの出て　竹村伊城
わりなくも心みしかくなりにけり病の床になかくふす身は　同人
今日の日は短かりけり急き物ぬひもあからて火のともる迄　青木とよ
はからすも昔の友のたつねきて話する間のときのみしかさ　平岡よし
なかき日も短く暮れぬ隔てなき友と樂しくかたりあふ日は　三木正廉
去年きせし吾子の衣のぬひあけをおろせとも猶丈の短かき　伊與田德房
ことしけき都にすめは自らみしかくなりぬ人のこゝろも　同人
はしためのゐぬわりなきに絹衣短くしてもくりや邊にたつ　森年子
逞ましき吾子は日々に生ひたちてみしかくなりぬ帶も袴も　高尾泰司
すくれたる業をみとめて人皆の短きふしはとかめさらなむ　山本はる子

秋晴

木犀の花の香高き寺のかとまかれは見ゆる秋はれのそら　竹村仲城
糊ほせる靜けき庭におい人は菊の手入れす今日のひよりに　平岡よし
渡りとりすきゆく見えて遠方の山もさやけき秋ひよりかな　日木和子
ひかうきの雲井はるかにとふみえて晴たる秋の空心地よし　同人

かり人の銃の遠音におとろきて小鳥とひたつ秋はれのそら　蓮久子
比えのねも窓のへ近くみゆるまて晴れわたりたる秋の空哉　土田松人
鶏頭のいよ〳〵赤くみゆるかな園にみちたる秋の日かけに　福井とよ
大君を偲ひまつるにふさはしき菊のかをりて空はれわたる　青木とよ
事ありていともおくれし虫干をゝへてけるかな秋晴のけふ　山本はる子

古し

鏡にて見れは宜なり我かしら古し〳〵と子らのいへるも　蓮久龍
誠てふことはりをとく父親をかしら古しと子らのあさける　福井とよ
我身にはよくふさひけり色あせて世におくれたる古き衣も　同・人
新しき品とも人に見られけり古きころもをそめなほしゝて　庄山冬子
をさな子の心のかてとくさ〳〵の古き話をしてきかせけり　岡田天留

晴雪

若人の一日を山にすへらむとうまやにいそく雪はれのあさ　蓮久龍
朝はれの湖はるかにも見渡せは比良より北はゆき眞白なり　同人

曉天

あかほしのかけもうすれて東の山のよこ雲あかねさしたり　竹村仲城
何事かもよほしすらむ知らせ花火とゝろきにけり曉のそら　蓮久龍

銃

兵士のたむろに近き岡にすみてひねもす銃の音をきくかな　蓮久龍

若人は手をさしのへて銃とりぬ紙もてつれる煙草うつとて　竹村仲城

冬山

みかんとる少女のかけもはえにけり　伊與田德房
小春日和の紀の國の山
吹きあれしあらしもけさは靜まりて　曾根和子
北山白く雪のつもれる
昨日までめてし紅葉もはやちりて　岡田天留
高雄の山にはつ雪のふる
裸木のはやしのをちに雪しろき　竹村仲城
越の遠やまみえすきにけり
小春日の湖をへたてゝみさくれは　蓮久子
早雪しろし神のいふき嶺
ふく風に時雨の雲はちりはてゝ　中野景善
さむけに立てる小筑波の山
立ならふ木々は皆から葉のおちて　蓮久子
淋しくなれる冬の山かな

往事は夢

琴爪を弄ひしもゆめにしてみつ　森年子
あつかひに手はあれにけり
若駒の雲井まてもとねかひしも　中野景善
夢とこそみれ今のうつゝに
をり〳〵に嬉し悲しと思ひしも　竹村仲城
すきての今は皆ゆめにして
かくてわれはてむ命かゝへりみる　山本はる子
すき來し方は唯夢にして
彼是と思ひし事も夢とすきて　黒田こと
老いさらほひし我身はかなし
來しかたは唯長きよの夢にして　蓮久子
白き髪のみうつゝなりけり
嫁きゆく娘のすかた見るときは　村田さと
すきしおのれの夢も浮ひ來
とやかくと惱みし跡を返りみれは　岡田天留
幸ある今は夢路なりけり
來しかたの五十はゆめの一夜にて　中野景善
またもたとるか夢の浮橋

多かりし子をつき〳〵に先立て　竹村仲城
悲しみし世も夢とすきけり

氷結

風さゆる田中をくれはみくまりの　山本兼豐
池のみきはに薄氷のみゆ
もやひする舟をめくりて初氷は　三木正康
れる入江のあしたさむしも
戸をはうつ風の音さむし薄氷は　山本はる子
りぬとつくる聲もきこえて
客人をまつとて替へしつくはひの　石橋永吉
水はははやくも又こほり鳧
凩のすさふこのあさみあかしの　蓮久子
土器みれはあふらこほれり
今ひとのつかひて去りし手洗の　青木とよ
水もこほれり風さむくして
幼子はふみくたきつゝかよふなり　竹村仲城
むすひ初めたる庭の氷を
木枯のすさふ夜みちのたまり　岡田天留
水いつしかゝたく氷ゐにけり
みそさゝい木傳ふ影も寒けにて　伊與田德房
薄くこほりぬつくはひの水
我ために母かくみおく桶の水　蓮久龍
けさは早くもこほりはりけり
岩くゝる谷の眞清水音もなし　大谷兵甫
ふく木からしにこほり閉して

支那の現狀を

童等かつつきし蜂のすにも似て　竹村仲城
さわかしきかな支那の此頃
百とせの後もすむときなかるへし　同人
にこりに濁る支那の大川
さらぬたにたゝならぬ國事ありて　山本はる子
女われすら胸さわくなり
猫の目のかはるか如き支那の國　石橋永吉
昨日の友もけふのあたなり
雲となり雨となりつゝかはりゆく　三木正康
樣あはれなり支那の此頃

皇國のわれになひかておろかにも露まことなき方に傾ふく　蓮久子
支那は今道なき國となりにけり聖のをしへわれにのこして　同人

寒　椿

霜しろきすき家の庭の片ほとり椿さきたり葉かくれにして　蓮久子
霜ふみて友の釜日をとひ來れは床にいけたるつはきひと枝　同人

牧　牛

いと廣き牧場の丘にねそへりて牛は何をかはみかへすらむ　竹村仲城
放ちかふ桃の林の牛のむれ荷をひく憂もしらてやあるらむ　蓮久子

樋

山寺は庭にくりやに岩清水ゆたけくひきてとひにたきなす　蓮久子
新しくかけたる竹の樋によりおつる水おときくかうれしさ　同人

昭和十二年

元　旦

雞の聲すか〳〵しくも聞えきぬ若水をくむけさの井のへに　三木正康
年たてる今日そ嬉しき音つれのたえゐし友のほき文も來て　福井とよ
七五三はれる臼に朝日の影さして長鳴鳥のこゑのとかなり　高尾泰司

年のたつ朝にきけはすか〳〵し杜のからすも軒のすゝめも　竹村仲城
年ほきの葉書をみるもいとうれし初日さし入る窓の下にて　山本兼豐
あらたむる事多かれと今日は先はやおきをせむ年のたつ朝　青木とよ
賑はひしよへにくらへて市中はしつけかりけり新としの朝　伊與田德房
初日さすかとをあくれは萬歳のつゝみの音の遠くきこゆる　日木和子
この年も安らかなれといのりけり山のは出る初日をかみて　同人
言の葉の友はなつかし年ほきの葉書に歌をかきつらねきて　土田松人
年たつと勇みて告る鳥の音におこさぬ子さへ早おきにけり　山本はる子
若水に身をはきよめてぬかつけは神の廣前あさひかけさす　蓮久子
箸とりて雜煮をいはふ幼子の言葉もけさはあらたまりけり　高尾泰司
白髮をいたゝくをちもうなゐ子の心となりぬとしたてる朝　同人
とこしへにもたまほしかりたつ年の朝のとけきおのか心を　竹村仲城
日の本の民たる幸を天地のかみにまをしぬにひとしのあさ　同人

田　家　媼

朝な〳〵粟津畷にゆきあふは花をになへるおうなりけり　三木正康
一度は都にいてゝ花みるかさとのおうなのねかひなりけり　山本はる子
畠より返る子まちておうなひとりかまとの前に腰伸しをり　福井とよ
わら塚の日當りにきて今日も又孫もるおうな二重こしなり　竹村仲城
鋤鍬をもつてにけふは珠數かけておうな詣つる六條の寺　福井とよ

石臼に粉をひきなれて老いぬとも見えてをゝしき里媼かな　蓮　久子
二重腰しつゝおうなも働らけり田人か家はいそかしくして　山本はる子
にはとりのまきゑするみゆ田舍家の軒に媼は孫をもりつゝ　伊與田德房
田に出し子らのかへりをまつならむ家もる媼夕けたきつゝ　同　人
田作りは子らにまかせてしつかなる伏屋の庭に媼ぎぬはる　日木和子
筵ほす小田の伏屋の日あたりにつゝれさしつゝ媼いねふる　山本兼豐

初荷

金まはり今年はよくもなりつらむ初荷車の多くもあるかな　竹村仲城
つき〳〵に初荷の車いてにけり問屋ならへる町にきやかに　宮崎なみ江
新川に山とつまれし酒樽のはつ荷となりてくらはらひせり　石橋永吉
金はらひあしきをかこつ店にさへ年の初荷は運ひいれけり　竹村仲城
町の子はあとおひつゝも拾ひけり初荷車のまくひろめふみ　同　人
若人は聲いさましく集ひけり初荷のふねのつきしみなとに　蓮　久龍
さゝやかに去年開きたる店乍らくほさ占めんと初荷出せり　三木正廉
新年の町のけはひをひきたてぬねりゆく初荷小旗かさして　庄山冬子
新年に問屋ならへる町ゆけは初荷くるまのみちをふさける　蓮　久子

紅白粉

我乍らやみあかりとはみえぬかな頬紅少しさしゝはかりに　青木とよ

うましめのけはひゝきたつ黑髪に襟白粉ののひのよくして　山本兼豐

眉

少女子か笑めは眉毛の月形に下りていとゝらうたけくみゆ　蓮　久子

鏡

女われみにくかれとも化粧して鏡をみれはなにかたのしき　平岡文子

黛

はやりおふ少女は太き眉そりて墨にて細くなかくひきをり　福井とよ
かみさけてうちかけを着る少女子かひく黛のらうたけき哉　同　人

鬚

年ほきのゐやにときつる新嫁のまるまけ姿うつくしきかな　岡田天留

双六

わりなくもさいは休みといてにけり上り近くもなれる双六　蓮　久龍

麻雀

をり〳〵は雀のさわく音させて若人あそふ夜のふくるまて　竹村仲城

テニス

掌かたくなりけり此日ころテニスをあそひたはむるゝまに　森　年子

化粧

舞扇かさしてたてる少女子のけはひうつくしともし火の影　日木和子

春霜

朝東風にふきかよひしは一日にて昨日も今日も霜白くおく　中野景善
梅見にと里道ゆけはやふかけにおく霜しろく猶のこりけり　蓮久子

書　簡

筆太にかきてけるかなふるさとの家守る父におくる文とて
たらぬ料とらるゝまてに珍しく吾子は長き文おこせけり　蓮久子　福井とよ

末

我力のへてひらかむはてもなくつゝく廣野の末のすゑまて　竹村仲城
目の前の事のみ思ふ世となりぬその行末はいかにありとも　同人

氷　解

初筏下すかけさへのとかなりこほりとけたるありなれの川　伊與田德房
のとかなる春の日さしに谷かけの氷もいまは残らさりけり　土田松人
吹く風もいつとはなしに春めきて氷とけたりさとかはの水　平岡文子
うくひすの聲をきく日もちかゝらむ筧の氷とけそめにけり　土田松人
春風にいけの氷はとけそめてひれふる鯉もあさやかにみゆ　谷川とも子
日當にうかふ目高もかつみえて小田の氷のけさはとけたり　同人
ふき渡る風もなこみて諏訪の海の厚き氷もゆるみそめたり　平岡よし子
檽さすみはかの前の花筒のこほりもけさはとけてうれしき　山本兼豐
埋めたてもはかとるならむ巨椋の池の氷も岸をはなれて　同人

謠　曲

小柴垣打めくらすもゆかしきに謠そもるゝ誰かなりところ　日木和子
世に遠きいてゆのさとの別莊今もうたひの聲のきこゆる　山本はる
小鼓の音もたへなる舞殿にこのみちの師のうたひをそきく　岡田天留
ことほきのうたけの筵賑はひぬめてたき謠つき〳〵に出て　宮崎なみ江
鉢の木をうたひをはりてなさけあるひとの心に涙もよほす　伊與田德房
節まはし知らぬ吾身は聲のよき謠をきけはうましとそ思ふ　福井とよ
きよ水のうてなに立ちて若人か心にくゝも熊野をうたへる　竹村仲城
今日もまたラチオの前に膝つゝみうちつゝ老も謠きくなり　大谷兵甫

閑　庭　鶯

梅の花二ひら三片ちるみえてすきやの庭にうくひすのなく　伊與田德房

古　寺　鶯

あかの井に椿こほるゝ古てらのひる靜なりうくひすのこゑ　中野景善

御　苑　鶯

みそのふを朝きよめする大原女もあふきてそきく鶯のこゑ　日木和子

田　家　梅

なつかしくかをりて我をむかへけりわらやの軒の梅の初花　青木とよ

梅　香　遍

月の瀬のさとわ近くもなりつらむ車の内もうめか香そする　竹村仲城
のとかなる春となりけりゆく處梅のかをらぬ里もなくして　同人

朝　梅

朝またき窓をあくれは軒端なる梅のかをりの先はいり來る　蓮　久子

初　聞　鶯

春着ぬふ手をはとゝめてきゝにけり今朝めつらしき鶯の聲　庄山冬子

隣　梅

隣よりもらひし梅の一枝をかめにさしつゝまらうとをまつ　石橋永吉

牛

田わらはかを草かるまの暫くを牛はねふれり松の木かけに　日木和子

自働車の笛きゝなから先にゆく牛はいそかす田ゐなかの道　福井とよ

子をつれて遊へる牛もみゆるかな日影さしそふ朝の牧場に　日木和子

ふすもあり草はむもゐて日影さす牧場しつかに牛の遊へる　福井とよ

誇かにときつゝ老は見せにけり木彫の牛をあまた出して　大谷兵甫

風　前　柳

渡り來しつはめもみえて出町橋ふく春風にやなきなひけり　蓮　久子

かさゝしてすくる少女をおふか如つゝみの柳風になひけり　福井とよ

おのつから心なこみぬ春風になひく柳のすかたみる時　岡田天留

吹く風にさからひもせて青柳のなひく姿そやさしかりける　黒田こと

わかゝみををり〳〵なてゝ川そひの柳のいとに風渡るなり　平岡文子

のとかなる風のゆくへもしられけり柳の糸の北になひきて　森子

高殿のまとをあくれはふく風にわかかみなつる青柳のいと　日木和子

もえいてし柳うつくし加茂川の水の上渡るかせになひきて　高尾泰司

春風のさそふかまゝになひきけり友まつかとの青柳のいと　同人

ふく風に岸の青柳なひきけり水のおもてをかろくなてつゝ　大谷兵甫

雨をもつ風あたゝかにふきそめて柳の糸のかたなひきする　蓮　久子

赤

いとほしさ一入ましぬ幼子のこゑたるほゝの赤きほてりて　伊與田德房

赤といふことはゝ今の世の親の重きなやみの種とこそなれ　山本はる子

村はつれ背におはれゆく猿の子の赤き衣そひとの目をひく　黒田こと

酒にゑふ翁をみれはおにの如かほもうなしもいろ赤きかな　福井とよ

赤肌の山みえそめぬのる汽車はひかし近江路今かはしれる　中野景善

あやふくも横きる翁をひきとめぬともしひ赤くいつる四辻　竹村仲城

赤き衣身にまとひつゝよろこへり流石は女をさなけれとも　同人

とつき來し昔おほえてなつかしき鹿の子絞の紅のふりそて　日木和子

暗き夜をたとる小路にみゆるかな赤き燈つりしたてふた　蓮　久子

少女子の衣くさ〳〵かはれとも肌着は同しくれなゐのいろ　村田さと

若人の心を赤くそめむとてゝたてめくらすしれものもあり　福井とよ

櫻

わきも子か朝けたくまのしはらくを裏の堤の花めてにけり　伊與田德房

ゑひしれて路にたふるゝ人もあり花まさかりの今日の休日　竹村仲城
櫻もちひさく小店もとひてけり花をみにきて酒のまぬ身は　同人
長き日をあそひくらしぬ醍醐山歌よむ友とさくらかりして　伊與田德房
下かけに櫻餅くふ少女子のすかたもみゆるはなさかりかな　福井とよ
櫻さく園にきはひぬよそほひをこらしゝ人の數多つとひて　平岡文子
こゝよりは車かへさん咲き匂ふ花のしたみち杖をつくへく　中野景善
なりはひにつかれし心いえにけりひと日を山に櫻かりして　大谷兵甫

洗　濯

目にふるゝ汚れ物皆洗ひけりかせにこもりし床をはらひて　森年子
はれ渡る空をみあけて軒高くすゝきものをは妻はほしけり　大谷兵甫
空はれし今日のうれしさ朝のまに洗ひし衣の早くかわきて　福井とよ
學ひ子の送りし荷をは紐ときて今日もひねもす衣濯きする　蓮久子
いつみても子らの衣の清きかな濯きをこのむ母のなさけに　三木正康
よこれみな洗ひおとして竿竹にほせは心もすか〳〵しかり　平岡文子
やすみ日も我はさびしく暮しけり妹は終日きぬをすゝきて　蓮久子

春　海

小波のひた〳〵よする岩はなに花もちりきて海はのとけし　高尾泰司
磯山のさくらのかけに憩ひつゝしつかによする波の音きく　日木和子
少女子か潮干かりするかけみえてのとかにかすむ浦の遠淺　同人

淡路しま霞の中にほのみえてのとけかりけりちぬの海はら　大谷兵甫
淡路しまかすみの奥にほのみえて波しつかなりちぬの海原　伊與田德房
ほの〳〵と沖はかすみて春の海つゝく帆影の動くともなし　黒田こと

平　重　盛

曲りたる老木の陰におひなから小松はいとも直くそ有ける　三木正康
一もとの操正しき小松にはしけるおい木もいろなかりけり　日木和子
小松谷とひて偲へり身をすてゝ父をいさめし人のまことを　青木とよ
いまもなほ教の庭にしけるなり親をいさめし人のことはゝ　山本はる子
なかゝれと願ふ命をなか〳〵にちゝめ給へと君はいのりし　蓮久子

花　供　養

音もなくふる春雨も時にあふ心地せらるゝはなまつりかな　竹村仲城
無憂華をさゝけてゆきし貴人の偲はるゝかな花まつりして　山本はる子
せおはれし子もひさこもて灌くなり盥のなかの小き佛に　蓮久龍
み佛のあれましゝ日をしのひけり花の下道ちこのねるみて　山本はる子
み佛のあれましゝ日とさくら花高くかさしてちこのねり行　同人
竹筒に甘茶もらひてかへり來し昔なつかし今日のまつりに　三木正康
大象をひきてねりゆくちこまても尊くみゆる花のしたかけ　竹村仲城

燈　籠

苔むせる庭をひときはひきたてぬ今年すゑたる古き燈籠に　蓮久子

まなひやに今年いる子にみ社の石の燈籠をかそへさせけり　山木はる子
夜神樂の音もきこえて燈籠の火かけそゆらく神のゆにはに　伊與田德房
池の邊に枝はる松におもむきを一際そへてとうろうのたつ　岡田天留
友かやのすきやの庭もとしふりて苔にさひたる燈籠のたつ　蓮久龍
幼子と共にかそへてみつるかな春日の宮のとうろうのかす　竹村仲城
史にみし人の名もあり廣前にたてるあまたのとうろうの中　同人
子らつれて春日の宮に詣て來てかそへつきせぬ燈籠をみる　蓮久子

殘花

ゆく春にとりのこされて谷かけの若葉かくれに花の匂へる　土田松人
若楓しける谷間にめつらしく薄日をうけておそさくらさく　高尾泰司
あゆ子とふ細谷川のわかはかけひとむら白く花そのこれる　日木和子
すきゆきし春の名殘を止めつゝ葉隱れにさく花もありけり　宮崎浪江
瑞枝さす山の木のまに殘りたる一本さくらいろのさひしさ　石橋永吉
吉野山口と中とは若葉にておくなるはなそなほのこりさく　同人
夏山の谷ふところに咲きのこる花もありけり青葉かけにて　平岡よし子
山駕を出てゝめてにけり比叡のねの若葉にましる八重櫻花　福井とよ
葉櫻をめてにとひ來てゆくりなり殘る花みる滋賀の山おく　大谷兵甫
世の春におくれなからもさきにけり若葉かくれの花の一本　竹村仲城
なか〳〵にうつくしきかな瑞枝さす森に一本殘るさくらは　同人

思ひきや若葉たつねて來し山に殘るさくらの花をみむとは　同人

商家娘

きさかりて物見に來つる人の子に家苞しふる少女さひしも　竹村仲城
ほゝにかみに糠つけなから米をうる店の小娘よくも働らく　三木正康
けふも又毛いと編つゝうつくしき少女店もる町のたはこや　日木和子
客人をとめて土產をはかはせけり里の娘もひとなれのして　大谷兵甫
學ひやの衣をその儘少女子も店にはたらく賣り出しのけふ　福井とよ
わすれ草あきなふ店のはりまとに人目あつむる桃われの髮　同人
かけひきの電話たくみにかくる哉あきうとの子は娘なれ共　高尾泰司
都見の人よひとめて家土產をすゝむる少女こゑもうつくし　竹村仲城
肴うる店のおくよりきこえ來る三味の主やむすめなるらむ　同人
何ものか買はては店を出られす笑みて迎へし少女子のゆゑ　同人
人なれておもはゆけなるさまもなしかひ主をまつ店の娘は　山本兼豐
若人かまはりみちして繪葉かきを求めにくるも娘ゆゑなり　同人
あきなひのかけひき事はすくれけり年また若き娘なれとも　伊與田德房
かひまとふ人を巧にもてなせり年はもゆかぬ少女なれとも　森年子
ゑかほよく我をむかへぬかひなれし菓子やの娘幼けれとも　同人
ものをかふ人にゑみをはさゝけつゝかひ〳〵しくも娘働く　三木正康
くほさをはうるに賢しき眼もちて商人氣質みゆるむすめ子　同人

世のふりにそまぬ娘の月々にかゝさす來けり黄金あつめに　庄山冬子
人みなのせはしけにゆく夕くれの町に花うる少女は誰か子　山本はる子
美くしき少女物うるみせさきは女のわれもたゝすまれけり　日木和子
客人をゑみてむかふる煙草屋の娘はまちのほめものにして　福井とよ

茶摘

陶ものをつくる男もたちましり木の芽つむなり信樂のさと　三木正廉
うの花のにほふ小窓に立よりて今日も聞けり木の芽つむ歌　日木和子
木の芽つむ歌こゑ高くきこゆなり桐の花さく宇治の山はた　同人
青空にうた聲高くひゝかせて木の芽つむなり宇治の少女子　同人
書にあきて窓を開けは夕風に聞えきにけり木の芽つむ唄　同人
鄙うたのふしおもしろくきこえきて茶摘賑はふ宇治の此頃　竹村仲城
賑はしく少女のうたのきこゆなり茶摘さかりの宇治の山畑　青木とよ
黄蘗の寺に詣ててはからすも宇治の少女の茶つみうたきく　福井とよ
大空におよける鯉をなかめつゝ宇治のさとわの茶摘唄きく　同人

母

門のへに又まろひけむ聲高くなきつゝち子は母をよひをり　福井とよ
つくもかみの媼たふとしいく人の子の母として務をへけむ　蓮久子
わくらはに母をはとひてかたるまは少女心に立かへりつゝ　日木和子
さらに又母のつとめのおもりけり今年文屋に吾子の登りて　山本はる子

指をりて我かへる日をまつといふ母の音信に胸うたりけり　青木とよ
母まさはたらぬかちにもいかはかり嬉しからむと思ふ此頃　山本兼豐
いとし子のいふかまに〳〵從ひて諫めぬ母の世に多きかな　竹村仲城
ラントセル重けにおへる子をつれて文屋に急く母もあり鳧　山本はる子
よきにつけ悪きにつけてなき父の若き日語る母のいとほし　同人
千代までも若木の楠のかをれるは雄々しき母の力なりけり　福井とよ
四十へし我身をいつもたらちねはいつくしみます嬰兒の如　伊與田德房
子をもちて今そしりぬるたらちねの我にかけたる深き情を　森年子

大原の里とひてけり比えのねの法の會にゆく人とわかれて　竹村仲城
健けきわれもいりみつ皇の矢疵いえきときける釜風呂　同人
かくれにし昔の人をしのひをれは椿ちるなりあまてらの庭　同人
ゆくりなく青葉のかけに師の君の姿みいてゝ嬉しかりけり　庄山冬子
薄暗き御堂のすみのみすかたはいけるか如く今もあふかる　同人
ゆくりなく迎へまつれる師の君と花めてなから寺回りしぬ　岡田天留
はる〳〵と八瀬の釜風呂とひくれは軒傾きし家にそあり鳧　平岡よし
山裾の道をたとりておほはらの尼寺とへはつはきはなちる　同人
八瀬の里若葉しつけき小はやしにゆくりなくきく鶯のこゑ　宮崎浪江
水車めくる野川のかたきしにつはき花さくおほはらのさと　同人

ちりしける花をみなから小車をまつまも寒し夕くれのさと　同人
ぬり沓に白き眞砂路ふみてゆくはふりか袖にさくら花ちる　蓮久
まつりをへし朝の廣前露にぬれて庭火のあとの黒々とみゆ　同人
大前にぬかつきをれは神樂岡やま鳩なけり木かくれにして　同人
しみたてる杉の木立の朝風にひら〳〵とちる山さくらはな　同人
朧夜にせゝらきの音聞なから歌よむほとのいとまほしかり　同人
こけらふく御堂のうらの崖の上にちかくさきたる石楠の花　同人
散る花もなかるゝ水もさなからに昔をかたるおふ原のさと　同人
水車しつかにめくる音のして射干の花さくたにかはのきし　同人

絲瓜

おもしろく絲瓜たれたり大寺のくりの井のへの藤の棚より　竹村
うつくしき少女もみえぬ今年又絲瓜をつくる草のやのかと　黒田こと
なよひたる蔓にすかりて大きなる絲瓜さかれり庭隅にして　平岡文子
隣家の針金まてものほりけり窓の日よけに植ゑしへちまは　福井よと
綠葉のしけりていとゝ凉しけに長き絲瓜の實そ下りたる　蓮久子
種まきし人はうつりてあき家の軒にわひしくへちま花さく　三木正康
庭隅にうゑし絲瓜の這のひてなり下る實ををかしともみる　岡田天留

音樂

生垣をめくれは高くきこえきぬ窓よりもるゝつまことの音　福井とよ

よそほへるちこも法師もねりゆきぬ律の調に歩みそろへて　蓮久子
畏さにぬかつきをれは神路山かすかにきこゆみ神樂のおと　伊與田德房
師の君の琴の音たへに聞えきて今宵のラチオなつかしき哉　山本はる子
幼子も口眞似をしてをとるなり調へたへなるいと竹の音に　竹村仲城
大井川祭りの舟の渡りけりみやひやかなる樂の音もして　蓮久子
けう一日うきよのさかも忘れけり巧にならす樂のしらへに　同人
尊くもみ神樂の音きこゆなり庭火のけふりゆらくみまへに　伊與田德房
花のことゝもしひ匂ふ高殿にヒアノひきつゝ歌ふこゑする　日木和子
みまつりは始まりにけむ廣前に樂のひゝきの高くきこゆる　同人

梅雨近

栗の花まなくもちりてむしあつし近つきぬらむ五月雨の雨　竹村仲城
麥かりし跡に何をかうゑいそく村人もみゆつゆちかつきて　蓮久龍
さみたれの雨も近くやなりぬらむ栗の老花ちりそめにけり　三木正康
春衣いそきあらはむつゆを近みはれたる空の打つゝくまに　福井とよ
田人らか麥の秋をはいそくみゆ五月雨空もちかくなりきて　三木正康
ぬきすてし衣もいまた洗はねは心せかれぬ梅雨ちかくして　平岡文子
うけらちる庭にしと〳〵雨ふりて梅雨めく空の早も續ける　青木とよ
五月雨の近つきぬらむ蛙さへものうけになく曇りつゝきて　同人
麥秋のとりいれをへて里人は田うゑをせんと五月雨をまつ　石橋永吉

さみたれの近き程こそしられけれ色付初めし梅のみをみて　伊與田德房

犬

垣こしに首さしのへてよひかくる隣の犬とけふもあそへり　岡田天留
よりくれは打たんと杖を身かまへて待ては愈々犬の吠つく　竹村仲城
をさな子か遊ひ敵と貴ひ來し子犬は夜たゝなきてやまなく　伊與田德房
尾をふりて足にまつはる犬の子も寂しき時は友となりぬる　平岡よし
友かりをたつねて鈴をおす軈て人來とつくる犬の賢しさ　三木正康
少女子か遠出にいそく後おひて裙にからめりなれし子犬は　竹村仲城
客人とかたる主のこゑきゝてすのこにすかる犬のかなしさ　福井とよ
ふくる夜を火消車のすきしあとにまちの遠近犬なきしきる　蓮久龍
飼主のよへは和みて耳たれぬたけ〳〵しくもほえたてし犬　竹村仲城
行すりにボチよとよへは尾を振て後に付くる小犬いつくし　福井とよ
幼子を守りかほしてあとさきになりつゝ歩む犬の賢しさ　宮崎浪江
あとゝなりさきとなりつゝかひ犬は守り顔なり小さき主を　蓮久子
ひとの子の及はぬまてにさかしくもあるしの教守る犬かな　同人
人よりも賢かりけりわるものゝ行方をさとく嗅き分る犬　青木とよ
子のために飼し子犬のなれ〳〵て我慰みとなるもをかしき　森年子
おとなしく車のさきをひきなからわか生業を犬のたすくる　大谷兵甫
かへり來し吾足音をきゝわけて尾をふりなから犬の迎ふる　日木和子

かふ人のをしへ守りてさかしくも使にいそく犬もありけり　伊與田德房
かへり來ぬ人ともしらて日毎〳〵うまやに主まちし犬はや　同人

蚊遣

夕かほも待宵草もほのかなりかやりの煙たちまよひつゝ　福井とよ
をちこちに蚊遣の煙打なひきたかぬ吾家もいふせかりけり　平岡よし
青草を庭にいふして牛による蚊をおふもみゆ小田の一つ家　竹村仲城
紫陽花のはひりにさきて蚊やりたく人美しき夕くれの宿　日木和子
咽ひつゝたける柑子の煙にてくつれそめけり軒の蚊はしら　福井とよ
そひねする母は寢入りて枕への蚊遣いつしか火のきえて有　岡田天留
はせをはにかやりの煙たなひきて夕すゝしき山てらのには　日木和子
すや〳〵とねむれる乳子の枕へにかやりの煙細くゆれたつ　伊與田德房
野仕事に疲れし牛をいたはりて蚊やりたくなり小田の里人　土田松人
忙しく晝をかせきし人はいねて蚊やりの煙ひとりたゝよふ　森年子

黒

國のため軍ならしにいそしみて黒くなりたりますらをの顔　土田松人
えらはるゝ人のその名を町角にすみ黒々とかきたてゝあり　岡田天留
おもたちはをかしけれとも常夏の國の少女のいろ黒きかな　伊與田德房
千早振神は許さしたくみにも白をは黒といひくるむともる　山本はる
若やきて友はみえけりいつのまに髭も髪毛もそめはしつ覽　竹村仲城

黄昏に目をのみいたく光らせて黒き牛ゆく田子にひかれて　宮崎浪江

夏田家　伊與田德房

冷し瓜はむ子もあれはひるねする媼もみゆる田ゐなかの家　蓮久龍

蠶は眠り田植はをへし今日の日に餅やつくらむ杵の音する　青木とよ

青田ふく風のいりきてあけ放つ田人かいほそ涼しかりける　同人

田の出來のよしあし語る若人に凉みのあくら賑はひにけり　岡田天留

若人は田くさとりにといてゆきて媼ひとりか麥粉ひきをり

床の置物

久々にかさりかへたる青燒の香爐のいろのなつかしきかな　森年子

もの好む友は佛をあつめきて立てならへたり床もせまし　竹村仲城

少女子のありとしられつ此家のとこのかさりは人形にして　福井とよ

あかゝねのいろもさひたり青貝の卓の上なる獅のおきもの　日木和子

さすかにも武士の家いつみてもよろひかふとを床に飾れる　竹村仲城

人丸の像をは友のおこせけり歌よむきみかとこにおけとて　同人

名所虫

西加茂の尼かいほりのあととへは庭の草生にひるも虫なく　竹村仲城

ふくかせに尾花なみよる大原のひろの〻月にすゝ虫のなく　同人

高雄山紅葉かりしてかへるさの道にしてきく虫のこゑ〳〵　同人

兵士もふるさとのへや思ふらむ虫の音しけし深くさのさと　平岡文子

いとゝしく淋しかりけり吉野山御陵のへになくむしのこゑ　竹村仲城

湯の町の有馬の宿におちつきて心しつかにむしのこゑきく　石橋永吉

朝またきつゆふみわけて大原女か通ふ野道に虫の音そする　蓮久子

近江路の眞野のかや原秋ふけて露よりしけく虫そなくなる　土田松人

樂し

子らは皆おのかむき〳〵世に出て思ふことなく老を樂しむ　竹村仲城

をさな子を中にはさみていもとせか樂しくかたる小車の内　伊與田德房

わくらはに訪ひ來し友も加はりて樂しさまさる歌まとひ哉　日木和子

ぬひものゝ思ひの外にはかとりて仕上の鏝をかくる樂しさ　平岡文子

朝な夕なくる新聞をまち〳〵て見るか何より樂しかりけり　森年子

逞しく生ひたつ吾子の顏みれはこれに上こす樂しさもなし　岡田天留

家の業學ひのわさをはけみつゝ病人のなきわか家たのしも　福井とよ

忙しき中にわつかのいとまえて歌をおもふか樂しかりけり　同人

うま子らを博多へ送る汽車の旅疲れなからも樂しかりけり　同人

友達と須磨を明石をめくりつゝ樂しかりけり今日の一日は　村田さと

夏休み今日は吾子の歸り來と待ちてゐるまも樂しかりけり　同人

はかなこと語り交していつまても家路忘るゝ今日そ樂しき　平岡よし

選ひにはいりもいらすも思ふ事さなから歌と成るか樂しさ　竹村仲城

樂しみの一つなりけり世にいてし子の家々を尋ねめくるは　同人

秋聲

鴨川の堤しつかにくれそめてやなきを渡るあきかせのこゑ　岡田天留

桐一葉おつる音して大寺のいふへの庭にさひしさを添ふ　青木とよ

秋來ぬと早くも門のきりの葉にさゝやく聲そ淋しかりける　黒田こと

町中のせまき庭にもむしなきてさひしき秋を聲にしらする　伊與田德房

かりかねの行方見送るまとの外に音淋しくもおつる柿の實　日木和子

北支事變に際しをりにふれたる

こふひともこはるゝ人も眞心を一針ことにこむるなりけり　平岡よし

兵士のみとりせんとて少女子か血もて願ひの文つゝりけり　岡田天留

情なき仇のしわさをラシオにて聞つゝ老の齒きしりをする　竹村仲城

戰に勝ししらせやくはるらむ鈴の音さへもいさましけなる　青木とよ

兵士の上につゝかなからむを祈りつゝ縫ふ千人はりかな　日木和子

妻と子を家にのこして戰ひにいてゆく人のこゝろをそ思ふ　伊與田德房

いさゆきて雄心ふるへ若人よ老の吾等はあとをまもらむ　竹村仲城

知るしらぬ人もおくりて小旗ふる町をめさしし兵士のゆく　庄山冬子

人足のしけき巷にたゝすみてちひと針をは少女もとむる　三木正廉

千人針ぬひたる布に皇神のみまもりそへておくるひとつま　土田松人

赤たすきかけしますらをけふも又國のみ爲と送られてゆく　岡田天留

をさな子も小旗ふりつゝ兵士を見送りてをりみやこ大路に　伊與田德房

み軍にめされて出る我父をかとへにおくるをさな子もみゆ　同人

心せく道にはあれといく度もちひとはりをは我はぬひけり　福井とよ

理のえわかぬくにをこらさむは銃を取るより外なかるへし　森年子

雨後月

村雨はいつしかはれて雲間もる月さやかなりにはの萩原　日木和子

貰ひ湯をするまに雨のすきゆきて月こそさゆれ歸るさの道　蓮久龍

ゆめうつゝ枕にきゝし雨はれてまとにさやけき月の影さす　同人

木の間より月はもり來ぬ加茂堤まつの雫はまたおつれとも　平岡文子

雨すきて稻葉露もつ千町田にひかりみなきるもち月のかけ　竹村仲城

くさむらにむしの聲して村雨のはれたる軒に月のさし入る　日木和子

山家翁

せにおひし眞柴おろして腰のはす翁のかけもみゆる山みち　伊與田德房

老いたりと思はれぬかな薪おひてけはしき山路歸り來る翁　竹村仲城

わかやきし炭の俵を馬のせにのせておきなは町にいてゆく　庄山冬子

二重こしゝつゝ翁は柴かれり吾子をいくさの塲にたゝせて　伊與田德房

山小屋に久しくすみてのほり來る人のしるへをする翁かな　日木和子

牛の背に眞柴をつみてかへり來る翁のこしのいたく曲れる　蓮久子

貴人か獵のせ子をもつとめきとほこりかにいふ雲ケ畑の翁　竹村仲城

老人はうてをたゝけり鹿うつはまた若者にひけをとらしと　同人

秋田

野稗ぬく人もみえけり豐にも穗波そろひて黄はむ田の面に　三木正康
み軍に召れし人のやからをは今日も助けてをしねをそかる　日木和子
鳥をおふ備へもなりてふく風にたりほなひけり秋の小山田　竹村仲城
虫もなく風ものかれて穗波うつ門田にけふは引板めくらす　蓮久龍
事のある國をは神のもりまして今年の小田のみのりよき哉　岡田天留

燈火

夕もやのつゝめる加茂の向岸ゆらく火影のなつかしきかな　庄山冬子
たよりよき世にはありけり里つゝき燈火赤く道をてらして　竹村仲城
青柳の陰にたゝすむたをやめの横かほ白くてらすともしひ　日木和子
ありかをは仇にしらせし燈火を巧にかくすわさをならひて　青木とよ
みいくさにめさるゝ人やおくるらん燈火つゝく岡こえの道　竹村仲城
よもすから歌を思へは燈火も我かたはらにねふりてそゐる　森年子

暮秋夕

さと川のつゝみの尾花いろあせて夕かせ寒き秋のくれかた　日木和子
少女子もたちましりつゝ庭中に籾すりいそく秋の夕くれ　伊與田德房
殘りたるかゝしの影も淋しかり刈り入れをへし小田の夕暮　岡田天留

防空

いましめのしらせにやかてぬは玉の闇夜となりぬ廣き都も　蓮久子

何處にも燈火もるゝ方そなきひとつこゝろに空まもるよは　岡田天留
女等もたすきかけつゝ空守るならしをはけむ樣のをゝしさ　伊與田德房
たくひなき空のつはもの持つ國は何處の仇か襲ひ來ぬへき　平岡文子
大空の守りかためむ外つ國の仇のせめ來むすきのなきまて　日木和子
人皆の心あはせて國のためそらのまもりをかたくなさなむ　石橋永吉

秋雨

たゝかひにうせつる人の墓しるし白くめたちて秋の雨ふる　竹村仲城
萩の花こほるゝ庭に虫の音もほそ〳〵として秋のあめふる　同人
コスモスの花をみたしてふる雨に遠きいくさの塲忍ひけり　平岡文子
川きしの柳のふる葉さそひつゝ夕さひしく小さめそほふる　平岡よし
山寺の庭の苔路にひるも猶こほろきなきてむらさめのふる　日木和子
ほそ〳〵と虫も音になくこの夕さひしさそへて秋の雨ふる　岡田天留
つはものにおくらむものと千人針とる手冷たき秋の雨かな　三木正康
支那の野に戰ふ友をしのひけりさむき雨ふる庭をなかめて　竹村仲城
秋はきの露重けにもたわみたり降としもなき雨にうたれて　蓮久子

神詣

戰の塲をしのひてひろ前にいのるこゝろはかみうけまさむ　岡田天留
をさな子は鳩とあそへり廣前にぬかつく母のそはを離れて　竹村仲城
上賀茂の社の森のかせの音にこゝろすましぬ朝まうてして　堀田末尚

かしこさに身もしまりけり八平手の音はみ園の森に響きて　竹村仲城
形はかりぬかつきをへて神苑のほし店を見る人もありけり　同人

行路霜

さひしけに裸木ならふ道のへの落葉か上にしものおきたる　村田さと
ましろにも霜そおきたる歌まとゐはてゝ歸りを急く夜道に　日木和子
さゝむかの花のこほるゝ垣根道初霜しろくけさはおきたり　三木正廉
小栗栖の藪かけゆけはひるもなほ霜こそ殘れ葛の枯葉に　蓮久子
ひるも猶霜しろきかなひえとりのなく音も寒き藪かけの道　竹村仲城
米はこふさとの中道霜みえて馬のいふきもしろきあさかな　土田松人
何處までも打つゝくらむ眞金路の枕木しろく霜のおきたる　竹村仲
朝日さす道の片かは早とけてけふりたつなりけさの初しも　同人
乳くはりの車やすきしさやかにも霜にあとある里の朝あけ　同人
はらのみの赤くはえたり朝日さす川そひ小道霜しろくして　樋口貞一
さえし夜のなこりを見せて道芝の上眞白にも霜のおきたる　土田松人
爪先もこほるはかりに寒きかなおく霜白き野路をかよへは　青木と
戰のにはのつはもの忍ひけりしも眞白なる野路あゆみつゝ　同人
自働車のわたち黒くも見えにけりけさ都路にはつ霜おきて　三木正廉
支那そはをうる聲高くきこえ來て大路ま白に霜のおきたる　庄山冬子
家つとの包み持つ手もひゆるなりおく霜白く月にひかりて　樋口八重

かとにいてゝ遊ふうなゐのほゝの色いと赤きかな霜白き朝　山本はる子
朝またきおきわたしたる霜の上にあとをつけつゝ神詣する　平岡よし
落葉しく山かひの道ひるもなほ白く光りぬしものゝこりて　蓮久子

白

少女子か襟足白しうつくしくゆひあけられし髪にはえつゝ　竹村仲城
はしゐして洗髪ほす少女子の白きおもはのうつくしきかな　日木和子
なか〳〵と浮世の風にさらされて眞白になりぬ老の髪の毛　黒田こと
わらやねのつゝく村里靜にてかへいろしろき米くらの見ゆ　岡田天留
大屋根をおほひつくせる布干場いらかの海に白く目立てり　岡田天留
やむ人のみとりにつくすをとめ子のしろき姿そきよく尊き　樋口貞一
なみたもてわれはむかへぬけふもまた驛につゝく白き柩を　岡田天留
客人に白をすゝめてあるし先うち下しけりいしふたつみつ　福井と
酋くも見まもられけり傷つきてかへりし人のしろ妙のきぬ　同人よ
年老いて日々に數ます白きひけ見る度ことに淋しかりけり　竹村仲城
かへり來したけをいたまし傷つける身を白妙の衣に包みて　土田松人
ひきあけしあみのさかなに月さして白くきらめく夕暮の濱　日木和子
白き齒の目立ちたりけり日にやけし兵士達の黒きおもわに　伊與田徳房
白き齒のをり〳〵見ゆる優しさよ口紅さしゝ少女子にして　同人
となりやの水くむ音に戸をくれは有明月のかけしろきかな　高尾泰司

水清きかものかはらのまつなみ木布白々とほしたるかみゆ　樋口八重

冬　旅

冬晴にわらつか並ふ美濃の野を見つゝ渡りぬ揖斐の流れを　樋口八重

裸木に大根をかけてほす家のつゝく里わを今日もすきゆく　岡田天留

小春日のたひそのとけきゆく處茶の花を折りかへり花みて　竹村仲城

ふる里の驛は近くなりにけり雪のけしきをまとにみるまに　福井とよ

大かたは落葉のさとゝなりにけり暫し都を見てのかへりち　蓮久龍

遠く來し友ともなひてあらし山ちり殘りたる紅葉みにゆく　岡田天留

きさの窓みはたす限りひろ〳〵とみかん色つく紀の國の旅　同人

寺々の落葉ふみつゝ御佛のいはれを聞きぬ奈良めくりして　福井とよ

旅日記にひるみし雪の山河を歌にしてかくいてゆわくやと　青木とよ

見る限り雪の野をゆくたひなから冬としもなき汽車の内哉　竹村仲城

北かせのさゆる暇もさむからすこよひの宿の出湯おもへは　同人

雪深き山こえてゆく汽車の旅はや湯の町の見ゆるうれしさ　石橋永吉

舌

女子かいへりいはすといさかへる舌のうこきの喧しきかな　青木とよ

うはへにはほめちきりつゝ陰にては舌出す人の多き世の中　竹村仲城

幼子かきゝ覺えたるいくさ歌まはらぬ舌にふしもつきたり　平岡よし

千萬のいくさをすふる武士もをみなの舌にうこかされつゝ　蓮久龍

舌の色先なかめけりいたつきになやむ人をは醫師見舞ひて　伊與田德房

碁かたきにせめたてられて客人は口をしけにも舌打をする　同人

冬　聲

散りしける落葉の上をふみしめて冬の聲きく森のしたみち　平岡文子

つくはひの氷わる音ひゝくなり朝釜たつるいほのきはに　樋口八重

霜ふかくおきわたしたる枯野原きつねの聲のもの凄きかな　三木正康

埋火をかきおこしつゝきゝにけり霜夜身にしむ念佛のこゑ　福井とよ

寒き夜の町のあなたにきこゆなりみなを唱へて叩く鐘の音　蓮久子

木枯のふきしつまりし谷かけにひゝくもさむき瀧の音かな　土田松人

漁　夫

勝いくさ祝ふさかなのうれゆきに一際きほふ海士の群かな　岡田天留

潮かせにきたへあけたる浦人か釣舟おろすこゑのいさまし　蓮久子

磯によふ子らに答へて大きなるまなを捧けて見する海士哉　平岡文子

うきたからつらねていつるあま人の姿きえゆく夕やけの海　樋口八重

つりえたる魚をは好む酒にかへて歸る翁のうらやすけなり　三木正康

花

小春日に軒の八手の花さきて羽根をやすむる虫もみえけり　樋口貞一

日たまりの岩かけにして一村の水仙さけり紀のくにのふゆ　平岡文子

はりこしに冬の日うけてさきにけり鉢につくれる豌豆の花　山本はる

さひ深く見えにけるかな友かやの庭にひと株さける茶の花　樋口貞一

鵯のむれさわくなる藪かけに目たゝぬほとのひわの花さく　三木正康

落葉たくけふりにくもる山寺の夕のにはにさゝむかのさく　庄山冬子

みそさゝい木傳ふ庭の垣こえて一枝さけりさゝむかのはな　竹村仲城

昨日までめてし紅葉はちりはてゝさひしき庭に茶梅のさく　岡田天留

小春日に山里ゆけは茶の花のかきをめくらす家もありけり　樋口八重

茶の花をいもは一本いけにけり歌おもひゐる部屋の小床に　伊與田徳房

やり水の音もほそりてさむけなる庭のかきねに水仙のさく　同人

落葉たく法の師見えて山寺の垣根にさむくつはふきのさく　日木和子

提灯

母のせにおはれしち子も提灯をもちて祝の列をおひゆく　福井とよ

ゆきくれて吾借來つる提灯に同し道ゆくひともてらしぬ　樋口貞一

宿引は提灯ふりてむかへけり舟のつきたるよるのみなとに　福井とよ

いつくまてつゝくなるらむ町人のみいくさ祝ふ提灯の火は　山本はるよ

弓張の提灯いたくふるひたりなけしにかけし箱をあくれは　青木とよ

木の間ぬふ燈火のかけみゆるなり吾まつ人や歸りきつらむ　日木和子

かちいくさ祝ふこよひはともしひの波こそよすれ都大路に　同人

いくよへし老舗なるらむ軒下につる提灯もいたくすゝひぬ　三木正康

みやしろのけふは祭り日高張の燈火あまた立ちならひたる　蓮久子

夜の道提灯もてる人にあひわかれしあとのくらさいやます　樋口貞一

火のうみを見るこゝちしぬ紅の提灯つゝくみそのふのうち　福井とよ

昭和十三年

初夢

新年のふしと賑はし少女子か富士よ鷹よとゆめえらひして　福井とよ

はかなしと思ひなからも嬉しかりよき初夢を見たる今年は　平岡文子

新年の忘れ始をしたりけりよへのはつゆめかたらむとして　竹村仲城

たから船うけてかへりぬ鞍馬寺よき初夢をこよひ見むとて　蓮久子

この年の幸を占ふこゝちしてうれしかりけりよへの初ゆめ　福井とよ

初夢に寶ふねをはみたりとてねふれる母をおこすかなし子　土田松人

はかなしとしりつゝなほもうれしかり寶の山にのほる初夢　三木正康

子と嫁の年ほき文をよみしよのゆめにみえけり初まこの顔　福井とよ

寶ふねかひとゝのへてよき夢を今年はみむと少女子のまつ　竹村仲城

みとり子は乳房はなして初夢をはや結ふらし笑顔つくれる　伊與田徳房

初夢をみるそうれしき曙のにはにいてたる吾子のすかたを　同人

たから船をりてしとねに敷にけりよき初夢を今宵みむとて　森年子

日のかけに刀一振きらめきてつはものゝ銃ひとしくうこく　平岡文子
あか瓦たまになそへて兵士かならしの塲をはこひゆくみゆ　福井とよ
つく〳〵といくさの塲を偲ふかな日毎わさねる兵士をみて　同人
高くひゝくラッパにつれて兵士の進む足並よくもそろへり　同人
比ひなき吾みいくさをしのふかな魂こもるいくさならしに　岡田天留
敵をうつ技ならしつゝたくひなき日本心もみかくつはもの　三木正康
朝またきたむろの塲におりたちて靴音高くわさはけむなり　森年子

新年雪

少女子かはれきの袂打ふりて羽子追ふにはに雪のふりくる　青木とよ
あらたまの年の始にくむ酒のほろよひなから雪を見るかな　黒田こと
書初をわれもせんとて短册を手にしてみれは雪のふりくる　石橋永吉
賑はしく町をはめくる万歳のそてにかゝれりとしのはつ雪　竹村仲城
心地よく雪はふり來ぬ年ほきの酒にほてりし顔にかゝりて　同人
薄雪に初日かけさす年越しにとのゐをしてのかへるさの道　樋口貞一
暫くはかるたとる手も休めつゝおもしろくふる雪をみる哉　平岡文子
年ほきの酒のゑひをもさましけり雪ふりまかふ道辿り來て　青木とよ
町にあふ友と年ほきかはすまに雪こそつもれ肩も眞しろに　木久龍
しめはりし小舟にのりて保津川を半くたれは小雪ふりくる　樋口八重

よせかき

おもしろくとり〳〵友のかきにけり月雪花の歌をましへて　三木正康
おもひ出のはてなかりけりなき人の扇にのこす寄書をみて　山本はる
筆のあと皆ことなるもなつかしき友かおこせしよせ書の文　平岡文子
そのをりのかたり事さへ偲はれぬ名高き人のよせ書をみて　竹村仲城
仇を守る友なくさめむ文なりぬおもひ〳〵の寄書をして　青木とよ
故ありてつとひにもれし我ためにおくられにけり友の寄書　日木和子
樂しくもけふを過しぬゆくりなくとひ來し友と寄書をして　竹村仲城
室の内にかけてなかめぬなつかしき父のもましる寄書の文　蓮龍
とり出し〳〵てはぬ眺め鳧學ひををへし折の寄書　同人
古反古の中にみいてぬいまは世になき人々の寄書のふみ　平岡よし子
ゆかさりしうらみわすれぬ友とちの心こめたる寄書を得て　山本はる
よせかきに拙けれともしひられて笑の種をまきのこしけり　土田松人

迎春

くち残る古葉の下にもえいてゝ春をむかふる若くさのいろ　福井とよ
とゝのはぬふしに初音をもらしけりひな鶯も春をむかへて　同人

會友

俄にも友つとへけりわくらはにふる里とひし人をとゝめて　竹村仲城
末の子とみまかはれけり孫つれて四十年あはぬ友と集へは　同人
わくらはに村にかへれは我ためにゆ學ひの友の集ひてそまつ　蓮久子

亡き友の事いひいてゝ學ひやのつとひの場も暫しさひしき
幼名をよひて互にかたりけりいまは世に出し友もあれとも　福井とよ

福

誰か家の棟あけならむ工等か福のかみをはになひゆくみゆ
人皆のもとめあせれはあせるほと得かたきものは福にして　福井とよ

待鶯

鶯のとはぬか淋し梅のはなひたひらみひらちりそむるまて
うくひすの一聲もかな春の歌おもひ惱める今日のむしろに
梅の花まとにうつりてうくひすの初音またるゝ山陰のいほ
わか宿の梅の一枝さきしより日ことまたるゝうくひすの聲
去年の日記くりかへしみて待たれけり梅さく庭に鶯のこゑ
氷りゐし筧の水もとけそめて日ことまたるゝうくひすの聲
香ににほふ梅の木かけに友とわれ木の芽煮つゝも鶯を待つ

源實朝

鶴かをかいまも殘れるちゝの木の梢あふきて君しのひけり
みやしろの大木の下にゆくりなくたふれし君か心をそ思ふ
いまも猶殘る公孫樹のかけにゐてしのふもかなし君か昔を
いかはかり言葉の花もにほひけむ齡を神のきみにかしなは
鶴か岡石のきさはしあふきつゝ古きいてふに君しのひけり

蓮久子　三木正康　竹村仲城　伊興田德房　日木和子　樋口八重　平岡よし子　同人　竹村仲城　土田松人　福井とよ　岡田天留　同人　福井とよ　土田松人　竹村仲城　庄山冬子　山本はる子　土田松人　福井とよ　竹村仲城　青木とよ　同人　森年子　日木和子　福井とよ　樋口八重　日木和子　三木正康　青木とよ　樋口八重　蓮久龍

大君に誓ふこゝろをしきしまの道にのこしてちりし人はも

春日

うくひすの遠音きゝつゝ堇つむかもかは堤日かけのとけし
さし渡る春日のかけそうらゝけき種まく人の影もかすみて
芍藥も俄にめくむ日あたりにぬかまほしかり足袋も羽織も
肩掛も荷となりにけり蕗の薹つみつゝあゆむ日あたりの岡
若菜つむ少女の影もみゆるかな春の日影のうらゝけき野に
かけろふのたつもみえけり淀堤よもきつむ背の暖けくして
うくひすの聲きゝなから歌おもふ筵のとかに日影さし入る
蕗の薹かこにみたして陽炎のもゆる野へゆく少女子もみゆ
友と二人うたよみなから大和路の名所めくる春の日たのし
いつしかも睡くなりけり春の日をせに受なから歌思ふまに

子

つはものゝ子にうまれ來て父の顏しらて育つも哀なりけり
子の爲に世を苦しくも渡るなり樂しからむと人はいへとも
戰にうせにし父のこゝろをはつかむと勇むあはれみなし子
歸り路の急かるゝ哉門のへにたちて待つらむあ子を思へは
せはしくも針を運ひて子の爲に晴着ぬひけり夜の更くる迄
老の身も生きかひありと思ひ鳧いくさの場に吾子を送りて

嬉しけに喉をならして嬰兒は堅くはりたる乳房ふくみぬ　森　年子
何事も母ならてはと頼みゐる吾子の眼さしみるかいとほし　同　伊與田徳房人
たらちねの教とともに師の君のさとしをかたく守れ學ひ子　土田松人
產の親はえもみるましき危ふさをみせて世渡る輕業の子ら

土筆

春雨に梅のはなちる四阿のはしらめくりてつくしもえたり　高尾泰司
かけろひのもゆる草生におりゐつゝ土筆揃ふる女子もあり　竹村仲城
さく花を遠くなかめて古城の垣のめくりのつく〳〵しつむ　高尾泰司
すく〳〵と土筆生たり火をつけてやき黑めたる草の趾より　三木正康
見いてたる土筆を又もつみてけり遊ひつかれていこふ堤に　平岡よし子
追分の道にたちたる石地藏めくりてつくしすく〳〵と生ふ　蓮久子
妹にすみれひと束もたせおき姉はさかのゝつくしつみをり　福井とよ
春駒の草はむ野へに少女子か袖うちたれてつく〳〵しつむ　庄山冬子
摘草の中より土筆えりいてゝ父にみすれは笑みて手にとる　石橋永吉
川堤かけろふもえてたんほゝの花のかたへに土筆生ひたり　岡田天留
春風に青き頭をふりなから野路にならへるつく〳〵しかな　森年子
つく〳〵しつみて歸りぬ同胞と桃の花見に來つる野へより　平岡文子

勇ましきもの

ぬきかたき砦にこよひきり入ると水盃をかはすつはもの　竹村仲城

太刀佩きてたてるを見れは吾子乍ら頼もしき哉今日の門出　蓮久子
軍あそひする男子の聲高く進め〳〵とよふかをゝしさ　福井とよ
つはさには傷うけなからいさましく仇うちおとす海の荒鷲　平岡よし子
寫眞に見るも勇ましつはものゝ仇のとりてにつき進むさま　岡田天留
武士の數にいれむと初孫にいさましき名をえらひてそつく　樋口八重
雨とふる玉をくゝりてみ軍の文くはりする鳩のをゝしさ　伊與田徳房

雲雀

麥あをき畑の中道かけろふのもえて雲雀のこゑのほりゆく　青木とよ
打わたす畑には麥の青みつゝひはりの聲のそらにのとけし　山本はる
すみれつむ少女も見えて春の野の青空高くひはり鳴くなり　庄山冬子
比えのねの霞ははれて此朝けあかるひはりの聲ののとけさ　福井とよ
うき雲のなかるゝ中に見出けり聲をたよりに雲雀もとめて　竹村仲城
うらゝけき春日をあみて堇つむ少女も見えて雲雀なくなり　同人
打ちかすむ空に姿は見えねとも雲雀の聲ののとかなりけり　森年子

眠

我なから淺ましと思ふ文机によれはまもなく眠氣さし來て　蓮久龍
目さましのうつはの音をきゝなから又も眠りぬ休日のあさ　同人
いつしかも眠にいりぬ調はぬ歌おもふとて目をとつるまに　樋口貞一
床につくやかても安くねふるなり思ひことなきはした女は　竹村仲城

よまはやと思ひし歌も調はてひとり家守る今日のねむたさ　福井とよ
身のためになるへき話きゝなから居眠をする人のうたてさ　三木正康
夕餉をへて文讀をれはいつしかに眠の神のそとよりて來ぬ　山本はる
子の病よきにむかひて久々にこよひは帶をときてねるかな　同人

暮春山

きゝすなく聲きこゆなり春たけてあせみ花ちる山岨のみち　日木和子
鶯のこゑにもさひのつきそめて藤さく山のはるはたけたり　竹村仲城
花ちりて吉野の山も暮にけりやかてもなかむ山ほとゝきす　土田松人
おそさくらたつねて山路のほりけり鶯の音を谷にきゝつゝ　福井とよ
ちり殘る花ほの白く見ゆるかな春もくれゆく北さかのやま　日木和子

杖

木の枝をにはか作りの杖にしてなれぬ山路を辿り來にけり　樋口八重
かへるさはさすかに足の疲れけりまれの遠出に杖を忘れて　高尾泰司
山に來し記念にせんと求めけり押手をあまたうけし杖をは　蓮久龍
うたてくも思ひ上りし若人か肩いからしてつゑをふりゆく　竹村仲城
なに事かおもひなやめる若人か机によりてほゝつゑをつく　同人
なき母の手なれの杖をとりいてゝ早つくまてに吾老にけり　同人
しきしまの道すゝまはや師の君のあつき教を杖とたのみて　伊與田德房
山のほりこゝしき岩ねふみしめて辿りつきたりつゑを力に　岡田天留

ゆるされてつく鳩杖に老人の高きいさをのしのはれにけり　福井とよ
師の君を杖とたよりてすゝまはやのほるにかたき歌の中山　山本はる人
疵もやゝいえやしつらむ軍人あゆみならへり杖にすかりて　大谷兵甫
思出のたねとなりけりなき父の手なれて黑く光りたるつゑ　日木和子
白妙の衣まとへるつはものかいたはしきかな松葉つゑつく　高尾泰司
鍬とりてわれは守らむ田を畑をよわき孫をは杖とたのみて　森年子
名所のおして入りたる杖あまた翁見せけりほこりかほして　同

草餅

かをりよき餅となれり我つみし蓬のいろもきはやかにして　青木とよ
春の町むしものひさくみせさきに一きははえて草餅の見ゆ　岡田天留
春の野によもきつみ來て吾妹子か造れる餅の色も香もよし　竹村仲城
草の餅うるほし店そにきはへる花見の人のあしをとゝめて　森年子
花かけに赤毛氈のうつりよきみせにいこひて草の餅はむ　岡田天留
野あそひにつみし蓬の色さえて味もよろしき手つくりの餅　同人

力

さかあしき夷もこゑをひそめけり我皇國のちからみとめて　蓮久龍
常ならぬ世をやすらけく渡らなむ國ひとみなか力あはせて　竹村仲城
開けゆく世の樣見れはいなつまの力をうけぬ物なかりけり　伊與田德房
たゝしかる筆の力は千よろつの若人の血をわきたゝせけり　蓮久龍

いくさ船たかひにつくり競ひつゝ國の力をまさむとそする　竹村仲城
學ひやのためしをうくる子のために親も力を傾むくるなり　同人
いなつまの力によりてうつりけり千里隔たる人のすかたも　伊與田德房

筍

家つとに筍ほりてもらひけり八幡のさとのつゝし見に來て　福井とよ
故郷の友かおこせし竹の子は土の香りもなつかしくして　日木和子
竹の子は親をはなれて卯の花の匂ふ垣根に生ひいてにけり　同人
笋を山とつみたる荷くるまにあまたあひけり乙訓のさと　竹村仲城
竹の子のさかりとなりぬ藪かけのつはき花ちる山科のさと　青木とよ
春なから炭ひつこひしき町の朝店にはやも竹の子をうる　松岡遠吾
躑躅見に來つるかへさに竹の子をかひてけるかな長岡の里　竹村仲城
茶摘うたきこゆる宇治の山畑に皮ぬき初めし竹の子も見ゆ　同人
藪陰の道に出たる竹の子を掘らむと子らのあまたつとへる　村田さと
しめりたる土持上けて竹の子のけさは幾つか生ひ出にけり　平岡文子
ちる花の雪の下なる竹の子をほりてそかへるさかの里ひと　土田松人
皮ぬきてめてたきふしのかすそはむ名も千代原のさとの筍　同人
親よりはやかても高くぬき出むほりのこされし園の竹の子　福井とよ
藪陰の道にきはへり昨日今日竹の子はこふくるまかよひて　森年子
雨の日の朝戸あくれは竹の子に花をりそへて大原女のゆく　高尾泰司

酒

皇軍の勝を祝ひてくむ神酒は飲まぬ誓ひの外にそありける　大谷兵甫
たまあへる友のとひ來てのむ酒のこの醉心地何にたとへむ　日木和子
しひられてさけにゑひけむ少女子は宴の筵そとはつしけり　福井とよ
よみをへてわかるゝ友とくみてけり歌の聖に供へつるさけ　蓮久子
くすりそと思ふはかりにのむ酒の一杯にして顔のあからむ　岡田天留
ものいふも躊ひ勝の人なから酒にゑひてはいさかひもする　同人
酒のみて險しくなれりおとなしき日頃の友と思はれぬまて　竹村仲城
時なれは心をしめて青き酒あかき火かけに酌むひともなし　高尾泰司
うらふれし身の上話又するもまはれる酒のいたつらにして　三木正廉
ほと〳〵に酌まは藥となる酒ものみ過してはは身を破るなり　大谷兵甫

若楓

ふるあめにすきやをかこむ若かへて笠傾けて通ひぬけけり　樋口八重
青楓若葉茂りぬをとめ子かきぬをはあらふせとの井のへに　伊與田德房
茄子の苗うゑて水くむ翁のせに打ちしなひけり楓のわか葉　同人
若鮎の昇るも見えぬ稚兒か淵かへての瑞枝うつるなきさに　蓮久龍
深見草くつれはてたる庭の面に凉しくそよく若かへてかな　福井とよ
丹のとりゐ半かくしてなひきけり加茂のやしろの楓若葉は　樋口貞一
くれなゐに匂ふ楓もみゆるかな若葉色そふにはの木の間に　日木和子

み社のにぬりのとりゐひきたてゝ楓の若葉もえ出にけり　平岡文子
をとめ子の衣かへしてたつかけの清くもはえぬ楓わか葉は　竹村仲城
かささして通ひ煩ふふる雨にはひりのかへて若葉しなひて　同人

清

旅やかた清き湯殿はもてなしのあつきにまして心地よき哉　土田松人
ちりの世の汚れをしらぬをさな子の瞳の清さ何にたとへむ　日木和子
靖國の社にねふる我せ子にきよくいきんとちかひたてけり　森年子
いつまてもかはらさらなむ歌の友清き心のましはりをして　竹村仲城
はふり子か白き衣きて大神に仕ふるすかた清くもあるかな　土田松人

夜　水　鷄

苗代の水にうつれる星かけの寂しきよひをくひな鳴きいつ　岡田天留
さなへとる人は歸りて月かけのうかふ田川に水鷄なくなり　土田松人
濱館やとるこのよになく鳥を水鷄ときゝてなつかしむかな　蓮田久龍
二十日月いてゝ宴もはてし夜にくひなきゝけり枚方のさと　三木正康
ほしかけに若あしそよくさと川の堤をゆけは水鷄鳴くなり　山本はる
小なき咲く里の淺川月ふけてこゑすゝしくも水鷄なくなり　日木和子
わたし船つなきすてたるさと川の柳のかけに水鷄なくなり　土田松人
吾宿は小田の一つやさなきたに淋しき夜はを水鷄なくなり　村田さと
野いはらの花の匂へる里川に月かけさしてくひななくなり　三木正康
友とひてかへる月夜のゐなか道芦のしけみに水鷄なくなり　山本はる
はま川のあしまに月の影さして聲さやかにも水鷄なくなり　竹村仲城
川の邊の宿のおはしま靜にて日記つけなから水鷄きゝけり　樋口八重
植つけし門田の水に月かけの淡くやとりてくひな鳴くなり　高尾泰司
風そよく青田靜かに夜はふけて水鷄なくなり月ものほりて　齋藤しん
夜深くも蠶をもりをれは水鷄鳴く聲聞ゆなりせとの棚田に　伊與田徳房
夕月のかけもすゝしき田ゐ中のいほのへ近く水鷄なくこゑ　岡田天留

富

世の中にたることをしる心より外に上こすとみやなからむ　大谷兵甫
こかねこそ家にはつまね月花をめつる心にとみはありけり　岡田天留
何事もたらはぬまゝにたらすともおもはぬ心やかて富なり　樋口八重
こゝたくの罪こそつくれ身にそはぬ富をはえむと願ふ心に　竹村仲城
おのかしし業たのしみで勵むこそみ國をとます基なりけれ　樋口貞一
世のとみをいよゝまさなむ外國に蠶のいとをあまた出して　伊與田徳房
たることをしりて務に勵みなはいよ〳〵まさむ我家のとみ　同人
ありあまる富をつみゐて世の爲に盡す心のなきかおそまし　樋口八重
諸人かつひえ省きて暮すこそやかては國をとますなりけれ　同人
とし〳〵に富そまされるやから皆心あはせていそしめる家　日木和子
吹く風に趾なくきゆる雲よりもはかなきものは人の世の富　同人

わつかなる黄金なりとも貯へて我日の本のとみをまさはや
事たらぬ我家なれとも恵まれし子寶ありて富めりとそ思ふ　福井とよ
力つよきふねをつくるときそふなり國の富をは傾くるまて　同人
なにはつの空を蔽へる煙にもみ世の富こそまつしられけれ　蓮久龍
むつましくやから揃ひてすくす身は富にもまさる幸にして　大谷兵甫
一すちに佛のみちをたとりつゝうき世の富は願はさりけり　村田さと
　　齋藤しん

聞時鳥

比枝のねのみてらを圍む杉の上になきこそしきれ山不如歸　平岡よし子
山百合を折る手とゝめてきゝにけりひえの谷間になく郭公　日木和子
さなへとる滋賀の浦田を比枝のねに眺めてをれは時鳥なく　竹村仲城
都にはいまた來なかぬ不如歸ひとこゑきゝつ比枝の檜原に　土田松人
みいくさの幸をいのりて貴船山ぬかつきをれはなく不如歸　蓮久龍
山のいほに友とつとひて時鳥しはなく聲をあかすきゝけり　伊與田德房
あたこ山ひるも靜けき遠方の杉の木の間にほとゝきすなく　樋口八重
一聲を月に殘してほとゝきすひえのふもと路なきすきに鳧　福井とよ
蜀魂ふたこゑみこゑきゝにけり小舟まつ間の保津の渡し場　同人
杉木立ひるもをくらき比枝のねのうら坂くれは不如歸鳴く　岡田天留
夏の夜は歌おもふまにふけゆきてかたふく月に不如歸なく　齋藤しん
ひとこゑを月に殘して子規いつこのやまにすきていにけむ　平岡よし

蠅

蠅叩き手にしてあたり見まはせは早くもはへは姿かくせり　石橋永吉
甘きものいれたる皿の上に來て頭なてをりはへはあしもて　竹村仲城
をさな子の心もとなき手つきにてうてとも蠅は又逃にけり　伊與田德房
みとり子の眠れる顏に蠅一つおへと又來てとまるうるさゝ　平岡よし
心してすゝきほしたる白布をはへのとまりてまた汚しけり　樋口八重
たへものゝ上に一つのはへのゐてかはむ心のうせて歸りぬ　平岡文子
おひなから母は針をは運ふなりうまいする子に止る蠅をは　庄山冬子

夏湖

伊吹ねに月はのほりて吹く風に涼しさのわく志賀の湖　堀田末尚
網なけて小鮒もえたりかた田浦もの花しろくさける沖にて　蓮田久龍
水尾ひきてこき出るふねの數多みゆ風のすゝしき志賀の湖　樋口八重
まほ片帆すへるか如く入りて來ぬおよきて多き近江舞子に　同人
夕立はあとなくはれて志賀の海舟あそひする人のおほかり　石橋永吉
眞野の浦湖ふく風に行々子のこゑもすゝしきこの朝けかな　竹村仲城
夕立は矢橋にすきてあか〳〵とてる日も涼し鳴のうなはら　蓮久龍
もかりふねへさきに虹のたてる見ゆ夕立すきし志賀の水海　三木正廉
舟うけてあつさをよそにしまめくりするそ樂しきひはの湖　村田さと

閑居

人とはぬ山の庵にすゑものゝ土ひねりしてけふも暮らしつ　蓮久龍
文にあけは鉢の植木の手入してひとりすむ身そ心安かる　竹村仲城
しきしまの道をは友とすむ身には寂しくもなし獨居れとも　同人
山鳩の聲を軒端にきゝなからこゝろしつかに一人ふみよむ　同人
友とへはうたひの聲のきこゆなり庭の枝折戸あけし儘にて　福井とよ
しつかにも月雪花を友として山のいほりに住みなれにけり　平岡よし
誰人かいまもすみけり古のおもかけのこるさかのいほりに　岡田天留
海山の景色を庭にとり入れてみやこをよそにすむ人やたれ　同人

青田

虫よけの灯かけならひて夕風に千町の山田いな葉波よる　竹村仲城
戰の塲のわか子にしらせてむ人のなさけにあを田しけると　平岡よし
見めくれる翁のかほにほゝ笑の波もよるまて青田うつくし　山本はる
ふきかよふ風も凉しく覺えけり見渡すかきり青田つゝきて　庄山冬子
さみたれのはれし此朝すゝしくも千町の青田風にそよけり　岡田天留

戰爭

かつ度にいよゝ兜の緒をしめて長きいくさもたへ忍ひてむ　福井とよ
主なき駒のすゝろに歩み來ぬたゝかひ果したそかれの野邊　蓮久龍
けふも亦子等に見せをり紙芝居いくさの樣を辻にひろけて　福井とよ
かたてやはきためてやはと思ふかな國をかけてのこれの戰　竹村仲城

蜘の子をちらすかことくみ軍に追はれて逃る仇のおそまし　石橋永吉
み軍にせめたてられてにけまとふ仇の姿そあはれなりけり　伊興田德房
つゝもたぬ女なからも日こと〳〵よむにひ文に心をとれり　福井とよ

六月五日時雨會同人西山めくりしてよめる歌の中より

手をらむとたちよる友のかたこえて胡蝶くるへり匂ふ薊に　福井とよ
あみもちて身かまふるあり桂川なかれをわかつ瀨の中程に　竹村仲城
さわかしき人はいなして大井川あくまて河鹿聞まほしかり　同人
苔寺のすきやにをれはしつかなる谷の小川に河鹿なくなり　同人
桂川こゝろなかくもいとたれて水を見つむるひと多きかな　同人
梅の宮あやめの花は過たれといけなつかしみ一めくりしつ　福井とよ
朝風にほしたる布のゆらめきてうつくしきかな桂かはへり　庄山冬子
夏草のしけれる野邊の紅薊とけをよけつゝわかをりてみる　同人
梅の宮をろかみをへて友まてはわれによりくる一むれの鳩　平岡よし
水清き桂の川のかはなみにそこの小石も動くかと見ゆ　同人
歌の友まちあはせけり梅の宮のこるあやめの池をめくりて　樋口八重
古寺の庭の若葉をもるゝ日のちら〳〵うつる青こけのうへ　同人
竹筒の湯呑めてつゝ落柿舍の軒にいこへはかきのはなちる　同人
梅の宮殘るあやめもいろそへて池に枝さす松おもしろし　岡田天留
しけりあふ若葉のかけにしきつめし毛氈の如苔の生ひたる　同人

小倉山歌のひしりのあとゝひてみちひきたへと額きにけり　同人
足とめて汗ぬくひつゝ月讀の神のみそのせみしくれきく　蓮久龍

先生か選評のあとにしるされたる
おもひ出の數もそはりてなつかしさわくこゝちしぬ北さかめくり　幸次

古戰場虫

なく虫の聲そさひしき鳥羽伏見軍のあとはひらけたれとも　岡田天留
戰のあとのいしふみ苔むして虫の聲しけし宇治のかはへり　樋口貞一
茂りあふ草にうもれて衣川つゝみにむしの鳴きしきるなり　石橋永吉
飯盛の山松かねの月かけを打ちあふきつゝむしのこゑきく　岡田天留
月かけはくもにかくれて竹むらの虫の音ほそし山崎のさと　同人
金かさき城の石かきつゆふけてさし入る月に虫のなきいつ　同人
みなと川弓張月のかけおちてしけくなりゆく虫のこゑかな　福井と
そのかみのいくさの樣を偲ひつゝますの浦わに虫の聲きく　同人よ
いとはやも櫻紅葉のちる見えて虫の音さひしみ吉野のやま　竹村仲城
ものゝふの血潮なかしゝ戰のあとたつねきて虫の音きく　齋藤しん

恐しきもの

おそろしと思へは胸にひゝくなり暗の夜道の下駄の齒音も　福井と
堤さへありのあなよりくつるてふ心たゆみはおそろしき哉　竹村仲城
國と國たゝかはせつゝその陰にくほさはかるか恐しきかな　樋口貞一

あれくるふ水の力そおそろしき見るまに家も倉もなかして　曾根和子
おそろしくいまも思へり盗人のわか枕へに立ちしすかたを　伊與田德房
博士てふ位はもてと盗みする人のこゝろのおそろしきかな　村田さと
人の物ねらふくせある男子ときけはまことに末おそろしき　樋口八重
いなつまの光るやかても雷のとゝろ〳〵となるかおそろし　齋藤しん

初秋風

すきや出て萩の花さく庭くれは涼しき風の吹きわたるなり　樋口八重
いねの花いまさかりなる千町田を靜かに渡るはつ秋のかせ　平岡よし
海潮の波のいろにも秋みえて夕すゝしき濱かせのふく　堀田末尚
月くさの露をこほしてさと川の水きは涼しきあき風のふく　曾根和子
ふきかよふ風涼しくもなりにけり秋海棠の咲きそめしには　平岡よし
木の芽煮る室の朝も秋されは軒ふくかせにさひしさおほゆ　蓮久龍
秋風ははやたちぬらむ風鈴の音もさひしくけさはきこゆる　石橋永吉
日さかりはさはかり夏とかはらねと涼しくなりぬ朝夕の風　竹村仲城
百日紅花ちり初めて初秋とおほゆるかせのけさは吹き來ぬ　同人
川そひの柳なひきてをとめ子の日傘の上をあきかせのふく　樋口八重

笑

名をよひてあやせはちこは高聲をあけて笑へり靨つくりて　竹村仲城
いかめしき顏はしたれとものいへは人笑はするしらかの翁　樋口八重

打つとふ中の一人かくす〳〵ともらす笑にみなさそはるゝ　石橋永吉
みとり子のゑめるね顔を眺めつゝそひふす母も共に笑へり　岡田天留
いそかしきひまをぬすみてひと時の笑かひけり俳優をみて　竹村仲城
みとり子は近つく母をみあけつゝ笑顔作りぬ手をは伸して　平岡よし
かたことをいふみとり子は家内に笑の種を又もまきけり　青木とよ
碁にかてる時のくせなる高笑ひけふも聞えぬ父のむろより　蓮久龍
門にたつ子は笑かほして走り來ぬ外出の母の歸るかけみて　森年子

蕈　狩

枯松葉かき集め來てあさりえし茸やきけりひるけせんとて　樋口八重
大きなるきのこ見出し嬉しさに傘破りけりとる手ふるひて　竹村仲城
秋晴の一日を山にすこしけり親しきともときのこかりして　岡田天留
見のこせる蕈みつよつとりてけり友の歩きしあと登り來て　樋口八重
あさり來しきのこかそへて店先に車まつまも樂しかりけり　岡田天留
うれしさに友をよひけり四つ五つ齒朶のかけなる茸見出て　福井とよ
師の君の來まさは共に岩倉のたけかりせんとまちわふる哉　同人

祝　賀　會

ことそきし宴なれとも開きけり父か八十のよはひほくとて　蓮久龍
さかつきの數かさねけり志とけえしともをなかにかこみて　山本はる
客人かしるしを胸に集ひ來てはえ〳〵しかりことほきの場　岡田天留

市となりし祝のうたけひらかれぬ淋しき里も今はひらけて　伊與田德房
けふの宴あるしまうけの嬉しさに仇にはぬかぬ兜ぬきけり　樋口貞一
紅白のとはりを園にめくらしてひらく祝のうたけにきはし　福井とよ
萬代のこゑをかきりにさけひつゝ盃あくるつとひめてたし　同人
よろこひは室にあふれて新嫁のひろめの宴にきはひにけり　平岡よし
よろこひはさす盃にみち〳〵てとよめくけふの祝めてたし　三木正廉
新しきさとのまなひや今日なりてよろこひいはふ盃のとふ　大谷兵甫

閑　庭　萩

片をり戸あけて飛石つたひ來れは苔路しつかに萩の花ちる　樋口八重

夜　萩

こほろきの宿となりけりさよふけて露しとゝなる庭の萩原　福井とよ

古　郷　萩

秋されはわかすみすてし古さとの庭にも萩のさき匂ふらむ　石橋永吉

月　前　菊

すむ月にさそはれいてゝ裏畑の露にぬれたる菊を見るかな　樋口貞一

水　邊　鶉

ふく風に霧はなかれて淀川の岸のかやはらうつらなくなり　竹村仲城

紙

破れても日の丸かける旗紙はちりと共にはすてかたきかな　三木正廉

つはものゝ記念となりし筆のあと紙に聲ある心地こそすれ　土田松人
つゝましく紙を出しぬ少女子をすきやの内に菓子をとる迚　福井とよ人
日にそひて友の病はいえにけりさなから紙をはくか如くに　同
幼子かをはに貰ひし千代紙の色とり〳〵にうつくしきかな　樋口八重人
おそましきおのか心を打ちすてゝ白紙の如ならまほしかり　樋口貞一
いたつらにせられさりけり一枚の紙もみくにの寶と思へは　青木とよ
紙の値の高くなりけり似而非歌の刷卷あまた出る世にして　竹村仲城
けかれをはすゝきなかして手にしたる白紙清し神のひろ前　同
常ならぬ世そと心をひきしめて紙切すらもおろそかにせぬ　同

秋夜長

ひとりゐの秋の夜長のつれ〳〵に手馴の琴もとり出てひく　日木和子
靜にもきくの香こもる室にゐて秋の夜長をうたおもひけり　平岡よし
たのしけにひさこなてつゝ昔とく翁と語れり秋の夜なかに　三木正康
秋の夜はまた半なりむつかしき文のひと卷よみをはれとも　竹村仲城
窓の外になく虫の音を友としてつれ〳〵をやる秋の夜長さ　同
なき細る虫の音を聞く淋しさのいとゝ身にしむ秋の夜長さ　同
先たちし友を吾子をしのひつゝねられぬ秋のよの長きかな　同
いく度か時計なかめて少女子か毛絲あみする秋の夜なかさ　同
夜なかしと思はさりけり蟋蟀の聲をきゝつゝ針はこふまは　福井とよ人

秋の夜は明むともせす珍しらき碁敵をえてうちふかせとも　伊與田德房
ねもやらてかへり來むせをまちをれは一入長し秋の一夜は　同
ぬひものもおもひの外に捗りぬさすかに秋の夜は長くして　青木とよ人
孫も皆いねしつまりし秋の夜の長よを嫁と手あみものする　山本はる
一卷のふみかきをへていまさらに秋の夜長を思ひしるかな　三木正康
虫の音はとたへて月もいりにけり秋の夜なかを歌思ふまに　森年子
秋の夜の長きかうれしみ軍のかちのしらせの文をよむには　土田松人
めさめては忘れ草なとふかしつゝつく〳〵覺ゆ秋の夜長さ　蓮田久龍

貧

世の富をあつめておこる人心これに上こすまつしさそなき　樋口貞一
よの富はまはり持なりまつしとて心おとさす唯はけまなむ　石橋永吉
すこやかに清き朝夕おくる身は心ゆたけしまつしかれとも　岡田天留
上を見す貧しき儘になりはひをいそしむ身こそ心やすけれ　三木正康
ともすれはひかみ心もいつるかな貧しき身には心ねちけて　竹村仲城
惠えぬその貧しさはなか〳〵に惠まるゝより苦しかりけり　同
貧しさをかこつひまたになかりけり終日家の業におはれて　福井とよ人
ともしひの細き光をたよりにて少女子あはれひとの衣縫ふ　日木和子

尾花

ゆく汽車のあふりにゆれて一しきり尾花波たつ山そひの道　土田松人

夕日影さす淀川の中洲はらしら〳〵見えてをはな靡ひけり　三木正康
牛をひく童もみえて夕かせにをはな靡ひけりさと川つゝみ　日木和子
一株の庭のをはなをきりわけて友におくれり月めつるよひ　樋口八重
望の夜に供へし尾花さなからに歌の集ひのかさりとはしぬ　岡田天留

待客

をくるまの蹴込に丁ゐねふれり人をとひたる人をまつらむ　竹村仲城
あかたすきかけし少女か寺庭にあくらならへて客人をまつ　同人

壁

とはすとも富める里わとしられけり並ふ家ゐの白壁を見て　伊與田徳房

炭

手際よく炭さしくへつ少女子かすきやにけふは釜掛むとて　福井とよ

土

すゑものとなりて世にこそ出にけれ山よりいつる信樂の土　土田松人

友

かたりあへは同し縣の人にして親しくなれり旅やかたにて　庄山冬子

時計

時計る器のありて吾つとめおくれしことのなきか嬉しさ　三木正康

硯

なき父かかたみの硯とり出てうたのむしろに加へたりけり　岡田天留

ふるものゝ市をあさりて求めけりよしありけなる形の硯を　同人

海氷

あまふねもとちこめられて氷わる音ひゝくなり港江のあさ　庄山冬子
あさらしのこゑものすこき北の海氷うかへり山のことくに　福井とよ
北の海ゆきかふふねのかけもなし波路さなから氷とさして　庄山冬子
はりつめし氷くたきてゆくふねのあやふけに見ゆ北の海原　青木とよ
小島かともみゆる氷のなかれ來て船路とさせり北えその海　石橋永吉

靜御前のゑに

小田巻の歌もきくらむ心地して昔ゆかしきまひすかたかな　福井とよ
まひをへし人の心をしのひつゝ東をのこもそてぬらしけむ　安藤作一
一筋にせをしのひつゝ舞ふ袖をいかにか見けむ心なきひと　樋口貞
せをおもふ心ふかさに比ふれは淺かりけむよみよし野の雪　竹村仲城
しひられて神のみ前にまひつゝも心は空にせをやこひけむ　平岡よし
かなしみを心にひめてまふ袖に昔をこふるかけも見えけむ　同人
かまくらの臺に立ちてせをこふる心を歌にくりかへしけり　福井とよ

降雪早し

いと早も冬のしるしのみゆるかな時雨にましるけさの初雪　三木正康
霜もまたまれ〳〵なれし我庭の蘇鐵いたましし雪のつもりて　竹村仲城
冬たちて三日といふ日の朝にして初雪ふれり比枝に愛宕に　三木正康

布の子ぬふ妻の心をいそかせてはやくもふれるけさの初雪　竹村仲城
冬來ぬとおもふやかてもふる雪に庭の茶梅さかてしをるゝ　同人
兵士のかりねの夢やいかならむ今年は雪のはやもふり來て　同人
神無月なかはにはやも浪華津のひとおとろかし初雪のふる　伊與田德房
おこたりし身をいましむる心地して袷にて見るけさの初雪　青木とよ

盗人

ぬすみする人の心のはたらきを正しき業にうつしてしかな　竹村仲城
持去りし物はなくとも白浪のよせしあとこそ心地あしけれ　平岡よし
友か家に盗人いると聞し夜は風の音にも目をさましけり　樋口八重
おそろしさいはむ方なし盗人の闇のつきまてているとする時　山本はる
犬のなく聲に目さめてふと見れはしらぬをのこの枕邊に立　竹村文
はつかなるものを盗みて自から世をは狹むる人もありけり　竹村仲城

冬魚

冬川のよとみに魚のひそむみゆ沈む落葉に身をはよせつゝ　大谷兵甫
氷はる小田の慈姑をほるみれはらあらはして鰌いてたり　三木正康
魚とると氷くたきて谷川のよとみにさてをおろすひとみゆ　土田松人
枯れあしをとさしゝ氷とけそめてやせたる鮒の水際ぬひ行　樋口貞一
名に高き明石の海は冬なから鯛つるをふねけさもうかへり　土田松人
ことしまた新卷鮭をおこせたり蝦夷に嫁ける吾子の許より　伊與田德房

手をうてはより來し鯉も冬されは底に沈みて動かさりけり　平岡よし

忙

忙かしくけふもくれけり客人を一人おくれは又ひとり來て　福井とよ
たてかけし琴にもちりのつもりけり厨のわさの忙しくして　庄山冬子
み軍はいそかしからむあまりにも逃足はやき仇をおふにも　伊與田德房
ねすこして掟の時におくれしとゆきつくまての心せはしさ　樋口一
せを務子をまなひにやおくり出す朝の一時いそかしきかな　樋口貞八
髭をそる追たになし終日をおのかなすへきわさにおはれて　樋口重人
ひるけする暇もなくて日のくれぬけふは終日人のとひ來て　竹村仲城
やみてふす人をおもへはいそかしく立働くは身の幸にして　同人
吾好む歌もよみえす日毎〳〵つとめの業にいとまなくして　三木正康
さしせまる事をひかへてかれこれと心くはるか忙しきかな　青木とよ
若人のめされしのちは老の身も内外に事のしけくなりぬる　岡田天留
いそかしき仕事をあまた引うけて今日の一日は短かりけり　大谷兵甫

冬日

澁のいろさはす張籠の乾くまもなくて早くも冬の日くれぬ　三木正康
濯き物かわかぬ儘にとりいれぬ時雨るゝ冬の日の短かさに　岡田天留
ふりつもる落葉ふみつゝゆく道に鵯なきてふゆの日のさす　竹村仲城
茶梅の花のみしろくきはたちてうす日さすなり冬かれの庭　同人

つゝれさす媼も見えて草の屋の南のまとにふゆの日のさす　同
つまとより雪を眺めて暮しけりけふはひねもす火桶抱へて　福井
あたゝけきけふそ嬉しき茶の友とすきやに入て年忘れせむ　土田と
さと川の汀の氷けふもまたとけんともせて暮るゝふゆの日　大谷松人よ

橋

谷川にたふれしまゝの丸木橋炭やくをちもかよひかぬらむ　平岡兵庫
いとし子の病あつきに人橋をかけてまちけり薬師おそしと　竹村仲城よ
安らけく世渡りせんと石橋をたゝきて渡るひともありけり　三木正城し
三井寺のかねをきゝつゝ渡りけり夕日かけさす瀬田の長橋　福井とと
そのかみの丸木のさまをしのひつゝ渡るかうれし新橋の上　青木よよ
苔むして池にかゝれりなにかしの作りつとときく庭のいし橋　竹村仲城
考杉になかはかくれてさにぬりの橋うつくしきかものみ社　樋口八重
神園の石のそりはし沓ぬきて渡らむとするうなゐ子もみゆ　日木和子
九重のみほりにかゝる二重はしいつをかみてもきよく尊し　土田松人
かも川の末はけふりて五條橋かささしてゆく手弱女もみゆ　庄山冬子

昭和十四年

新年松

雪ふりて松おもしろく見られけり初釜たつるすきやの前に　樋口八重
たゝかひの場にも年を迎ふらむ假そめなから松を立てつゝ　石橋永吉
みとりこき根引の松は新しき年のかさりのはなとこそなれ　堀田末尚
兵士もとしを祝ひてからくにのいくさの場に松やたつらむ　大谷兵庫
かはる世に變らぬ松をたてなめて神代なからの年迎へけり　三木正康
さしのほる初日にはえて老松のみとりふかむる新としの朝　平岡よし
老松のいろこそまされさしのほる初日のとけき神の大まへ　岡田天留
新しきとしのはしめは神苑の松のみとりもいろはえて見ゆ　安藤さく
はかためを祝ふむしろに聞ゆなり千代をことほく老松の聲　竹村仲城
さわやかにのほる初日のかけうけて色こそまされ庭の若松　伊與田徳房

古稀賀

七十のよはひかさねし人々をかこみてさとのやしろ賑はふ　岡田天留
まれなりとほかれしけふを百年のよはひの末に語りませ君　伊與田徳房
七十はまれとはいへとわれも經ぬ君は千年のよはひ重ねよ　堀田末尚
七十の坂のほりけり若人におとるともなきすこやかさにて　竹村仲城

孫ひまこあまたつとひて七十のよはひを祝ふけふの嬉しさ　岡田天留

雪の日の歌會

人皆のおもひねるまは歌筵ふふきのおともみみにさはらす　堀田末尚
白雪のつもらはつもれ心あふ友とつとひてうたをよむ今日　竹村仲城
釜かけてまたはやけふの歌筵雪をかして來む友のため　樋口貞一
四阿に歌のむしろもうつしけりふり出したる雪を見かてら　伊與田德房
玻璃こしにつのる吹雪をなかめつゝ友と歌ねる室の靜けさ　青木とよ
湯のたきる音はかりして歌筵しつけかりけり雪しまくけふ　同人
まとの外に雪はふれともみやひをの歌の集ひは溫かくして　伊與田德房
歌むしろたまあへる友の集ひ來て雪見も兼る今日の嬉しさ　石橋永吉
歌おもふ人の姿もさむけなり庭の小笹にゆきのおとして　森年子
炭櫃をは抱へて歌をよむもありふりつむ庭の雪なかめつゝ　竹村仲城
おもしろくふりつむ雪を眺めつゝうたまとゐする北山の里　平岡よし
樂しくも一日遊ひし歌むしろかへさの雪もあしにさはらす　三木正廉
雪の日に初うたまとゐにきはひて言葉の花もさき匂ひつゝ　同人
朝よりあらしふき來てまち〳〵し歌の集ひは雪となりけり　安藤さく

葉書

父よりのたよりはいつも葉書にて好める歌のかへし促かす　安藤さく
つれ〳〵にをりて釜敷つくりけり古き葉書をいかし用ひて　三木正廉

待ちわひし友のはかきのとゝきたり鉛の筆のはしり書にて　樋口八重
つき〳〵に手渡しつゝよみてけり旅の兄より來つる繪葉書　庄山冬子
繪葉書に歌のみかきて送りけり事繁き身のいとまなきより　竹村仲城
小さなる文字をつらねて大方の事かき終へつ葉書なれとも　同人
故里の人となりきとしらせ來し友のはかきの懷しきかな　平岡よし
言の葉の花をもそへておこせたる友の葉書そ嬉しかりける　同人
かきそふる歌に情のこもりゐて嬉しかりけり友のゐはかき　堀田末尚
獨居のけふのつれ〳〵手箱なるゐはかきくりて名所しのふ　青木とよ
めくる旅日こと〳〵の出來事を繪はかきにして家に知する　樋口八重
いつのまに旅に出けむ歌かきて友はおこせぬいせのゐ葉書　福井とよ
今はなき友のはかきを見出てけりひもとく古き書の中より　三木正廉
ふる里の友のおこせしゐはかきはなつかしきかな山の姿も　平岡よし
十言にもたらぬはかきの文なから母の筆蹟なつかしきかな　森年子

社頭梅

みたらしの水もぬるみて二つみつ咲きそめにけり廣前の梅　竹村仲城
初午ののほりなひきてふく風に神のみそのゝ梅かをるなり　日木和子
とりのこす密柑もみえて湯川原のさとの野社梅のはなさく　竹村仲城
目をとちてをろかむ袖に香るなり北野の梅の花さかりにて　平岡文子
すゝのをのはつかになひく春風にかをり來にけり廣前の梅　竹村仲城

武士のさゝけし旗もひらめきてうめか香かをる神のひろ前　森年子
朧夜の空をてらせるみあかしにうきて見えけりひろ前の梅　樋口貞一
ふす牛のかたをかこみてかをるなり北野のみやの紅梅の花　福井とよ
森かけに雪はのこれと加茂の宮御手洗のへの梅さける見ゆ　同人

をりにふれて

國のためいさや子もゆけ孫もゆけ老の我身は家まもるへし　竹村仲城
埋火に炭さしそへて餅やきぬ夜ふけて學ふいとし子のため　安藤さく
ふみわけているかまに〳〵又遠くなりまさりゆく敷島の道　三木正康
國こそり一つ心にはけみなはいかなる仇かきためさるへき　竹村仲城
事のある世にうまれ來て火砲とるすへも覺えつ女われすら　樋口八重
小雪ちる我庭の面のしき松葉かすめて低くうくひすのとふ　同人
さま〳〵の道を歩みてともかくも五十の坂に辿りつきたり　西田チカ
月花を友にてすくる老の身もこゝろゆるめし常ならぬ世は　岡田天留
隙間もる風にめさめて思ふかな支那に仇もる益荒雄の身を　齋藤しん
たゝかひの場にたゝれぬ女われ粥すゝりても國にさゝけむ　福井とよ
なき友を暫しは夢にみるといひし友もかへらぬ旅に出けり　三木正康

柳あをむ

朝東風に都をとりのひろめふたゆらくもみえて柳あをめり　竹村和子
さえかへる風をいとひてこもるまに川添柳めくみそめけり　同人
舞姫のきぬのいろにも春みえて加茂川やなき色そひにけり　同人
角おちし鹿も遊ひて猿澤のいけのほとりのやなきあをめり　竹村仲城
遠かたの山には雪の見えなからつゝみの柳あをみそめたり　伊與田德房
出町橋渡りなからにふと見れはきしの柳のあをみそめたる　福井とよ
かも川のなかれ寒けに見ゆれとものきしの柳はやも青めり　岡田天留
水ぬるむ小川のきしのいと柳青みそめけりはるの日かけに　同人

机

我室にふさはしからぬ文机は友かなさけのおくりものなり　安藤さく
わかむかふ机の上は狹けれとひろく學はむふみのかす〳〵　伊與田德房
業をへて世にたつ兄の讓りくれし机は疵もなつかしきかな　平岡文子
朝夕に業をいそしむまなひ子の机はいともとゝのへのよき　平岡よし
あしもとそゆらきそめたり朝夕に向ひなれたるこれの文机　同人
歌むしろまうけの室の清けなり白布かけしつくゑならひて　岡田天留
少女子か室としりけりうつくしきひと形かさる文机をみて　青木とよ
今も猶いたつらかきのあと見えていとゝなつかし古き小机　伊與田德房
さひしとはおもはさりけり文机を友と朝夕したしむわれは　三木正康

看護婦

兵士の松葉杖にもかはりつゝかひ〳〵しくもみとる少女子　竹村仲城
手の動き眉のうこきにやむ人のなやみはかりて女みとりす　青木とよ

なりはひの心はなれていたつきの人々みとる少女たふとし　樋口貞一
うら若き身をは捧けてつはものをみとりする人尊かりけり　齋藤しん
くすりにも増さる力となりにけり眞心盡すみとりをみなは　森年子
くすしより藥より猶やめる身の力となるはみとりするひと　岡田天留
みとりする人も眠れりいたつきのおこたりそめし心安さに　青木とよ
戰の場に吾身をわすれつゝみとりのわさにはけむ少女子　石橋永吉
疵つきし人にかはりて故郷におくる文をもかけるみとり女　平岡よし
はゝとなりあねともなりてやむ人をみとる女の心ゆかしき　同人
病人を親はらからも及はさるまこゝろこめてみとる手弱女　三木正康
をゝしくも戰の場に兵士のいたてみとるとをとめ子のゆく　平岡文子
戰にめしひし人のみとりする少女は文をよみきかせをり　伊與田德房
神の如おもはるゝかなまめやかに人の病をみとる少女は　竹村仲城
やめる身のいらたつ心なくさめてみとりにつくす少女尊し　岡田天留

若芽さしたり

肩かけを手にしてあゆむ人みえて園の木は皆若芽さしたり　青木とよ
羽蟻とふ影見え初てせとはたの接骨木の芽の美はしきかな　伊與田德房
ふく風もいつか和みて山裾のから松はやしわか芽さしたり　平岡文子
春雨にすきやをめくるかなめ垣色あさやかに若芽さしたり　森年子
春の雪ふり來る庭のかたすみに赤くめくめり芍やくのかふ　平岡文子

みやこ見の人足繁くなりにけりかもの堤のやなきめくみて　竹村仲城
耳原のみさゝきめくるかなめ垣色うつくしく若芽さしたり　三木正康
ほこらかに隣のをちの示すなり柳のつき木わか芽させりと　同人
春雨のはれし朝の庭見れは木々とり〳〵のわか芽さしたり　福井とよ
つくはひの水もぬるみて鉢さきの出潮の楓わか芽さしたり　岡田天留
春雨にぬるゝつはめのかけ見えて門への柳わかめさしたり　同人

應召せられし人の父に

こかねにもまさる寶のいとし子を國にさゝけし譽をそ思ふ　岡田天留
かなし子を君にめされし喜ひを靜かにかたる人そをゝしき　青木とよ
嬉しとも悲しとも見む國のため杖とも頼む子をは召されて　竹村仲城
大君にけふ召されつるひとり子をおくる心そ思ひやらるゝ　庄山冬子
神かけていのりこそすれ戰にいさをを立て歸りきませと　同人
國の爲いさみてゆけるいとし子に親の心もそへてやりけり　福井とよ
見送りの人もほめけり笑なからめされゆく子の門出ほく君　青木とよ
大君のみ楯となりしいとし子を笑みて送れる人のをゝしさ　樋口貞一
生し立し詮のありとや思ふ覽君のみ楯とめされゆく子を　平岡文子

右は竹村を目標としてよまれたれはそのかへしの心を

淋しとも思ふをりあり勇ましく命すてよといひはしつれと　竹村仲城
けふよりは君のみたてと勇みつゝ子はいてたちぬ心安くも　同人

山家藤

茶摘うたきゝつゝのほる山路の松にからみてふちの花さく　庄山冬子
山さとの柴のまかきの上こえてわか紫のふちさきにけり　堀田末尚
もちひうる峠の茶屋のあくらをはひとり占ても藤の花みる　青木とよ
あま雲のゆきかふひまに見ゆるかな樵夫か軒の藤波のはな　樋口貞一
牧場もる友をたつねて山もとのいへに來つれは藤の花さく　安藤さく
雉子なくこゑもきこえて山かけのわらやの軒に藤の花さく　岡田天留
山寺の花もいつしかうつろひてふもとのいほに藤の花さく　同人
そまかやのかとの老木にかゝりつゝさき匂ひけり藤波の花　同人
雉子なく聲もきこえて山のいほのはひりにさけり藤浪の花　平岡よし
とひ來つるさくらはちりて大和路の峠の茶屋に藤の花さく　福井とよ
たにかけに老鶯のこゑもして柴屋ののきのふちさかりなり　伊與田德房
山かけのわらやの軒に水車ゆるくめくりてふちのはなさく　竹村仲城

鐵

ゆきつまる世の樣みせて淋しくも町中にたつくろかねの骨　青木とよ
たえまなく通ふ車にみかゝれて長き眞金路ひかりはなてり　堀田末尚
くろ金の尊さしりて幼子もをれ釘ひろふ世となりにけり　竹村仲城
なへて世にさきたちにけり黑金のこゝたく出る山もてる邦　同人
くさ〳〵の品につくれは鐵は黃金に勝るものにそありける　石橋永吉

黑金のたらぬ我くに古釘もあたになせそといましめにけり　岡田天留
年なかく打捨おきしくろかねの品も世にたつ時は來にけり　森年子

社頭春

花吹雪せにあみなから高麗犬ものとかにすわるはるのみ社　竹村仲城
みあかしに花の白雲うきいてゝ八阪の宮の夜はふけにけり　樋口貞一
ちる花も心ありけにみゆるかな春かせわたる靖國のみや　福井とよ
園の花見に來し人もましるらむいとゝ賑はふ春のみやしろ　竹村仲城
みつかきに鳩もねむりて靜なる神のひろ前さくら花ちる　同人
花よめの姿も見えて世の春をあつめし如しかみのひろまへ　福開と
御酒をつくみこの袂もかろけなり春風そよくすみよしの宮　樋口貞一
うつしゑをとる人多し神苑はさくらの花の眞さかりにして　樋口八重
夜晝のけしめもあらす賑はへり八阪の宮の花のさかりは　日木和子
靖國の宮の春こそ淋しけれ花にも吾子の忍ひ出られて　三木正廉

緞通

客人の來るを待ちけり敷物をかへつゝ室をとみかうみして　青木とよ
松かせの音もことさらすか〳〵し敷物かへて友をまつほと　平岡よし
ことそきし新室なからひきたちぬ友か情のしきものにより　竹村仲城
いととしくはえてみえけり少女子の晴衣つけてすわる敷物　三木正廉
堺にており出したるしきものは花のあやにて床もはえたり　岡田天留

田家杜若

ふくかせにさなへ波よる小田中の伏屋めくりて燕子花さく　竹村仲城
米洗ふをとみも見えてふせいほのせとの井のへの杜若さく　福井とよ
かにとると子らかおりたつ門川のみきはせはめて杜若さく　吉田藤枝
目高おふ童も見えてゐなかやの門の小川にかきつはたさく　樋口八重
少女子かめたかとるとて立さわく池のへにさく杜若かな　庄山冬子
鍬洗ふ田人も見えて池のへのところ〳〵にかきつはたさく　同人
かはつなく聲もきこえて小田山のふせやの庭に燕子花さく　岡田天留
こひのほりたてる田中のひとつ家に色うつくしく杜若さく　同人

傷痍軍人

白衣をせひろにかへてあたらしき庭にいそしむ兵士もあり　庄山冬子
めしひたる武夫もいまは指先の業を習ひて世にたゝんとす　伊與田徳房
彈丸傷もいまは大かたいえぬらむまりなけあひて遊ふ兵士　吉田藤枝
をり〳〵に花をもいけてなくさめむ疵をやしなふ兵士の室　福井とよ
人はみなかしらさけけりめしひたる兵士の乘るを車のうち　庄山冬子
おのつからかしらさかりぬ戰にいたてをおひてかへる兵士　岡田天留
きすいえて今しかへるか湯の町の驛につとふつはものの群　同人
村長におされて今は松葉杖にたよりて通ふもののふもあり　樋口八重
たゝかひに右手失へる兵士かゆんてに文字をかき習ひをり　同人

いえそめしたまきす見せて兵士かはけしかりつる戰をとく　竹村仲城
手さくりに花をもらへる人かなしいくさの場に眼いためて　樋口貞一
赤襷かけていてつるつはものかあし失ひてけふ歸り來ぬ　青木とよ
疵つきて苦しむ見れは敵なから道にすてゝは行れさるらん　堀田末尚
身にうけしたま疵いえてをゝしくも世にたつ業を學ふ兵士　日木和子
まこゝろのかきりつくしてなくさめむきすを養ふ兵士の爲　同人

名所新樹

かし原のゆ庭ひろけて移しうゑし樫の大木も若葉さしたり　三木正
瑞枝さす山をなかめて歌人かおもひねるらし槇の尾のはし　青木とよ
清瀧の岸の若葉の風にゆれて丹ぬりの橋の見えかくれする　竹村仲城
かしかなく聲もすゝしくきこえ來て若葉うつくし清瀧の里　日木和子
鮎をつる人かけ見えてみつえさす楓うつくし保津の川きし　堀田末尚
わたとのを半かくして若かへてさしなひきけり清水のてら　竹村仲城
清瀧のなかれはさみてこく薄くみつえさしたり栂尾のやま　青木とよ
岩の上にゑをかく人のたつ見えて若葉さしたり養老のたき　吉田藤枝

花瓶

美くしと父か求めし瓶なからをしくも花のひきたゝぬなり　平岡文子
何某とつくるたくみの名やあらむ底見まほしきとこの花瓶　竹村仲城
白百合をいけてなかめぬつやくすり程よくいてし青き花瓶　吉田藤枝

なけいれの花もさえけり古渡りの瓶の姿もおもしろくして　石橋永吉
花かめは水のもるなりおもしろき形をめてゝ求め來つれと　竹村仲城
寂のある釉藥のいろに活られし花もさえけり床の小瓶は　同人
土色の花かめなれと宿主は掘り出しものとほこりかにいふ　福井とよ
少女子は野の草いけてなかめけり雲丹のあき壺花瓶にして　同人
歌筵すか〳〵しさを覺えけりわかあさいけし瓶ひとつにて　庄山冬子

閑庭牡丹

あらゝきをてらす夕日のかけおちて牡丹くつるゝ山寺の庭　日木和子
今日も亦友は來すして獨ゐの庭のほうたんくつれそめけり　福井とよ
吸殼のけふり靜かにたちのほるあくらのかたへ牡丹のさく　竹村仲城
虻のとふ音もさやかに聞え來て靜けき庭にほうたんのさく　同人
山住の友かりとへは靜なるにはにほたむのふくよかにさく　安藤さく
蝶ひとつとふ影見えて大寺の庭しつかにもほうたんのさく　日木和子
まねかれて木の芽味ふ友か家のしつけき庭に二十草さく　伊與田徳房
世のとみはねかはぬ身にも牡丹の花の豐けさ見るそ嬉しき　三木正康

蚤

ぬひさしのきぬ振ひけりふと飛ひし蚤の行方に心あわてゝ　吉田藤枝
朝床にみるたにくやしよへ一夜なやまされつる蚤のさし痕　岡田天留
老の目に又逃しけりのみひとつかゆかる孫の肌衣しらへて　福井とよ

犬の子の蚤とりやれは足のへて心地よけにも目を細めをり　平岡よし
よへも亦のみのさしけむ笑なからはひよる孫の腕はれたる　吉田藤枝
旅館まとろむ暇もなかりけり長き一夜をのみのせめつつ　安藤さく
親猿は子猿に乳をは飲せつゝ手ふりをかしく蚤とりて居　伊與田徳房
すや〳〵と眠りし乳子の覺に鳧胸のあたりを蚤にさゝれて　岡田天留
人の目を逃れえつとや思ふらむのみはぬひめに頭かくして　竹村仲城
かゆしとてなく幼子の肌見れはかのこ斑にのみのさしたる　福井とよ
やうやくにねいる軈ものみ一つ襲ひ來りて又目をさます　三木正康

初夏の頃比叡山にのほりて

みとりこき比えの谷間に雨くものむらたつ見えて時鳥なく　樋口八重
雨にぬれし衣ほすとてかけ茶屋にたき火かこめは時鳥なく　庄山冬子
山かこを下りてきゝけり子規ひえの谷間のあとのひとこゑ　福井とよ
比えのねの茶店にひるのはしとれは若葉かくれに蜀魂なく　平岡よし
郭公きゝにと來れはひえのねの若葉隱れにうくひすのなく　竹村仲城
新しき丹ぬりのみ堂たてる見ゆ若葉色よき木の間かくれに　同人
杜鵑きけるかうれし雨の日をいとはて來つる比えの裏坂　青木とよ
種々の小鳥の聲をきゝなからしつかにのほる比えの裡さか　同人
裳立山とひて來つれと奥築の見えぬかわひし雨に煙りて　同人
あめにのみぬれてかへりぬもたて山奥つき處たつね惑ひて　同人

小あちさゐ手をりて歸る友もあり雨雲まよふ比叡の山路に　樋口八重
ほとゝきす初音まちつゝ歌筵ひらくかたのしひえのみ寺に　伊與田德房
杜鵑きくかうれしさ若葉をはめてつゝこゆる比えの山路に　平岡よし
雨そゝく比えの奥山わけいりて歌よむ友とほとゝきすきく　同人
うすくらきみ堂いつれは山門のかけに一本おそさくらさく　福井とよ

選後にものされし先生の歌

つゝしさく山路の雨にぬれなからとひしむかしもおもひてられつ　竹村仲城
うたひとのねむるあたりは心して鳴きもやすくるやまほとゝきす　庄山冬子
あふりほす人の面わもうかひ來ておもしろきかなやまふみのうた　竹村仲城

古寺

廣庭に眞木の大木のしみたちて山鳩なけりみねのふるてら　日木和子
苔むせるいらかに苔の花さきて人かけもなし山のふるてら　竹村仲城
うすくらきみ堂の奥のともし火に佛の目のみ強くひかれり　日木和子
あらゝきを打仰きつゝ法の師のいはれとく見ゆならの古寺　伊與田德房
そのかみの都のさまをしのひつゝ一日めくりぬ奈良の古寺　樋口八重
とこしへに法の光のかゝやきておちつきみゆる比えの古寺　竹村文
色褪せし丹塗のあとの古をかたるのみにてあれぬ山寺　伊與田德房

岡萩

ひくらしの聲もすゝしく聞え來て秋はき咲けり岡こえの道　樋口八重
石文のたてるをかのへ虫なきてあたり靜けし秋はきのはな　日木和子
そことなく虫のこゑして朝かせにまはき花ちる岡越のみち　平岡よし
藥草とりつゝをかをわけ來れはところ〳〵に萩の花さく　岡田天留
つゆの玉やとして萩のはなさけり村雨すきし岡こえのみち　同人
このわたり虫もすたかむ岡ひろく千草しけりて萩か花さく　同人
むしのこゑひるもきこえて山寺の坂の中みち萩のはなさく　樋口一貞
丘の上のすきやのまとに月さして疊に萩のかけうつしけり　同人
法の師かかへりゆく見ゆ夕まくれ秋はき多きをかのみ寺に　三木正廉
古つかを半かくしてをかの上にしけれる萩の花さきそめつ　庄山冬子
新聞をしきものにしてひるけとる親子も見えつ丘の萩はら　安藤さく
みやひをかめてゝ歸りしあとならむをかへの萩に殘る短册　石橋永吉
置あまる露に裳裾をぬらしつゝをかこえ來れは萩の花さく　同人

石

誰か家の庭を飾りてすわるらむあまたの牛かひきてゆく石　竹村仲城
新室の庭つくりすと牛くるまおほ石のせてはこひ來にけり　平岡よし
幾千代の松のしつくかうかちけむ日桁の宮の奥のいしはし　吉田藤枝
白濱のいてゆのつとにもらひけり玉にも似たる五色のいし　福井とよ
漬物にその名あかれるかものさといつこのかとも押石の山　平岡よし
おもしろくしき並へたる飛ひ石をわたりて遊ふ幼子もあり　齋藤しん

いまも猶人のかたみとめつるかな名のある石を硯にはして　岡田天留
おもしろく配りちらして目をひきつ數奇を凝しゝ庭前の石　石橋永吉
ねきことの叶ひし人やさゝけけむあまたならへる石の燈籠　安藤さく
いかにして運ひ來にけむ浪花津の誇となれる城のおほいし　伊與田德房
み鳥居に石なけあけて各も〳〵ねきこと一つ叶へとそ祈る　日木和子
たえまなくおつる筧の音もして苔みとりなるつくはひの石　福井とよ

雷

夕立のたちまちはれて土くさき庭にいつれは又一つなる　樋口八重
ちかわたり今のひとつはおちぬらむ光るやかてもなれる雷　竹村仲城
照りつゝく空の一隅雲たちていかつち神のとほ音きこゆる　樋口八重
干物の竿なけすてゝかけこみつあまりはけしき雷のおとに　福井とよ
なる神のはけしき音に老人は香たきてをり蚊帳のなかにて　同人
土をうつ雨にあつさをわすれはてゝいさましときく雷の音　平岡ふみ
けふも亦雲の峰をはなかめつゝ神の遠音をわひしとそきく　三木正康
おもはすもつきふしにけり火柱のたてるやかてもなる雷に　竹村仲城

房

身のたけに及ふひさこの首かさりひきたてにけり紫のふさ　三木正康
少女子かさせる簪のふさたれて頰にふるゝもうつくしき哉　樋口八重
みにあまる榮とこそすれ尼宮の數珠のみ房の肌にさはりて　三木正康

何人か内にはいます併豫すたれふさ重けにもたれて動かす　平岡ふみ
花嫁かむねにさしたるハコセコの紅のふさ火かけにゆらく　同人
壁かけの額の色紙もひきたちぬ緋房ふたつに色とられつゝ　青木と
かきりなきいさをのほともしのはれて房のみ殘るみ軍の旗　樋口貞一
鰐口にたるゝ大綱房のみを子はかつ〳〵も動かしにけり　同人

池邊月

池のへの芦のそよきも秋めきてうかへる月の影さやかなり　福井とよ
池のおもの蓮の立葉のひまとめて映るもよしや三日月の影　村田さと
いつしかも夜は更にけり池のへの床几に友と月めつるまに　岡田天留
月かけのしろく光れる池の面に小舟棹さすひとも見えけり　平岡文子
誰かまたいけのほとりに來てたてり同し心に月やめつらん　平岡よし
穂薄のゆらく影さへ浮へつゝ池のおもてに月はすみたり　三木正康
露ふかき草生の虫の音もすみて月こそうかへおほ澤のいけ　日木和子
てる月の影くつれけりいけの面に小波よする風のまに〳〵　森年子
音たてゝ蓮の花さくいけのおもにすゝしくうつる有明の月　伊與田德房
歌の友まちつゝ今宵池のへのあくらにひとり月をめてけり　岡田天留
木戸あけて導かれつる友か家の池おもしろく月のうつれる　樋口八重
里の子か菱とる野への古池もきよく見えけり月のさす夜は　吉田藤枝

丘

つはものゝ石文たちてさらに又趣かへぬふるさとのをか　竹村仲城
をさな時おもひうかへてひるかほの花つみて見ぬ故郷の丘　吉田藤枝
をさな時旅ゆく吾を見おくると母いつまてもたちしこの岡　樋口貞一
みとりこき松の下かけ小さなる祠もたてりいそのへの丘　樋口八重
朝またき松ふくかせもしつかにていとすか〳〵し丘越の路　安藤さく
なりところたてまほしくも思ふかな海を見はらす丘の松陰　日木和子
松かせの音に昔をしのひつゝならひのをかの草のつゆふむ　同人
なつかしと見るまにきさはすきにけり昔遊びし故里のをか　青木と
久々にふるさととひてはらからと昔あそひし丘をみめくる　樋口貞一
さわきゐし夕山からすこゑたえて雨にくれゆく日の丘の森　堀田末尚
けふも亦子らの集ひて丘の上にいくさ遊ひの旗ひらめかす　森年子

山家秋

都よりとひ來る人のもてなしにいそかしきかな茸狩のころ　青木と
みねこゆるをしかの聲もきこえ來て夕さひしき深山への里　日木和子
ねかはくはこゝに暫しのやとかりて茸もからむ栗も拾はむ　竹村仲城
常見えぬ都の人もつとひ來てきのこかりするやまさとの秋　同人
百舌鳥のなく聲もきこえて霞網つくろふ人も見ゆる山さと　伊與田徳房
さと神の秋のまつりにまねき來て豐年祝ふをやま田のさと　石橋永吉

煙

おもしろく話つゝけてきく人を煙にまけるわかものもあり　福井と
目も口もあけられぬなり下女かくりやになにかいふす煙に　竹村仲城よ
俄にもこゝろいさめりふみ迷ふ山路の奥にけふり見いてゝ　同人
客人はいまかへりけむ室の内に煙草のけふりゆるやかに立　同人
あけつらひ好む男と太刀打はせられさりけり煙にまかれて　三木正廉
夕されは野面にたけるあくた火の煙の末に田子はきえゆく　樋口貞一
ものすこく火けし車ははせゆきぬうつまきたてる黒煙みて　伊與田徳房

公園菊

いろつきし紅葉をよそにとふ人の菊のみめつる丘山のその　平岡よし
珍らしき菊もとし〳〵さきそひてみるひとおほき岡崎の園　堀田末尚
公の園そにきはふあきはれのけふのやすみ日菊さかりにて　竹村仲城
とり〳〵にたくみこらして作りたる菊さかりなり公のその　石橋永吉
秋はれに縣の人もつとひ來て菊のはな見るおほやけのその　竹村仲城
白衣に香をうつしつゝものゝふかきくめてゝをり公のその　庄山冬子
足もとに野菊かをれり月見むと園のあくらに腰をかくれは　同人
秋はれのけふのよき日そにさはへるきくの香高き公のその　岡田天留
秋草の花さき匂ふおほやけのそのに一きは目たつしらきく　齋藤しん
とり〳〵のいろうるはしくさき出しきくに賑はふ丘山の園　廣瀬久榮

乃木夫人

せと共に神しつまりてものゝふの妻の鏡とあふかるゝ君　樋口八重
大君のみさゝきちかく鎭まりてつかへましけり女なからも　庄山冬子
二人の子國に捧けてせとゝもに君のみ伴にたちし雄々しさ　岡田天留
大君のみあとしたひてせとゝもに刄にふしゝ君のをゝしさ　齋藤しん
二人の子君にさゝけてせと共にみあと慕ひし人そをゝしき　平岡よし
せと共に君のみあとを慕ひけり二人の子をは先にたゝせて　竹村仲城
大君のみあとを慕ふせにそひてよみち急けりますらをの妻　同人
女子の道をつくしてせと共にしたひまつれり君のみあとを　同人
女子のかゝみなりけりせと共に君のみあとをしたひつる人　同人
大君のみあと慕ひしせこに又つゝきてゆきし人のをゝしき　堀田末尚

雨中虫

干秣とりかたつくる足許をあめにぬれつゝこほろきのとふ　樋口貞一
雨ふりて凉しくなりし夕暮を待ちえ顏にもすゝむしのなく　石橋永吉
夜の雨きゝつゝ針をはこひをれは庭のかたすみ蟋蟀のなく　樋口八重
傘さしてひるの虫きく人もあり秋のあめふる北さかの野に　竹村仲城
うすくらき厨の隅にこほろきのなく音さひしき雨の夕くれ　安藤さく
さひしくも千草の中にむしそなくほそき雨ふる夕くれの道　同人
細々とふる夜のあめに端居して秋のあはれを虫の音にきく　平岡よし
ふる雨に羽袖やぬれしなく虫の聲ほそるなりふくる夜の庭　庄山冬子

しと〳〵と雨のふるたに淋しきを又聞え來ぬほそき虫の音　石橋永吉
かひなれし鈴虫の音も雨の夜はいとゝ哀にきかれぬるかな　廣瀨久榮
歌思ふよはにほそ〳〵ふりいてゝすたきし虫の聲細りゆく　岡田天留
虫の音もほそりてこよひふけにけり軒に淋しき雨の音して　同人
村雨におとろきつらむ虫ひとつ緣にとひ來てちゝとなく也　樋口八重

誠

まことある人とならはや朝夕におのか心をみかき〳〵て　廣瀨久榮
ものいひしあとをやかても恥いりぬまこと少き身を省みて　吉田藤枝
あへはたゝ憎さけにいふ兄なから籠る誠はくみしられけり　安藤さく
はちしらぬ外國ひとを導くはたゝ日の本のまことなりけり　樋口貞一
思ふことならさらめやは天地にはちぬまことの心もちなは　三木正廉
交りをつなくいとゝもなりにけりひとの心の底のまことは　平岡文子
交はれはましはる程にしたしみのふかくこそなれ誠ある友　平岡よし
よしや身はいやしかりとも大君に誠をつくす人そたふとき　大谷兵甫
み佛のをしへまもりてひとすちに誠の道をゆかむとそ思ふ　吉田藤枝
濡衣はいつしかかわく時もあらむ誠の道をふみてゆきなは　庄山冬子
事につけをりにふれてそしられける長くましはる人の誠は　福井とよ

海邊紅葉

あさきりのはれゆく島の岩かけに一本匂ふもみちうつくし　中堀喜代

磯松の木の間に見ゆる濱やかたしろき築地に紅葉はえたり　樋口貞一
島門ゆく舟の窓より見ゆるかな夕日にはゆるいその紅葉は　吉田藤枝
いはをかむ波も血汐と見ゆるまて夕日にはゆるいその紅葉　竹村仲城
ふたつみつかへる白帆のかけ見えて紅葉うつくし沖つ島山　同人
磯崎の松の木かけにふねとめてつりをしなから見る紅葉哉　堀田末尚
みつしほに宮島とへは鹿もゐて松の木の間の紅葉うつくし　樋口八重
宮島にゆきかふ舟もにきはへりいそ山紅葉いまさかりにて　平岡よし
繪の如く見えてうつくし宮島の山のもみち葉水にうつりて　岡田留天
兵士のいたてやしなふ濱やかた朝日にはえて紅葉てるなり　同人

猫

心地よき目覺なるらむ猫の子のせを丸くして伸をしてをり　三木正康
いく度か泥のあしあと拭ひけり雨のふる日を猫とくらして　廣瀬久榮
下女かこゑするやかてくりやより猫は逃けけり肴くはへて　福井と
鼠とる爪をかくしてころ〳〵と子らになれても遊ふから猫　吉田藤枝
物陰に何見いてけむから猫のぬき足しつゝしのひよるなり　竹村仲城
ゆくりなく簀子の下に見出けりまた日もあかぬ子猫三四　安藤さく
猫見れはおそ毛立程厭ひゐる吾ともしらてすりよりて來ぬ　同人
外出すと衣ぬきかへてひき結ふ帶にあさるゝ子猫かはゆし　吉田藤枝
いつも來る宿なし猫をけふみれは赤き首輪に鈴をつけたる　樋口貞一

引越にともなひ來つる飼ねこのゐつきて我もこゝろ落つく　淺田とみ
なく聲はいとも優しくきこゆれと鋭きつめを猫はかくせり　平岡よし
少女子の毬にたはるゝさま見れは鼠とるとも思はれぬかな　同人
たまさかにとふ客人にはやなれて猫はいつしか膝に眠れり　福井と
呑あきし乳をは離して親の尾にあさるゝ猫の愛くしきかな　同人
ま晝まの窓に手足をまるめつゝ靜けさ見せて猫のねむれる　岡田天
ひと手さへかりたく思ふ夕くれの厨に猫のすそにまつはる　同人
鼠とる技もわすれて火桶もるおうなとともにねむるおい猫　三木正
厠にもたちかたきかなわか膝にねむる子猫の心地よけにて　同人
捕へては又ころはしてうれしけに毬と遊へる子猫いとほし　大谷兵甫

秋　風

わかれゆく友をのせたる出船のあとさひしくも秋の風ふく　三木正康
野菊さく道にあきつのとふ見えてしつかに秋の風渡るなり　樋口八重
木犀のかをりたゝよふ庭なから萩のこほるゝ風はありけり　同人
渡り來る雁のなく音に窓おせは肌ひやゝけし更くる夜の風　福井と
木犀のかをりを室にさそひ來てかせなつかしきこの夕かな　同人
人とはぬいほりの窓に日はくれてうら淋しくも秋風のふく　三木正康
わか庭に桐のひと葉の音もなくおちてさひしき秋のゆふ風　福井大三郎
村すゝめおとろきたちぬ秋風にひかぬ鳴子も音をたてつゝ　平岡よし

いろつきし小田の稲穂に浪たてゝ秋風渡るさとのゆふくれ　同
人もなき小田に鳴子の音もして夕さひしくあきかせのふく　同人
加茂川のつゝみの柳ちりそめて夕さひしくあきかせのふく　岡田留
白きぬの遍路姿の目にたちてみやこ大路にあきかせのふく　竹村仲城
をさなこの多きをかこつ吾妹子か心せかせて秋のかせふく　同人
ほにいてし高黍の葉をそよかせてふしの裾野に秋風のふく　樋口貞一
零餘子とる子等はかへりてむくらはふ夕の岡に秋風そふく　吉田藤枝
芋の葉のゆらくかまゝに露の玉こぼるゝ見えて秋の風ふく　岡田天留
あくたゝく煙たゝよふみやしろの木立にそよく初秋のかせ　中堀喜代
かりかねのわたるも見えて堅田浦身にしみそめつ秋の夕風　大谷兵甫
をり〳〵に鹿のなく音もきこえ來て秋風寒し小山田の里　齋藤しん

馬

我馬は國にめされつ昨日までかひば運ひし小屋はのこれと　岡田天留
日の丸の額かゝけたる床の間にところえて立つ馬の置もの　同人
のるすへをしらぬおのれとあなとりて道草はむか憎し此駒　竹村仲城
夜をこめていくさならしやはしむらむ月の廣野に駒の嘶く　同人
見るからに末たのもしな打むれてたてかみふるふ牧の若駒　吉田藤枝
年老いて耕へす業にたへすとてうられゆく馬いたましき哉　樋口貞一
重荷つむ車をひきてさか道をのぼる馬のせ汗しとゝなり　樋口八重

ほからかにま子かうた聲きこえつゝ峠の道を馬の下り來る　同
飼主といくさの場にめくりあひて喜こふ駒は人にも似たり　庄山冬子
乾草をわつかなからも送らはやいくさの場の馬をおもひて　同人
はなたれし朝の一時のとかにも親子の馬のくさをはみをり　岡田天留
ひきしめし手綱に力こもりけむひと聲高くこまのいなゝく　福井とよし
かひ主も涙くみつゝ見送れりけふみいくさにめされゆく駒　平岡よし
つはものと同しすかたの赤襷かけたる馬のまちをゆく見ゆ　岡田天留
嚴めしき人をはのせてゆく駒のひつめの音も勇ましきかな　安藤さく
みいくさに召されて馬も勇ましく赤き襷をかけていなゝく　齋藤しん
生死の境をともにせし馬ははらからよりもしたしまれけり　三木正廉

九月廿七日船岡山公園に同人と觀月をして

夕霧のつゝむみやこの町中にほしかと見えて火影またゝく　庄山冬子
月見せし友とわかれて紫野ひとりたとれはむしの音しけし　樋口八重
虫の音に心のこして歸りけりはれてはくもる月を見なから　福井とよ
虫の音をきゝつゝ獨かへりけりふけゆく月の影をふみつゝ　同人
うす雲もいつしかはれて舟岡の松の木の間にすめる月かけ　岡田天留
虫の音をきゝつゝのほる舟岡の松の木の間にすめる月かけ　同人
こゝかしこ歌むしろしく人も見ゆふなをか山の望の夜の月　同人
籔かけの虫きゝなからのほりきて今宵の月を友とめてけり　平岡よし

白雲のうすくかゝりてかけ淡く月はてらせり園のまとゐを　庄山冬子
うすくこく雲のかゝりてをり〳〵に趣かはるけふの月かけ　同人
若人も月のまとゐに加はりてみやひこゝろをくむか嬉しさ　樋口貞一
歌の友まちつゝ山をみめくれは月は雲間にきよくいてたり　樋口八重
そこゝに月見る人の聲すれと我まつ友はいまた來すして　同人
木の間よりもり來る月の光にて友を見いてし時のうれしさ　同人
月かけのをくらき道に足とめて虫をきゝけりふなをかの山　同人
月をせにやまより町を見さくれは色いなつまの光うつくし　同人
いつも來る友の來すして寂しかり仰けは月も曇りかちにて　同人
身にしみてあはれなりけり露しけき眞萩の下の松虫のこゑ　同人
友か家の筧の音をきゝなからあふくみそらに月はさえたり　同人
薄雲はいつしかはれて月の影ふけゆくまゝにさえ渡りけり　同人
やむ吾の心に似たりけふの月はれまも見えす雲のかゝりて　竹村仲城
そここゝに歌むしろしく人も見ゆふなをか山の望月のよひ　同人
けふの月隅なくてらせ支那の野に仇と戰ふつはものも見む　同人

夕時雨

鶺鴒の尾をふる庭のしき松葉音せぬほとにゆふしくれふる　吉田藤枝
おち葉たく煙下這ふ山のいほの夕さひしくしくれふり來ぬ　岡田天留
籾すりの音さひしくもきこえ來て時雨にくるゝ小田中の里　中堀喜代

あくたゝく煙もほそく立つ見えて夕さひしく時雨ふり來ぬ　平岡よし
落葉かきて風呂たき付る黄昏にうら淋しくも時雨ふりきぬ　廣瀬久榮
柿の葉をさそふゆふへの風さえて時雨ふるなり北山のさと　庄山冬子
山寺のかねのひゝきもきこゑ來て夕さひしく時雨ふるなり　平岡よし
山寺の入相つくるかねの音にさひしさそへて時雨ふるなり　齋藤しん
みほとけの前にぬかつく順禮のせにふりかゝる夕時雨かな　同人
さひしくも時雨ふるなり茶梅の花ほのしろき夕くれのには　吉田藤枝
のりかへの車待つまの我心いらたゝせてもゆふしくれふる　伊與田德房
あま人か干網いるゝ夕まくれあわたゝしくも時雨ふるなり　石橋永吉
夕まくれしくれふるなり山寺のかねの音さへ寒くきこえて　同人
ひとしきり又しくれ來ぬ枚方のきく見てかへる夕さひしく　安藤さく
あくたゝく煙も見ゆる小山田の夕くれ寒くしくれそめけり　同人
吹く風に木の葉ちり舞ふ夕まくれ庭淋しくも時雨ふり來ぬ　廣瀬久榮
なき母の柩送りてかへり來る夕の野みちしくれふるなり　福井とよ
落葉かくわらはも見えて山てらの夕さひしく時雨ふるなり　岡田天留

鯨

あさらしのむれて遊へるいそ見えて鯨しほふく大海のはら　樋口八重
はてしなき大海原に夕日うけて鯨の群のしほをふく見ゆ　大谷兵甫
うら〳〵を賑はしにけり鯨船とりしえものを山とつみ來て　福井とよ

熊野浦しほふく鯨とらへむと船つとふ見ゆとほまきにして　石橋永吉
仔鯨の跡おふすかたあはれなり銛にうたれし親としらすて　吉田藤枝
若人はこきいそくなり沖とほくしほふきあくる鯨めかけて　平岡よし
ふねの中にきはひにけりゆくりなく潮ふきあくる鯨浮ひて　岡田天留
いさましくこきいてにけり浦人はしほふく鯨沖にみいてゝ　庄山冬子
若人はみなみの海のはてさしてふな出しにけり鯨とるとて　同人

秋の日奈良にあそひて

花よりもはえてみえけり如月のみ堂の前のもみちはのいろ　三木正廉
春日山みちはかとらすもみちはにより來る鹿に心ひかれて　樋口貞一
老杉のかけに紅葉をふみしめてさをしか立てり春日野の森　同人
紅葉てる木陰に鹿もいこひゐて奈良の神その秋の日のはゆ　大谷兵甫
棹鹿のなく音かなしくきこゆなり春日のもりの秋の夕くれ　同人
紅葉てる奈良の都にやとかりて枕にちかくしかのこゑきく　堀田末尚
繪筆とる人もみえけり春日野の紅葉のかけに鹿を見なから　岡田天留
春日山老木のもみち色深しかなたこなたにしかもあそひて　同人
うたまとゐをへて歸れは並木路もみち散るなり奈良の夕暮　同人
人なれしをしかのせをもなてゝ見つもみち色よき大寺の庭　伊與田徳房
病のなやみもけふはわすれけりうたよむ友と一日あそひて　同人
紅葉よき杜の下道我ゆけはしかもより來てなつかしきかな　平岡よし

淺茅原友に離れてたつしかは角をきられておひえたるらし　竹村仲城
紅葉にはあかねときさに乘にけり心はかりを奈良に殘して　石橋永吉

舊都

高御座いまもそなへてかしこくもみゆきまちけり西の都は　岡田天留
たて札にしるすことはもみやひにて奈良の都の昔なつかし　同人
古の都のあとをみめくりてとほつみおやにあへるこゝちす　庄山冬子
かねの音もみやひこゝろをさそひけり古き都の入相のころ　樋口貞一
いはれ書よむに忙かしたま〳〵に古き都をけふはとひきて　同人
古のみやこなつかし下女もみやひことはをつねにもちひて　竹村仲城
ねかはくは家を町名をのこせかし古き都をしのふよすかに　同人
大寺に社にむかしししのはせて古きみやこのなつかしきかな　同人
みやひたる名のみは町に殘りゐてあとかたもなし古き都は　同人
のとかにもしかとたはるゝ人もみゆ奈良の都は昔なからに　安藤さく
みやしろにはた大寺にいまも猶ふるき都のさまは見えけり　伊與田徳房

昭和十四年十月十六日鳥野先生の御伴して

保津川を下り清瀧にものしてよめる

青苔のいろうるはしき岩の上に野菊花さく保津川つゝみ　平岡よし
保津川のきしにそはたつ鉾杉にからみて涌けり雨の雲あし　樋口貞一
あやふくも瀧を下れは青黑きふちの上にとふねはいてたり　竹村仲城

岩苔のいろうるはしき雨の日に白きせきれいとひて遊へり　安藤さく
見きゝすることを記して忙しき舟の一日もたのしかりけり　平岡よし
師の君のみ伴にけふは保津の川下るかたのし雨はふれとも　同人
師の君をむかへて下る保津川のつゝみけふりて秋の雨ふる　同人
保津川のいはほにあそふせきれいを驚かしつゝ下るはや舟　同人
危くもいはまくゝりて清瀧のはや瀬を下すいかた見てけり　同人
保津かはのはや瀬下れはまかりふち深さしられて水青黒し　同人
かくれ岩ふな底をする音のしてむねとゝろかす保津の早川　竹村仲城
保津下りおもしろきかな又も來む紅葉よき頃つゝしさく頃　同人
ふりはへて師は來ましけり保津川の早瀬下らむ雨は降とも　同人
瀬々の名のときあかしする舟人を友としたしむ保津の早川　同人
老松のいろもはえたりあめの日に友とめてゆく寶來のやま　中堀喜代
飽なくに霧立こむる愛宕山はや見えそめてふな路はつきぬ　安藤さく
舟はたの友の衣は早瀬下すさをのしつくにたえすぬれけり　庄山冬子
きよたきの瀧のたもとに傘さして寫眞とりつ師を中にして　同人
保津の川きりん草さく岩の上をひくゝかすめて鶺鴒のとふ　樋口八重
保津川を下り果せてかへり來るそのひきふねの綱のはり哉　樋口貞一

選後にしるされたる先生の御歌

よみ口のはやさも見えておもしろし下りし保津のはやせにも似て

同し十七日　雨風のはけしき中を丹波山に茸狩して

松か根の小柴わけつゝ大きなる木の子見いてし時の嬉しさ　樋口八重
いまとりし茸の上にふたつみつ松の葉ちるもおもしろき哉　樋口貞一
足もとにかさをつらぬる松茸をみいてしときそ心はをとる　平岡よし
折よくもあめははれ來て師の君と茸狩するけふのうれしさ　同人
師の君をむかへてうれしこの秋は日頃のそみし茸狩もして　岡田天留
振はへて茸狩にと來つる師をたゝにはやらし雨はふるとも　竹村仲城
はれま待つ暫しかほとをうた筵しきてたのしむ山主のやと　同人
契りおきし友はのこらす揃ひけり師の茸狩のみ伴せんとて　同人
老の坂深山さくらの紅葉よし又もとひ來むはなのさくはる　安藤さく

選後にしるされたる先生の御歌

味ひは心にしみてとり〳〵にうれしかりけり栗もきの子も

軍國歳暮

皇軍に召されゆく人かへるひと送りむかへて年のくれゆく　岡田天留
み軍にめされてそゆくますらをか師走の町に名残をしみて　中堀喜代
風寒き師走の町も賑はへりいくさする世とおもはれぬまて　齋藤しん
年の市ゆき來せはしき町中につはもの送るむれも見えけり　庄山冬子
若人のあまためされし村里ももみすりをへて年のくれゆく　岡田天留
たゝかひの場ひろこりて内外にする事多きとしのくれゆく　同人

女手に餅搗をへてつゝましく年をはおくるいへもありけり　吉田枝

みいくさの場に出ゆく兵士をけふもおくりて年くれむとす　山本はる

保　険

年みちし保険を國にさゝけてむ子さへ捧けし人をおもひて　樋口八重

氣休めに保険かけけり我庵をひえのね見ゆる里につくりて　同人

厭ひつる事もわすれてのりにけり保険すゝむる人の言葉に　山本はる人

幼な時かけし保険のいつしかも嫁きゆく子の料となりぬる　岡田天留

生れ日をけふは迎ふる乳呑子に嫁入り保険かけてやりけり　山本はる

安らかに老を送らむそこはくの保険の金もけふは入り來て　岡田天留

嫁く子の料となりけりかくるまは重荷と思ひし保険なれ共　庄山冬子

炭　櫃

歌むしろひらくこよひのもてなしに藁火をたきて炭櫃調ふ　竹村仲城

吸からの高くつもりて夜はふけぬ埋火きえて白き炭櫃に　三木正康

ぬひかけの衣をかたへに打捨てすひつ抱へぬけふの寒さに　安藤さく

又しても灰かきみたす孫のためすひつに櫓かけてけるかな　山本はる

おもひ出の話はつきすなき父のめてしすひつを母と圍みて　同人

支那にゆく友とわかれを惜みけり雪の驛のすひつかこみて　伊與田徳房

木枯もやみてふけゆく雪の夜に炭櫃かこみて歌思ふかな　岡田天留

冬の夜はすひつを友と親しみつ歌をよむにも文つくるにも　三木正康

軒をうつ霰の音をきゝながら歌おもひをりすひつかゝへて　福井とよ

うから皆戯言いひて笑ひをり夕けのあとにすひつかこみて　同人

樂しくもあまた集ひて歌筵けふはひらけりすひつかこみて　安藤さく

友か家の室の大きさしのひつゝ贈るすひつの品えらみする　浅田とよ

雨　垂

いしあやめうゑかへてより雨たりの音しつかなり四阿の軒　伊與田徳房

風除のかこひつたひて雨たりは植木のもとに穴をうかてる　中堀喜代

こもりゐて文よむまとにきこえけり靜におつる玉水のおと　岡田天留

衣ぬふ手をは休めてふと見れは軒の玉水おともしつけし　平岡よし

おもふまゝに歌はならすて默しゐる耳にかしまし軒の玉水　同人

明日の歌おもひつゝけていねかぬる枕につらし雨たりの音　同人

ふくる夜に歌ねりをれはいとゝしく耳たちにけり雨垂の音　同人

板扉うつあまたりの音たてゝめさとき老のゆめさましけり　竹村仲城

おもしろし軒の玉水ひとつ〳〵庭の眞砂におちてあなほる　同人

友は皆おもひねるなりうたむしろ耳たつものは雨垂にして　浅田とよ人

思ふとち暫しもたして歌よめはあはれにきこゆ雨たりの音　三木正康

おもひきや音なくおつる雨たりに石をもうかつ力ありとは　岡田天留

昭和十五年

歳旦

初日さす神のみまへに赤襷かけしをの子のぬかつくも見ゆ　庄山冬子
やすらかに年迎へけり客人もほき文も來てさひしけれとも　福井とよ
島田髷おもげに見ゆる少女子の羽根つくもあり年たてる門　安藤さく
みいくさに從ふ子にもはかための餅そなへて年いはひけり　竹村仲城
万歳のふるき手ふりもおもしろし今日新しき年をむかへて　同人
やから皆うつしゑとりてまかゝやく年の始の記念とはする　樋口八重
まかゝやく年迎へけりやからとちまつ橿原の宮にまうてゝ　同人
とその香の籠れる室に家族とち壽言かはすけさのとけさ　日木松子
み神樂の音もきこえてかもの宮初日のとかに年たちにけり　中堀喜代
新年をむかへてけふの都にもゑひしれてゆく人をみぬかな　安藤さく
雑煮箸をさめてわれも合せけり國をたゝふるラシオの歌に　福井とよ

犒軍

大君のみこゝろこもるねきらひに皇軍人はふるひたつらむ　齋藤しん
つはものは今し驛に着にけり汲みて勸めむ木の芽なりとも　福井とよ
宿をかす軍ならしのつはものに藥湯たてゝまつすゝめけり　樋口八重

銃くみて暫しやすらふつはものに蒸藷おくる翁も見えけり　竹村仲城
寒き日もうまやにいてゝ女らはみいくさ人をたえす犒らふ　大谷兵甫
處女子か眞心こめて犒らへはますらたけをの勇みてそゆく　同人
戰にかちてかへりし人々をねきらはてやは何はおきても　淺田とよ
國の爲勳をたてゝかへり來しみいくさ人をなくさめむいさ　安藤さく
女われ力のかぎりねきらはむ病むつはものゝたむろ回りて　樋口八重
兵士をねきらふこゑもいてぬかな何とはなしに涙くまれて　竹村仲城
ふたつみつ老もぬはせてもらひけりみ軍人におくる下着を　山本はる

追羽子

をとめらは足もそらなりまひ上る羽子の行方に心とられて　吉田藤枝
初荷ひく男も暫し少女子のむれにましりて羽子をおひけり　竹村仲城
年ほきに來し孫らにせかまれて老もかとへに暫し羽子つく　山本はる
振袖の晴着纒ひてうなひ子の羽根つく樣のおもはゆけなる　伊與田徳房
常ならぬ時としもなく少女子の羽根つく樣は和やかにして　同人
追羽子のあそひ敵にしひられて老をわすゝ親もありけり　堀田末尚
晴衣の袂重けに少女子はたちふるまへり羽子をおふとて　岡田天留
少女子は聲ふるはして新年の門へに羽子をつきかはしつゝ　井關ふみ
少女子の金切こゑもきこゆなりとしたつ朝羽子やおふらむ　竹村仲城
松かさりしたる門へに晴着きて少女か友は羽子つききそふ　庄山冬子

少女子か羽子をおふ見ゆ美くしきふりの袂の袖かへしつゝ　福井とよ

福引

くしひきてあたる品物みるまてはをかしさふくむ淡き樂み　樋口貞一
初まとひおもむきそふる福引もとしに因みしものそ多かる　岡田天留
ひきあてし林檎の色に似たる哉もらひに出てし少女子の顏　三木正康
七十の媼かおしろひ引きあてゝうたけの筵しはしとよめく　福井とよ
おもしろきくし引あてゝ老の身も若かへりけり年の始に　同人
やめる身の起上かり小法師引當て嬉しかり鳧けふの集ひに　樋口八重
村長かおかめのおもてひきあてゝ苦笑ひする顏のをかしさ　竹村仲城
かははやと思ひし帚ひきあてゝ嬉しけれとも持あくみけり　同人
宿主のこゝろきゝたるふく引にあきとをはつす宴たのしも　同人
ひとつ〳〵趣きかへておもしろくつくられにけり福引の謎　同人
少女子にふさはぬ大根ひきあてゝ恥かしけにも持かへり行　同人
歌むしろ年の初にとり〳〵のふくひきあてゝ賑はひにけり　岡田天留
白紙のふくひきあてゝ老の身にふさはしき哉けふの集ひに　同人
八十へし老もこよひはひきあてし福故にこそ若かへりけり　同人
八十をはむかへし翁かひきあてゝ花さかせけり福ひきの品　同人
おのれには何かあたると福引にならふ品々のそき見をする　中堀喜代
少女子かおかめの面ひきあてゝ笑ひくつるゝまとゐ樂しも　樋口貞一

福引のなそとくことに歌むしろとよめきたちぬ新年のよひ　山本はる

紀元節

舞ふ鳶もけふは尊くなかめけり梅さく門にみ旗なひきて　福井とよ
高千穗の高嶺おろしのほき歌のつゝ浦々にひゝくけふかな　三木正康
その上のけふをしのへは畝火山なひく霞もたふとかりけり　高尾泰司
動きなき國のみ柱たちしよを壽ほきにけりけふのよき日に　齋藤しん
梅かをるけふのよき日に橿原の宮詣てしてむかしのはむ　竹村仲城
礎はいやかたくして大日本とはにいはゝむけふのよき日を　福井とよ
霜ふみて畝傍詣すためしなき世の今日の日を壽ほかむとて　安藤さく
よき年のこの日にあひて嬉しかりわれ日の本の民と生れて　廣瀨久榮
軒並にみはたかゝけて祝ふかな國の基のたちしこの日を　同人

銃後の務

兵士に文をおくりてはけますかあともるものゝ務なりけり　福井とよ
兵士に憂ひあらせしおのも〳〵わさ勵みつゝあとを守りて　竹村仲城
ためしなき戰なれはうははしるこゝろつゝしめあと守る人　伊與田德房
家の業はけみて國の富ますか銃とらぬ身のつとめなりけり　福井とよ
新しき亞細亞せおひてたつ子らを強く正しくもり育てなむ　中堀喜代
強き亞細亞興し建むといそしめる人に遲れし家をまもりて　安藤さく
つゝとりて戰ふ人におくれしな世の爲己か業をはけみて　竹村仲城

戰へる人のやからを慰めむをりふしことにとひとふらひて
乏しきにたへて業をははけまなむ戰ふ人におもひくらへて
何こともいくさの場を思ひつゝ勉め勵まむ身をはくたきて
たゝかひの場を思ひてますらをのうしろまもらむ力限りに
身の程をつゝましやかに執なして長きいくさの後を守らむ
生活はいかになるとも國の爲しのひてゆかむ言あけもせす
火銃とる人にはうれひ及ほさしよし品々のとほしかりとも
女われ銃はとらねとまこゝろのかきりつくして後を守らむ
さはりなく生したてむと子を守りぬ軍の場のせをは待つゝ
とも〳〵に譽の家のやからをはいたはりゆかむ力あはせて

早春山

ふもと田の芹はあをめと山はまた寒くそみゆる雪の殘りて
春淺み木の下かせはさむけれと梅みるひとに山はにきはふ
みとりそふ小草に春はみえなからまた肌寒し山こえのみち
初午のつゝみの音もきこえきてかすみたなひくいなり神山
梅さけとまた近江路は寒きかな比叡の高嶺に雪ののこりて
ところ〳〵雪は殘れと東山けさはほのかにかすみそめたる

樂隊

名もしらぬ物の音數多調へつゝきく人々をゑはしめにけり

同人　山本はる
同人　内藤美千代
福井とよ　岡田天留
齋藤しん　伊與田德房
伊與田德房　同人
廣瀨久榮　淺田とみ
樋口八重　岡田天留
日木松子
森年子
三木正廉

面白き繪やうつすらむ賑はしく囃しいてけり小屋の中より
涙さへにしみいてけり靜なる國のしつめのおとをきくとき
何店のひろめなるらむ面白くはやしたてつゝ町をねりゆく
兵士のみたま迎ふるものゝ音のきこえてさひし雨の市路に
ひろめ札まきゆく人の影みえて節おもしろく樂の音そする
大人さへみに出るなり賑はしく大路ねりゆくなり物の音に

春山

九十九折子に押れてものほりけり鞍馬の山の花を見にきて
すゝなさく大和くなはら春たけて霞にこもるうねひ耳なし
東山なかめうつくしきのふけふ霞のうちにはなもみえつゝ
春されは色うつくしくさく花に名もなき山も人のとひくる
つゝしをる童もみえてのとかなり霞たなひく八瀨の山みち
名もしらぬ花の一枝たをりつゝのほるもたのし春のやま道
高殿のまとをひらきてあさみとりかすむ朝の山をみるかな
加茂川のはしよりみれは東山ねふるか如しかすみわたりて
くさ〳〵の花の林に鳥なきてほゝゑむことし四方の山やま

忍耐

たへかたきことにもたへて色にすら出さぬ人そ尊かりける
つらきことといかにありとも吾胸に治めて忍へ色にいたさて

竹村仲城　樋口八重
伊與田德房　日木和子
同人　廣瀨久榮
日木松子　岡田天留
安藤さく　廣瀨久榮
福井とよ　齋藤しん
日木松子
福井とよ
内藤美千代

大谷兵甫
平岡よし

人の股くゝりしもあり大なるのそみのために恥をしのひて　竹村仲城
何事もしのへと母にさとされてとつききにけり吾若きころ　樋口八重
暫らくは耐へ忍ひてむ思はさる譏りをうけて悔しかれとも　廣瀬久榮
慰むる吾こととのはにいたつきの惱をしのふかなし子あはれ　日木松子
戰の塲を思ひてしのひてむもののみなたらぬ世にしあれとも　同人
笑をはたへしのひけり少女子か身ふりをかしき客人の前　福井とよし
襲ひくる世のうき節ももものとせす忍ひ〳〵て國につくさむ　平岡よし
家内に波たゝせしと心にはそはぬことさへたへしのひけり　森年子
くるしみも怒もしのふこゝろこそ事なしとくる基なりけれ　大谷兵甫
いたてをは身に負ひなから益荒雄のしのふ心を尊くそ思ふ　樋口八重
とやかくとスフの布をもいはすして堪忍はなむわれら國民　同人
おたしかる世をは目さして誰も皆たへ忍ふなり今の苦しみ　内藤美千代

梅見頃

初午のかへさに梅の見頃をはたつねきにけり岡もとのさと　三木正康
歌むしろひらくけふしも庭前の梅の見頃となるかうれしさ　石橋永吉
鶯のきなくもうへなとなり家の垣根の梅はいまみころなる　庄山冬子
日當りに翁はひとりたゝすみていま見頃なる梅をめてをり　樋口貞一
月ケ瀬の梅は見頃と筆太にかき出されたりうまやのまへに　大谷兵甫
けふも亦とひくる人の多きかな山のふもとの梅のみころを　内藤美千代

白濱のいてゆかへりにみつるかな南部の里の梅のさかりを　樋口八重

困

むつかしき筵にけふは招かれて禮しらぬ身は困りはて鳧　石橋永吉
まの當りほめそやされて困り鳧穴たにあらはいりたき迄　樋口八重
一日たになくて叶はぬ物すらもたらぬかちにて困る世の中　堀田末尚
まち遠くおもひしものを歌筵けふはよみえて困りはてけり　中堀喜代
人並によむへきすへをしらすして歌の集ひに來て困りけり　廣瀬久榮
野中道雨ふりいてゝ困りけり暫しやとかるかけもなくして　齋藤しん

麥秋

ほろ〳〵と桐の花ちる山畑に麥かるをのこけふもいそしむ　日永松子
麥刈に巣たちおくれし雲雀の子おひまはす子もみゆる山畑　内藤美千代
赤襷かけしをとめのかけみえて麥かりいそく山もとのさと　岡田天留
たけのひし苗代小田を中にしてむきかりきそふさとの人々　同人
五月はれふしおもしろくうたひつゝ赤き襷のをとめ麥うつ　内藤美千代

俚謠

なつかしきふしそこもれる少女子か草刈つゝも歌ふひな唄　日木松子
けふも亦出雲なまりのはしためか口すさみをり安來節をは　樋口八重
髭白きをちは濁聲はりあけてふしおもしろくひなうた唄ふ　竹村仲城
村はつれ文屋をたつる工らのうたおもしろし鄙ひたれとも　山本はる

しる人もまれになりたる古里に昔なからにのこるひなうた　日木松子
村長もゑみつゝけふはいてゆきぬラシオの前に歌唄ふとて　中堀喜代
幼子はひとつおほえし鄙歌をはつかしけにも唄ふなりけり　堀田末尚
國々のうたの樣々きこえきてこよひのラシオおもしろき哉　山本はる
賑はしきはやしにつれて唄ひ出るふしもなつかし里の鄙歌　平岡よし
とり〳〵に節面白きひなうたにまたみぬ里をおもひやる哉　同人
はからすも磯ふしきゝて懷かしき我ふる里の忍はれにけり　岡田天留
市人もまねてうたへり島少女ふしおもしろく唄ふおけさを　廣瀨久榮
いかめしき父にはあれと宴にはいつも木曾節うたひ出せり　樋口八重
おもしろし今宵らしおに小原節えその追分つき〳〵に出て　竹村仲城

海邊花

さゝえやく宿にいこひてくれうめし磯山陰の花をみるかな　福井と
かひ拾ふをとめもみえて船玉の社のほとりさくらはなさく　竹村仲よ
あまの子に棹をさゝせて磯山の花のさかりを舟よりそみる　同人城
磯山の花に名殘ををしみけりふねのいてゆく時のせまりて　中堀喜代
つはものゝいたて養ふ濱やかた朝日にはえてさくら花さく　岡田天留
兵士をのせたる舟はいてゆきていそへの花に朝日かゝよふ　福井と
打よする波に足袋をはぬらしけりいそへの花に心ひかれて　樋口八重

戰の贄としなりてかゝはりのなき吾ふねもしつめられつゝ　竹村仲城
大砲のわさはひうけてくつれたり名高き城も影のなきまて　三木正康
涙さへにしみいてけり戰にやふれしさまをうつしゑにみて　伊興田德
名に高きそなへの城も草むして荒野となりぬたゝかひの跡　中堀喜代
から國のたからとめてし寺まてもやけうせにけり戰のあと　福井と
敗いくさうゝく國民あはれなり親子はわかれ家はやかれて　同人よ
つみもなき支那の國人たゝかひに身一つたにもおき所なき　安藤さく
戰へる國のならひとしる〳〵も物乏しきかわひしかりけり　同人
幾年も續くいくさのわさはひにおはるゝ國の民あはれなり　齋藤しん
たゝかひにおはれ〳〵てこゝ彼處飢に苦しむ民やいくはく　岡田天留
外國の戰なりとよそことにきゝすこされぬ世となりにけり　樋口貞一

時鳥頻

しろゆりのかをる谷間にこたましてひるもしはなく山時鳥　樋口八重
杜鵑ひるもしきりになのるなりうつ木花さくみやまへの里　齋藤しん
ほとゝきすなき頻る也さつきさく保津の川への若葉隱れに　竹村仲城
經うつすみ寺の庭の若葉かけひるもしはなく山ほとゝきす　日木松子
雨雲のひくゝたれたる山路來てこゑををしまぬ不如歸きく　平岡よし
ほとゝきす聲も惜ますすみ渡る月の夜空をなきて過きゆく　石橋永吉
湯の山にやとるひと夜を時鳥耳なるゝまてきゝあかしけり　三木正康